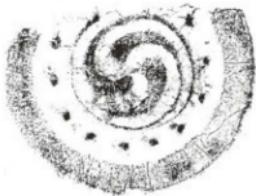




高松市埋蔵文化財調査報告 第107集

屋島寺宝物館改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

屋島寺



2007年10月

高松市教育委員会



例　　言

1 本報告書は、宗教法人屋島寺が計画した宝物館改築工事に伴う発掘調査報告書で、高松市屋島東町に所在する屋島寺（やしまじ）の調査報告を収録した。

2 発掘調査地ならびに調査期間は次のとおりである。

調　　査　地：高松市屋島東町 1807 番地

発掘調査：平成2年4月5日～平成2年5月31日

3 発掘調査および整理作業は、高松市教育委員会が担当した。発掘調査費用は屋島寺が、整理費用は高松市教育委員会が負担した。

4 発掘調査は、高松市教育委員会文化部文化振興課 文化財専門員 川畠聰が担当し、末光甲正（讃岐文化遺産研究会）がこれを補佐した。さらに、香川県教育委員会からの派遣を受けて、同事務局文化行政課 岩橋孝氏（当時）の指導を随時受けた。また、調査図面作成にあたって、文化振興課 文化財専門員 山元敏裕および非常勤嘱託 中西克也が補助した。整理作業は川畠があつた。

5 本報告書の執筆・編集は、川畠が行った。ただし、第2章は、本市教委報告書第62集「史跡天然記念物屋島基礎調査事業調査報告書Ⅰ」から抜粋して作成した。

6 発掘調査から整理作業および報告書執筆を行うにあたって、下記の関係諸機関ならびに方々からご教示を得た。記して厚く謝意を表すものである。（五十音順、敬称略）

香川県教育委員会、屋島寺

7 挿図として、高松市都市計画図 1/10,000「高松市3」および 1/2,500「屋島2」を一部改変して使用した。

8 本報告の高度値は海拔高を表し、方位は第1～3・45・47・48・55図が真北を、それ以外は磁北を示す。方位がない地図は、上が北を表す。

9 本書で用いる遺構の略号は次の通りである。

SB：掘立柱建物跡 SD：溝 SK：土坑 SP：柱穴 SX：不明遺構

10 発掘調査で得られたすべての資料は高松市教育委員会で保管している。

目 次

第1章 調査の経緯と経過	1
第2章 地理的・歴史的環境	
第1節 地理的環境	2
第2節 歴史的環境	3
第3章 調査の成果	
第1節 調査の方法	6
第2節 調査地の概要と基本層序	6
第3節 遺構および包含層と遺物	12
第4章 まとめ	
第1節 遺構および包含層（整地層）の変遷	52
第2節 調査の結果	53
第3節 屋島寺の変遷	54
第4節 屋島における寺院造営の起因	58
第5章 屋島寺周辺の調査	
第1節 調査の一覧	60
第2節 屋島水族館建設工事に伴う試掘調査	61
第3節 屋島寺西側倉庫建築工事に伴う試掘調査	69
第4節 鎮守社移築工事に伴う試掘調査	69
第5節 屋島寺庫裏改築工事に伴う試掘調査	71

第1章 調査の経緯と経過

屋島は、全域が国の史跡天然記念物に指定されており、工事等に際しては事前に文化庁への現状変更申請と許可が必要である。このため、平成元年7月14日、宗教法人屋島寺から本市教育委員会に対して、同寺宝物館改築工事にかかる現状変更申請について打診があった。さっそく本市教委は香川県教育委員会を通じて文化庁に報告したところ、埋蔵文化財の有無を確認するための試掘調査が必要であるとの指導がなされた。これを受け、屋島寺、県教委、市教委で三者協議を行い、試掘調査を実施することになった。

試掘調査は市教委が担当し、既存の宝物館解体工事が終了した後、平成2年2月13日～27日にかけて実施した。調査の方法は、新設宝物館の建設範囲が南北に長いことから、建設予定地のほぼ中央に南北方向のトレンチを設定した。その結果、弥生時代から近世にかけての遺物および時期不明の遺構が確認され、宝物館建設予定地全域に埋蔵文化財が包蔵されていることが明らかになった。このため、再度三者協議を行い、包蔵地の現状保存が不可能であることから、記録保存を目的とした発掘調査を実施することになり、市教委と屋島寺は平成2年4月2日に発掘調査協定書を結んだ。

発掘調査は、平成2年4月5日から5月31日にかけて、県教委の文化財専門員の派遣を受けながら市教委が主体となって実施し、調査費用は屋島寺が負担した。

調査終了後、市教委は発掘調査の概要報告を、県教委を通じて文化庁へ提出した。この報告は、高松市埋蔵文化財調査報告第62集「史跡天然記念物屋島基礎調査事業調査報告書Ⅰ」に収録している。その後、整理作業を市教委が随時実施し、本報告を刊行することとなった。遺構や遺物の年代・評価等については、本報告が最終のものである。



第1図 調査位置図（縮尺1/2,500）

第2章 地理的・歴史的環境

第1節 地理的環境

屋島は、高松市の北東部に位置し、瀬戸内海に突き出た半島状を呈している。現在は陸続きとなっているが、かつてはその名が示すとおり島であった。古くは屋島の南西部から南東部にかけて遠浅の海が大きく入り込み、港が存在していたようである。屋島の地形に変化が見られるのは、江戸時代にはじまる大規模な塩田開発によって、遠浅の海は順次埋め立てられて塩田となり、その風景は大きく変化する。寛永14年(1637)には西郷八兵衛の埋め立てにより高松平野と陸続きとなった。その後、正保4年(1647)松平頼重が陸続きとなった屋島相引の地に相引川を切り開き、現在に至っている。

屋島は日本を代表する「メサ」地形の典型として有名であり、東西から見たその山容は屋根形を形成し、天然記念物としての指定理由の一つでもある。これらの地形は、焼岩の周囲とその上部が開析されて形成された開析焼岩台地で、基盤が花崗岩、中腹から上部が凝灰岩、最上部に讃岐岩質安山岩が水平にのり、浸食作用によってできた安山岩の垂直に切り立った崖が山頂の平坦面を取り囲む特徴的な景観を呈している。

中腹に存在する凝灰岩がある部分は江戸時代に採石場がつくられ、火鉢や灯籠・祠の材料として切り出された。その採石場跡はコウモリの生息地となっている。凝灰岩の一部は山上部にも露出し表面を造形して雪に見立てて作庭し、名所雪の庭として知られている。

屋島は源平合戦の古戦場としても有名であり、屋島の東側を中心に戦跡が点在する。これらを売り物に明治末年頃から観光客が増え始め、山頂に旅館や売店がつくられ営業がはじまる。昭和47年には過去最高の246万人の観光客が屋島を訪れ、観光地屋島の黄金期を迎える。その後、屋島を訪れる観光客は余暇の多様化などに伴い、昭和47年を境に下降線を辿りはじめ、平成17年の屋島の観光客は約57万人で、最盛期の1/4にまで減少している。

山上部の様相とは反対に昭和30年以降、高松市中心部との地理的な要因から屋島南西部を中心に急速に宅地化が進展した。人口の増加に拍車がかかっては昭和46年に塩田が廃止され、その跡地に昭和48年から区画整理事業が行われたことが、人口増加に大きくつながった。屋島地区の人口増加はその後も続き、平成19年6月1日現在の屋島地区の人口は22,431人で高松市の人口の約5%弱を占め、市内を代表する住宅地となっている。



第2図 史跡天然記念物屋島 位置図

第2節 歴史的環境

屋島は史跡天然記念物に指定されているが、その理由として、白村江の戦いの敗戦を契機として造られた屋島城、唐僧鑑真開基と伝えられ四同堂場 84番札所でもある屋島寺、そして源平合戦古戦場があり、まさに歴史の宝庫である。この屋島の歴史について、古い順から紹介する。

旧石器・縄文時代に関する遺跡は確認されておらず、屋島で人々の活動が確認されるのは弥生時代中期である。明確な遺構は確認されていないが、南嶺での調査で弥生時代中期の土器・石器などがまとまって確認されており、居住していたと想定される。次いで弥生時代後期末頃の土器が南嶺北斜面や北嶺山上部で出土しているが、極めて少量であることから、定住していた可能性は低い。一方、屋島西海岸の浦生集落には製塩遺跡と考えられる鶴羽神社境内遺跡があり、多くの製塩土器に混じって弥生後期末の土器が出土している。

弥生時代後期末から古墳時代前期初頭と想定される墳墓・古墳群として、尾根稜線上に造られた浜北古墳群がある。正式な調査を経ていないが3基からなり、一番山側が1号墳で全長約30mの前方後円墳である。2号墳は、1号墳よりも下方に位置し、からうじて南北約10m、東西約5~6mの範囲で古墳状の隆起が認められる。3号墳は、2号墳の北西下方約50m西面崖面にあり、箱式石棺を主体部にもつ円墳と台帳登録されているが、長い年月の間に流出したのか現在は確認できない。

古墳時代中期では、屋島の北先端に位置する長崎鼻古墳があり、海を意識して築造されている。平成8~10年度の確認調査により、全長約45.8mを測る3段築成の前方後円墳で、墳丘表面には葺石が認められた。埋葬主体部である竪穴式石室からは、阿蘇熔結凝灰岩製の舟形石棺が確認され、海上交通に関係した被葬者像が考えられている。

古墳時代後期では、数基からなる古墳群が屋島南側山裾に点在して確認されているが、どれも発掘調査を経ていないので詳細は不明である。中筋北古墳は、南面した緩やかな傾斜地にあって、墳丘は流失してしまっているが、蓋石を失った組み合わせ石棺が残ると伝わり、石棺の内法規は長さ約2.4m、幅約0.6mという。屋島中央東古墳は、昭和43年の宅地造成で破壊され、現在は宅地内の庭園の一隅に石材が2石残るのみであるが、石の規模から横穴式石室であったと想定されている。墳丘跡から古墳時代後期の須恵器が採集されている。屋島中央西古墳は、中央東古墳の西方に位置する横穴式石室墳で、向側壁と奥壁の基底部近くが残るのみである。残存石室の規模は幅約2.5m、長さ約5.0m、残存高約1.2mである。出土遺物は確認されていない。谷東古墳は農協学園グランドの上方に位置する横穴式石室を内部主体とする古墳である。金刀比羅宮社域古墳は、四国電力高松営裏山にある金刀比羅宮の小祠の東側約8mにある。埋葬主体部である箱式石棺は、北半分に小祠がのって状況が不明であるが、南半分は蓋石を失って上縁部が露出している。現存の墳丘規模は、長径約8.0m、短径約6.0m、高さ1.0mである。東山地古墳は、金刀比羅宮社域古墳の東方に位置し、横穴式石室が開口している。湯の谷古墳群は、3基からなる古墳群で屋島の南東斜面に位置する。直径は約5.5~8.0m、高さ0.5~1.2mの規模をもち、墳丘の中央部には盗掘坑と考えられる窪みが認められる。主体部の構造は不明であり、遺物の出土は伝えられていない。湯の谷古墳群は、墳丘の規模等から中筋北古墳や金刀比羅宮社域古墳と同様に箱式石棺を主体部にもつ古墳であったと想定される。

屋島には古墳時代の集落は認められていないが、浦生にある鶴羽神社の境内では、製塩土器が散布しているとともに、製塩炉と考えられる焼土や炭などが露出している。製塩土器は、古墳時代後期から平安時代のものまで出土していることから、製塩遺跡として長期間の操業が想定される。塙と屋島が属する山田郡に関連して、平城宮跡出土木簡の中に「□(讃)岐国山田郡海郷□葛木部龍麻呂□□□(調塙一か斗)」がある。海郷については、平安時代初期に編纂された『倭名類聚抄』には記載はないが、現在では海郷が山田郡のどの地域を指しているかは不明である。ただし、その名から海に面した郷であることは間違いない。平安時代初期までに山田郡の北端にあった高松郷に吸收された可能性がある。いずれにしても屋島を含む山田郡の海岸線では、調貢用を含めて塙の生産が行われていたことは間違いないようである。

飛鳥時代の遺跡としては屋島城跡がある。『日本書紀』によれば大智6年(667)11月に榮城の記載が見られるが、浦生の谷奥にある石塁が関連する遺構と想定されていただけで、長らく実態が不明であつ

た。ところが、平成 7 年度から本市が実施している屋島基礎調査事業や、地元研究者による新たな石塁発見によって、実態が明らかになりつつある。それは、山頂の平坦部を取り囲む垂直に切り立った崖を外郭線として巧みに利用し、崖が途切れる部分に石垣や土塁を構築して防御を固めている。さらに中腹にも集落の奥、標高 100 m 地点に浦生石塁が築かれており、二重の防衛ラインを形成している。しかしながら、屋嶋城跡の存在を不動のものにしたのは、平成 13 年度調査で確認された城門遺構の発見である。発見された城門遺構は、外郭線の南西部分にあり、幅 54 m・奥行 11 m を測り、懸門や階段状の床面、排水溝をもつなど、他の古代山城に類例のあまり見られない構造を有し、規模的にも他城と比較して遜色のないものであった。

屋島では、屋嶋城跡以外に飛鳥時代の遺跡は認められないが、屋島の南岸にあたる古高松地区では、山田郡の条里地割とは異なる方位 (N 5° E) の条里地割が存在する。この地割の中に所在する小山・南谷遺跡では、祭祀性の高い井戸が確認されている。さらに、小山・南谷遺跡の東斜面にある奥の坊遺跡では、この異方向条里地割と一致する溝と掘立柱建物遺構を検出している。

奈良・平安時代になると、屋島寺が登場する。寺伝では、唐僧鑑真が京へ上る途中に屋島北嶺に立ち寄って開基したのが始まりで、その後南嶺に移ったとなっている。北嶺に千間 (軒) 堂跡の名が残っていたが、長らく実態は不明であった。平成 11 年度の分布調査で基壇をもつ礎石建物跡が確認され、平成 12 年度には基壇内部の調査で須恵器多口瓶が 4 点確認されたことから、寺伝のとおり北嶺に寺院が存在したことが判明した。しかしながら、出土した多口瓶は形態等の特徴から最も古いものでも 9 世紀後半までしか遡らず、周辺部で出土した土器にも 8 世紀中頃まで遡るものは見当たらない。北嶺の寺院が奈良時代まで遡るかどうかは今後の調査に期待される。

小山・南谷遺跡と新出街道（県道屋島西塩江線）を挟んで西側に位置する新田本村遺跡では、10 世紀頃の掘立柱建物跡群が確認されている。そのうち、遺跡の東端にあり 2 間 × 5 間の規模をもち東西に長い総柱の掘立柱建物跡が検出されており、倉庫跡になるものと考えられる。さらに、掘立柱建物跡群に沿って、東西方向の最大幅 4.5 m の大型溝も確認されており、当時の海岸線が遺跡近くまで入り込んでいた可能性を考えると、港湾施設的な集落跡と想定される。さらに出土遺物の中には、越州窯青磁や円面鏡、土馬といったものが見られ、官衙的様相も漂わせている。

新田本村遺跡の南東約 600 m には古代寺院として山下庵寺が有在する。山下庵寺では、瀬戸内分寺跡や同尼寺跡、同じ山田郡にある宝寿寺跡と同文の軒瓦片が散布しており注目される。

そして、平安時代末期にあたる元暦 2 年（1185）2 月に、屋島東麓を中心として源平屋島合戦が行われた。合戦の内容は『源平盛衰記』『平家物語』『吾妻鏡』『玉葉』の中に詳しいが、屋島東町から幸礼町幸礼そして庵治町に至る各所にも、合戦にまつわる史跡（伝承地）が残されている。

室町時代には屋島では製塩が盛んに行なわれたようであり、江戸時代には屋島の西側から南西にかけて塩田が分布していた。実際、文安 2 年（1445）から同 3 年にかけての記録である『兵庫北闘入船納帳』には、船籍地として方本（現在の屋島西町湯元）の地名が見られ、積荷は塩であった。この方本を船籍地とする船は 400 石以上の大型船であり、方本が港として充分な機能を有していたと想定される。さらに、大型船に積み込むほどの量の塩が盛んに生産されていたことがうかがえる。

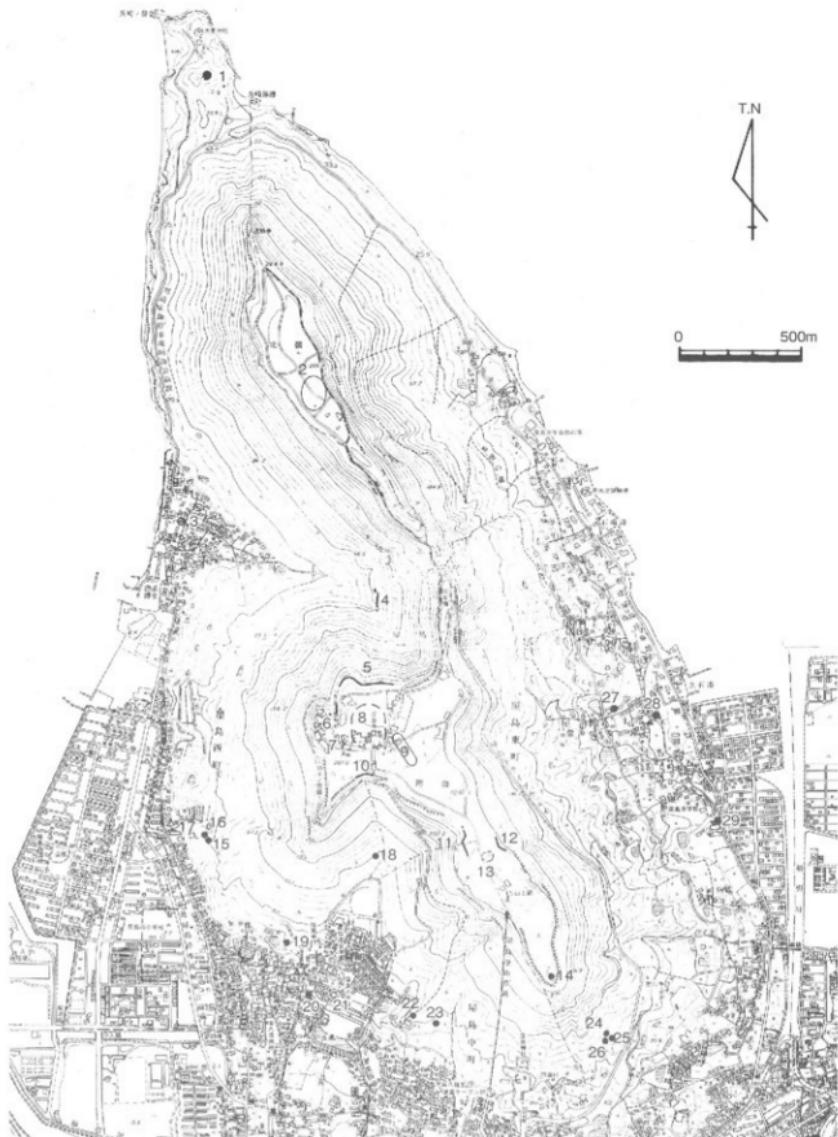
〔参考文献〕

- 岡島浩正 1988 「律令体制と讃岐」『香川県史』Ⅰ 原始・古代
藤野史郎 1996 「高松市新田町小山・南谷遺跡の発掘調査」『条里制研究』第 12 号 条里制研究会
皆詰 茂 1989 「海の時代—内海産業と水運の発達—」『香川県史』Ⅱ 中世

【第 3 図 遺跡名】

1 長崎鼻古墳	2 千間堂跡	3 鶴羽神社境内遺跡	4 浦生石塁	5 《北斜面外郭線》
6 《北水門推定地》	7 《貯水池推定地》	8 屋島寺	9 《貯水池推定地》	10 《南斜面外郭線・南水門》
11 《南西斜面外郭線・城門》	12 《東斜面外郭線》	13 《貯水池推定地》	14 黑馬経塚	15 池北 1 号墳
16 池北 2 号墳	17 池北 3 号墳	18 舌東古墳	19 中筋北古墳	20 屋島中央西古墳
21 屋島中央東古墳	22 金刀比羅宮社城山古墳	23 東山地古墳	24 湯ノ谷 1 号墳	25 湯ノ谷 2 号墳
26 湯ノ谷 3 号墳	27 佐藤經信の墓	28 安德天皇社	29 菊王丸の墓	

〈〉は屋嶋城跡に関連する遺構



第3図 史跡天然記念物屋島 主要遺跡分布図（縮尺 1/20,000）

第3章 調査の成果

第1節 調査の方法

調査地は、屋島寺本堂の南西側にあたる。調査対象は宝物館建設予定地全域であったが、実際は既存建物（本堂渡り廊下）や埋設管等の制約により、実際の調査面積は約300m²となり。調査区の平面形も凹凸のある変形したものとなった（第4図）。さらに、堆積土層が複雑であることから、調査区南側中央において、試掘調査時の土層観察用断面を幅1mの南北方向畦畔として残した。

調査の方法としては、表土を機械掘削により剥ぎ、その後人力掘削により包含層を除去していった。調査区北側および南側において各3面の遺構面が確認されたので、上面の遺構を検出・掘削した後、さらに掘り下げて下面の遺構を検出・掘削した。そして、調査終了後は人力により埋め戻した。

調査区全体の測量は、調査区全体に5m単位に杭等を打設し基準を定め、平板測量による1/20国化を基本とした。遺構平面図や遺物出土状況図、土層図等は適宜手書きによる1/10国化または1/20国化を行った。写真撮影は、35mmのモノクロネガおよびカラースライドによった。

第2節 調査地の概要と基本層序

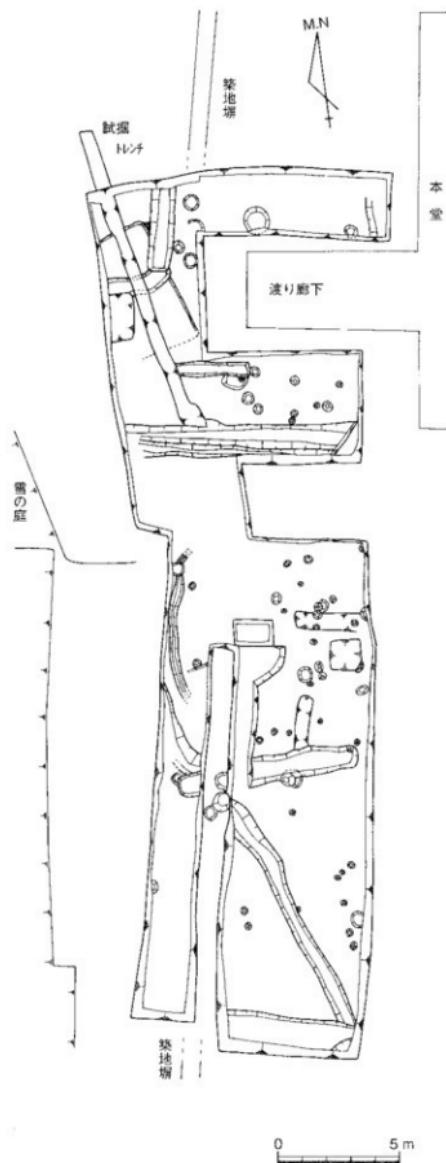
調査地は、屋島南嶺の山上部でも西側に位置し、地図から読み取れる地形では、標高289.4mの高所から標高292.0mの高所に至る尾根筋（北北西-南南東）の西側斜面にあたる。しかしながら、現在は屋島寺境内の平坦地の一部（標高286.3m）となっており、現地に立ってみても旧地形を想定することは難しい。ただし、発掘調査で確認された旧地形は第5図のとおりで、北東から南西に向かって緩やかに下る斜面であり、地図から読み取れる地形とほぼ一致する。そのため、発掘調査においては、調査区北端では地表から約60cmで地山に達したが、南端では約1m30cmもの堆積層があった。

さて、この堆積層の状況は、調査区の北側と南側では大きく異なる。まず調査区北側においては、東半分において表土を除去すると地山に切り込む遺構を検出できたが、西半分では遺物包含層が存在し大きいく3層に分かれ（第8図①～⑦）。この遺物包含層の上層は第6層の明褐色粘質土で、いぶし瓦や布目瓦を含み厚さ約20cmを測る。中層は第11層の暗赤褐色粘質土で、布目瓦や中世の土器を含み厚さ約15cmを測る。下層は第12層の赤褐色粘質土で、摩滅した弥生土器を含み厚さ約10cmを測り、第19層の地山と区別が困難な場所もある。おそらく北の標高の高い場所から弥生土器とともに流れてきて2次堆積した土層と考えられる。遺構は、上層・中層・下層を切り込んで存在する。

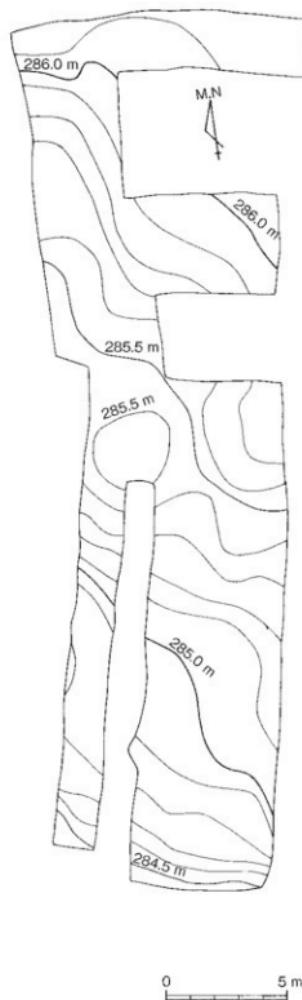
一方、調査区南側においては、北東部分では表土および宝物館整地層を除去するとすぐに第19層の地山が現れて地山を切り込む遺構を検出できるが、南西にいくに従って厚い遺物包含層が存在し、包含層は大きく4層に分かれ（第8・9図⑧～⑫）。包含層の最上層は第3層の赤褐色土で風化安山岩細片や瓦片を多く含み、厚さは調査区南端で最も厚く約1mを測る。上層は調査区南端においてのみ見られ、第4層の褐色土で瓦片を含み厚さ10～20cmを測る。中層は調査区南側の中央においてのみ見られ、第5層の褐色土層で風化安山岩細片や瓦片を含み、厚さは約30cmを測る。下層も調査区南側の中央においてのみ見られ、第7層の赤褐色土層で風化安山岩細片や瓦片を多く含み、下部に後で述べる集石が存在する。厚さは約50cmを測る。これら4層ともいわゆる整地層で、境内を拡幅する際に盛られたものと考えられる。遺構は、最上層・下層・地山を切り込んで存在する。

以上、調査区北側と南側の堆積土層について報告してきたが、北側と南側の相互関係については、途中で搅乱等があり明確にすることは困難であった。ただし、壁面⑬北側においては、第3層（南側の最上層）が第6層（北側のいぶし瓦包含層）より上位にあることが確認可能である。

次に検出した遺構は、溝（SD）4条、土坑（SK）4基、溝状落ち込み1条、瓦溜め遺構1基、埋甕3基、柱穴（SP）63基（うち掘立柱建物跡（SB）1棟を含む）、不明遺構（SX）3基である。遺構の年代は、飛鳥時代から近世に亘するものが見られるが、出土遺物が限られるため全ての遺構の年代を明らかにすることはできないものの、近世に属するものが多いと考えられる。

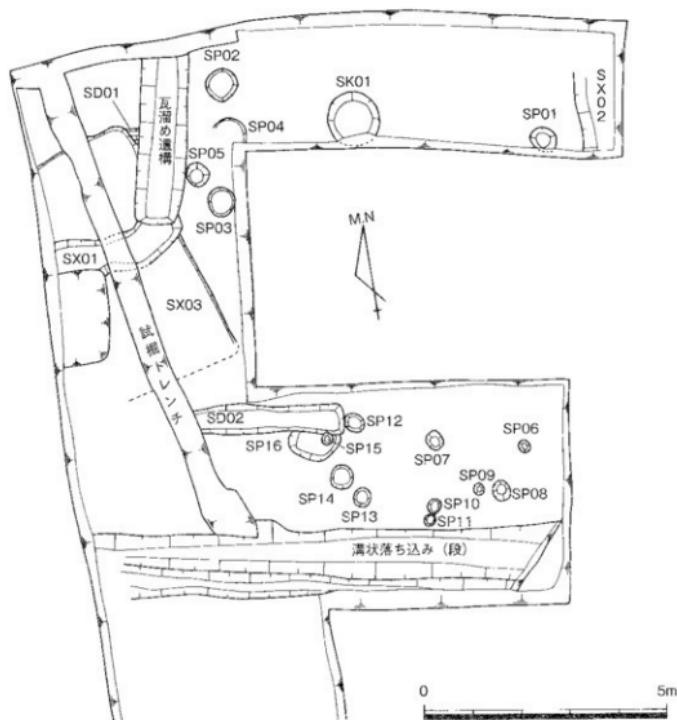


第4図 調査区平面図 (縮尺 1/200)

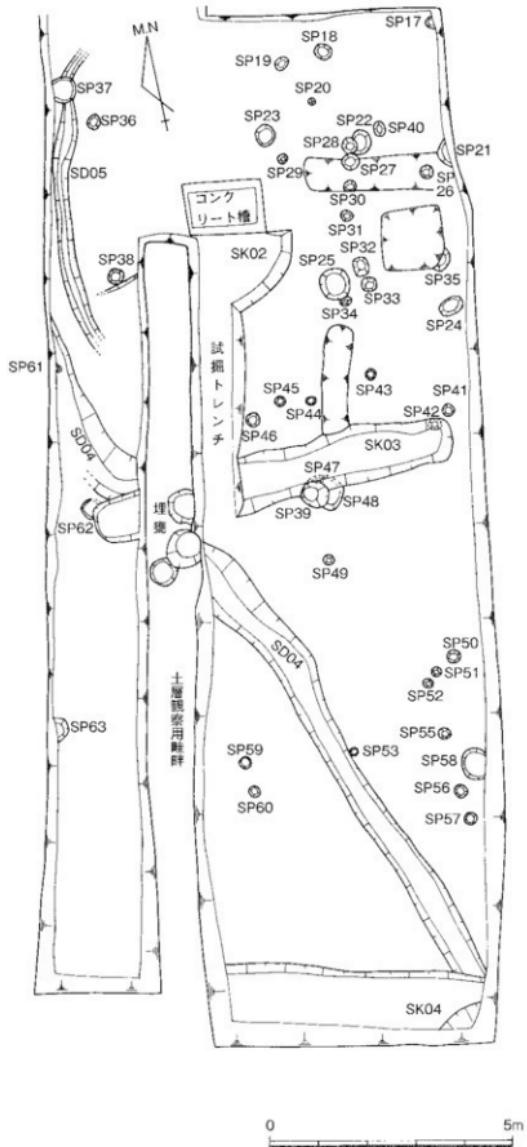


第5図 調査区旧地形図 (縮尺 1/200)

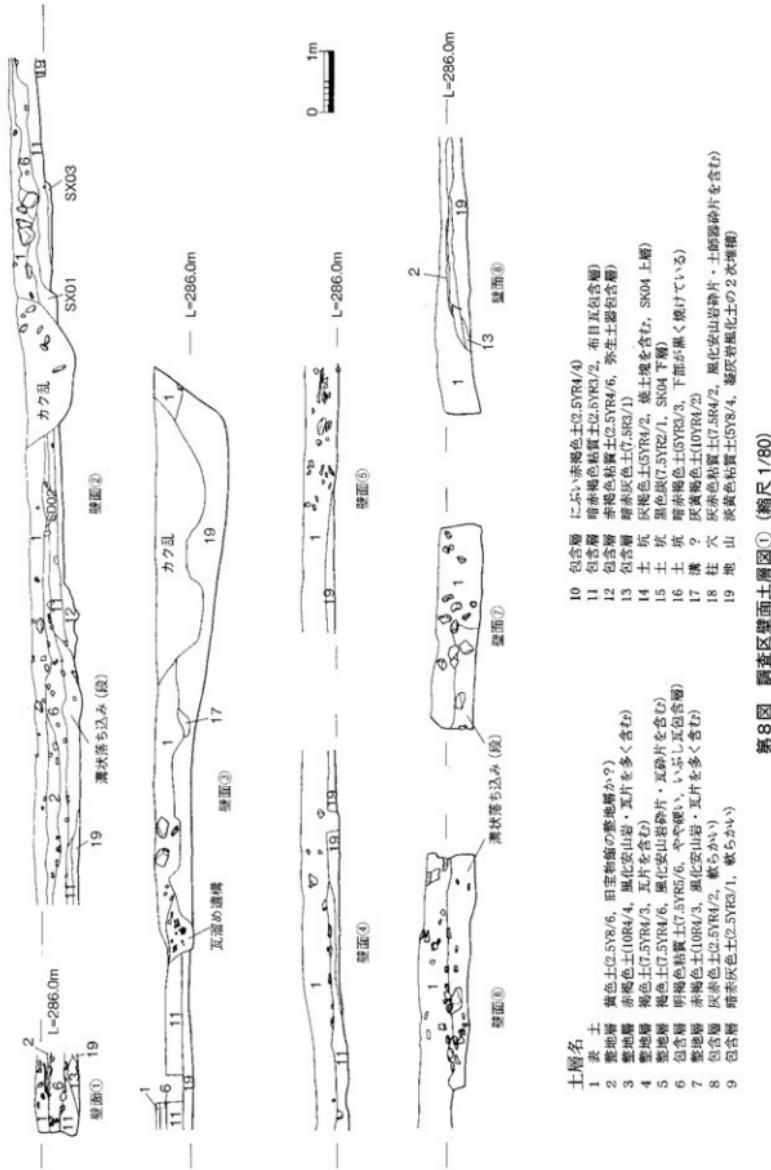
出土遺物は、弥生土器、須恵器、土師器、土師質土器、瓦質土器、陶磁器、瓦、石器、銅錢、鉄製品などがコンテナ36箱分出土した。特に多いのは丸瓦と平瓦で、遺物の大半を占める。



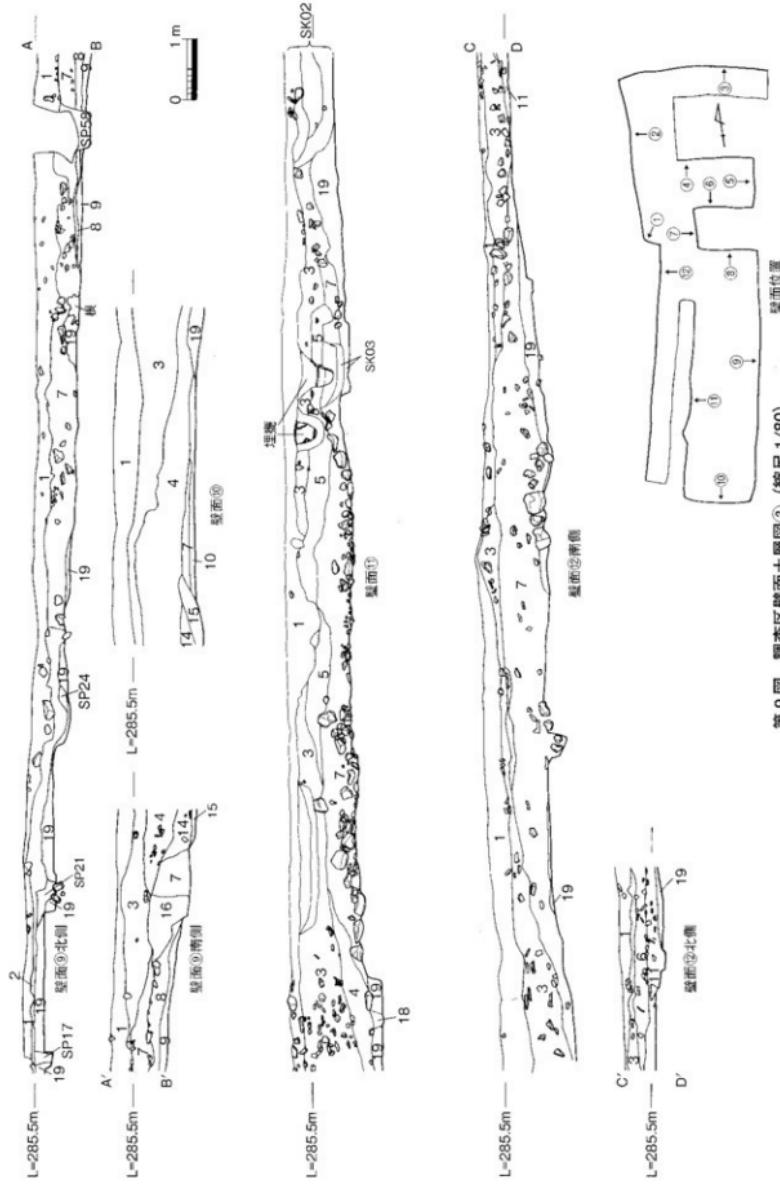
第6図 調査区北側造構平面図（縮尺 1/100）



第7図 調査区南側造構平面図（縮尺 1/100）



第8図 調査区壁面土層図(1) (縮尺 1/80)



第9圖 調查區縫面土層圖2 (縮尺1/80)

第3節 遺構および包含層と遺物

遺構・包含層と遺物の報告にあたっては、通常時代順に行なう場合が多いが、本遺跡では遺構の年代について不確定な要素を多く含むことから、遺構の種類順に報告する。それは、溝（SD）、土坑（SK）、溝状落ち込み（段）、瓦溜め造構、不明造構（SX）、埋甕、柱穴（SP）、掘立柱建物跡（SB）を含む、遺物包含層（整地層）である。個々の遺構および包含層の詳細な年代については、まとめて検討している。

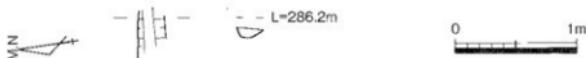
S D O 1 (第10図)

調査区北西端に位置する溝で、地山上面で検出した。瓦溜め造構およびSX03に挟まれ、東西方向にわずか40cmしか残っていないかった。幅約20cm、深さ約10cmを測り、断面は浅いU字形である。出土遺物もなく所属時期は不明だが、SX03に切られていることから飛鳥時代以前と考えられる。

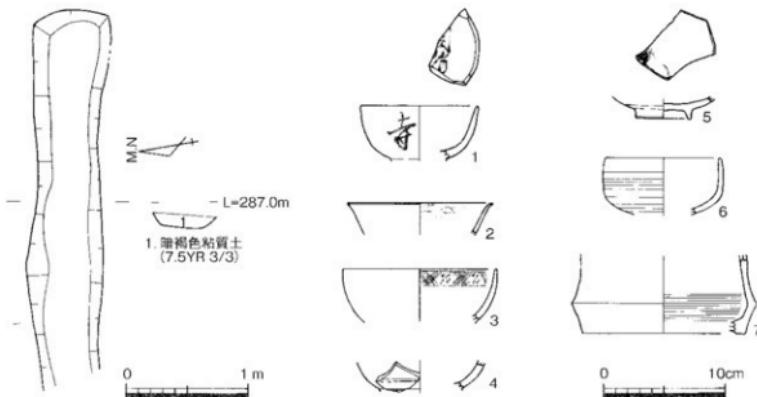
S D O 2 (第11図)

調査区北側中央付近に位置する溝で、第6層（いぶし瓦包含層）上面で検出した。東西方向にまっすぐのび、検出長は約3.1mを測るが、調査区西壁（第8図壁面②）においても確認できることから、実際は5.5m以上あり、西側は調査区外にのびる。東端はSP12と接して終了しており、SP16を切るが、SP15に切られる。幅約70cm、深さ約20cmを測り、断面は浅い逆台形を呈し、埋土は暗褐色粘質土の單一層である。

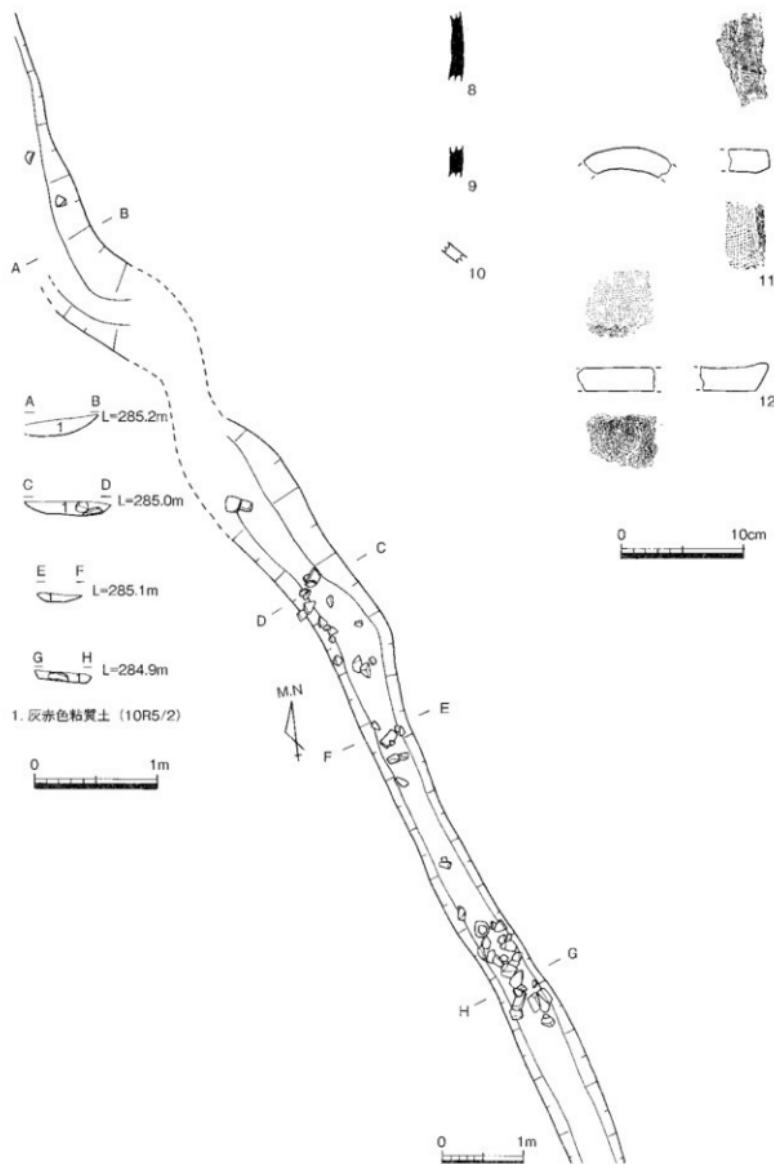
出土遺物は、第11図1～7である。1は肥前系磁器の染付碗で、外面に呉須で「寺」と書かれており、18世紀のものである。2は肥前系磁器の端反り碗で、19世紀中頃のものである。3は肥前系磁器の青磁染付碗で、口縁部内面に四方櫛文が見られ、18世紀後半のものである。4は産地不明の陶胎染付呉須絵碗で、18～19世紀のものである。5は肥前窯の京焼風陶器皿で、底部外面に「清水」の刻印が押されており、18世紀前半のものである。6は瀬戸美濃系陶器の腰錆茶碗で、18世紀後半のものである。7は器種不明の土師質土器である。これら出土遺物を概観すると、18世紀～19世紀中頃の遺物が見られ、溝の廃棄年代は江戸時代末～明治時代初頭と考えられる。



第10図 S D O 1 平面・断面図（縮尺1/40）



第11図 S D O 2 平面・断面図（縮尺1/40）出土遺物実測図（縮尺1/4）



第12図 SDO 4平面・断面図 (縮尺 1/60・1/40) 出土遺物実測図 (縮尺 1/4)

S D O 3 → SK03 に改称

S D O 4 (第 12 図)

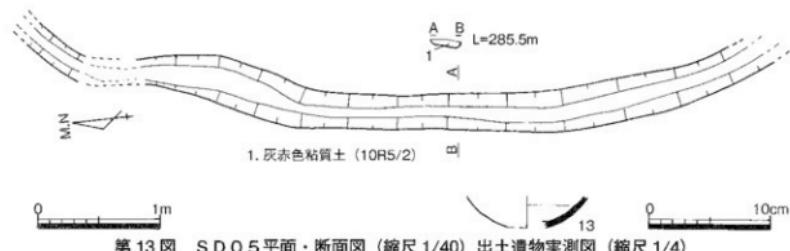
調査区南側に位置する溝で、第 7 層を除去した地山上面で検出した。北西から南東へやや蛇行しながら下り、検出長は約 16 m を測る。北西端は調査区内で不明瞭となり、南東端は SK04 によって切られ、途中では SK03 によって切られている。幅約 50cm ~ 1m、深さ約 12cm を測り、断面は北側では浅い U 字形、南側では逆台形を呈し、埋土は灰赤色粘質土の單一層である。

出土遺物は、第 12 図 8 ~ 12 である。8・9 は須恵器壺、10 は土師器壺の細片である。11 は丸瓦、12 は平瓦の破片で、ともに凹面に布目が残り、焼成は須恵質である。なお 12 の凸面には繩叩き痕が見られる。これら出土遺物は細片であるため時期決定は慎重を要するが、平安時代頃のものと考えられる。一方、SD04 の被覆土である第 7 層は、後述するように江戸時代前期である。また、明らかな室町時代の遺物を含まないことから、平安から鎌倉時代の幅で、SD04 の年代を推定しておきたい。

S D O 5 (第 13 図)

調査区南側北西端に位置する溝で、第 7 層を除去した地山上面で検出した。南北方向に弓なりになつてのび、検出長は約 6.1 m を測るが、両端は調査区内で消失し、途中で P37 に切られる。幅約 30 ~ 40cm、深さ約 5cm を測り、断面は浅い逆台形を呈し、埋土は灰赤色粘質土の單一層である。

出土遺物は、第 13 図 13 の須恵器碗の細片で、平安時代のものである。これのみで年代決定は難しいが、SD04 と埋土が同じで、第 7 層に被覆されていたことも考慮して、平安時代から鎌倉時代の幅で年代を推定しておきたい。

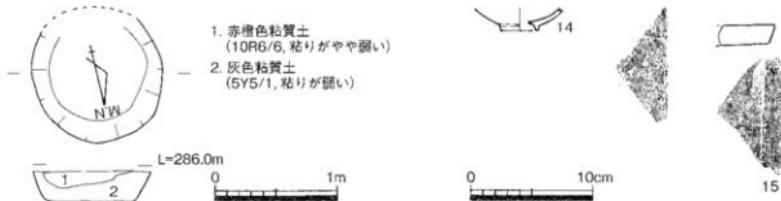


第 13 図 S D O 5 平面・断面図 (縮尺 1/40) 出土遺物実測図 (縮尺 1/4)

S K O 1 (第 14 図)

調査区北端中央に位置する土坑で、表土を除去した地山上面で検出した。平面形は直径約 1 ~ 1.1 m を測る円形であるが、南端は調査区外である。上部は削平されていると考えられるが、深さ約 25cm を測り、断面は逆台形を呈する。埋土は 2 層に分かれ、上層は赤橙色粘質土、下層は灰色粘質土であり、両層からいぶし瓦が出土している。

図化した出土遺物は第 14 図 14・15 である。14 は京信楽系陶器の丸碗で、18 世紀後半以降のものである。15 は平瓦の破片である。これら出土遺物から、18 世紀後半以降の年代が考えられる。

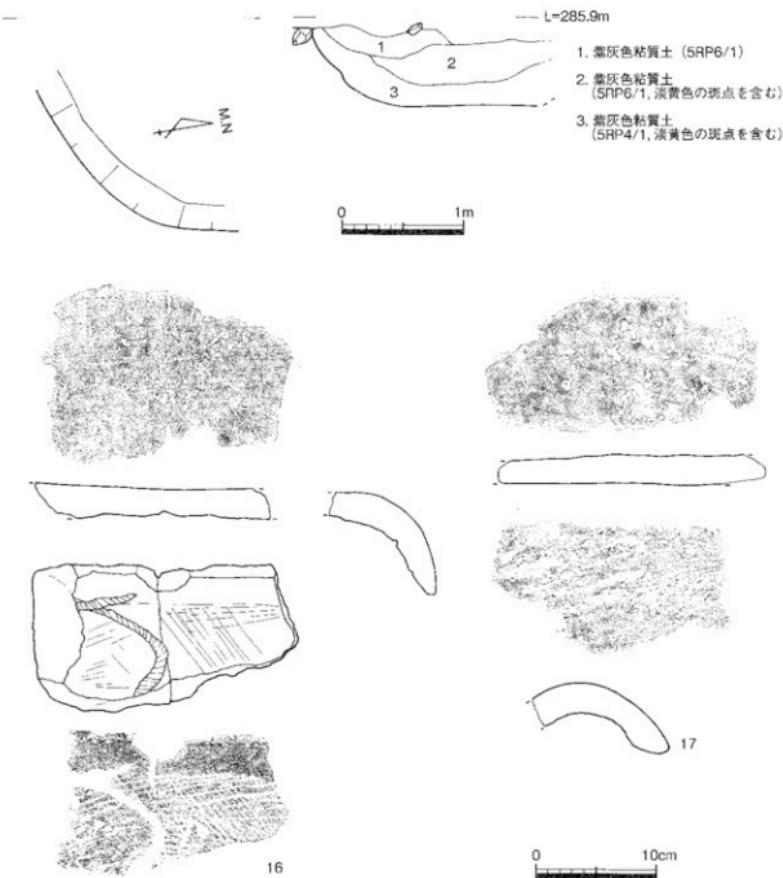


第 14 図 S K O 1 平面・断面図 (縮尺 1/40) 出土遺物実測図 (縮尺 1/4)

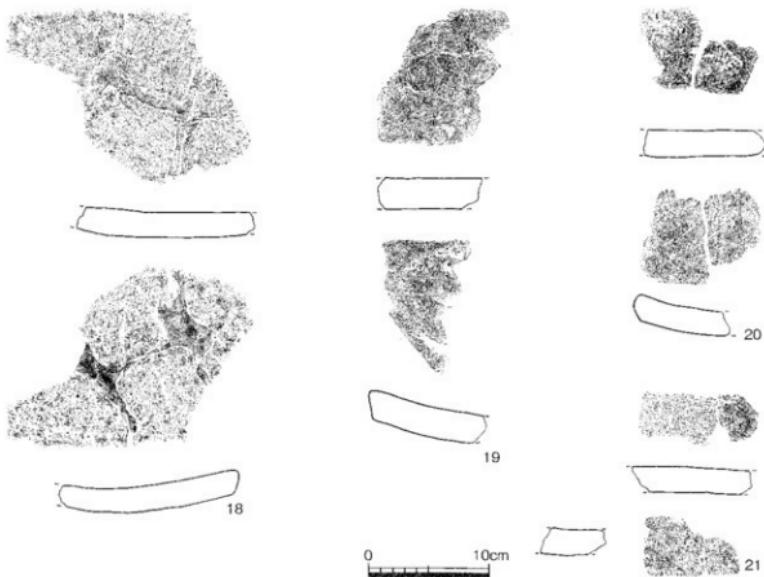
SKO 2 (第 15・16 図)

調査区南側北中央に位置する土坑で、表土を除去した第3層上面で検出した。北半分をコンクリート橋で囲まれ、西側は土壠観察用畦畔の中にあるため平面形は不明だが、直径約3mの円形である可能性を推測できる。深さ約60cmを測り、断面は浅いU字形を呈し、平底である。埋土は紫灰色粘質土で、淡黄色の斑点を含むか含まないか、または微妙な色合いで3層に分かれる。

図化した出土遺物は第15・16図16～21で、16・17が丸瓦片、18～21が半瓦片である。焼成は、16・17・21がいぶし瓦で、18～20が土師質である。16の凹面には、切断痕と吊り縫痕が見られる。いぶし瓦を含むことと、第3層より新しいことを考慮すると、比較的新しい時期の遺構と考えられる。



第15図 SKO 2平面・断面図 (縮尺1/40) 出土遺物実測図① (縮尺1/4)

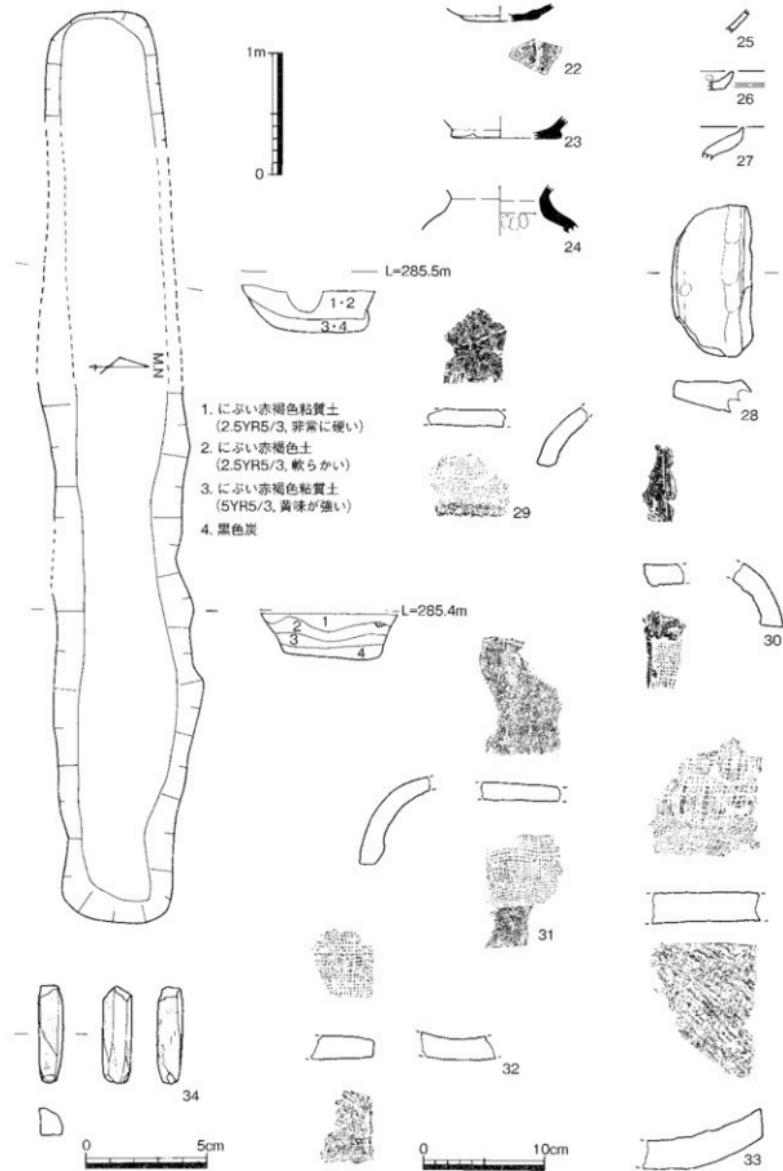


第16図 SKO 2出土遺物実測図②(縮尺1/4)

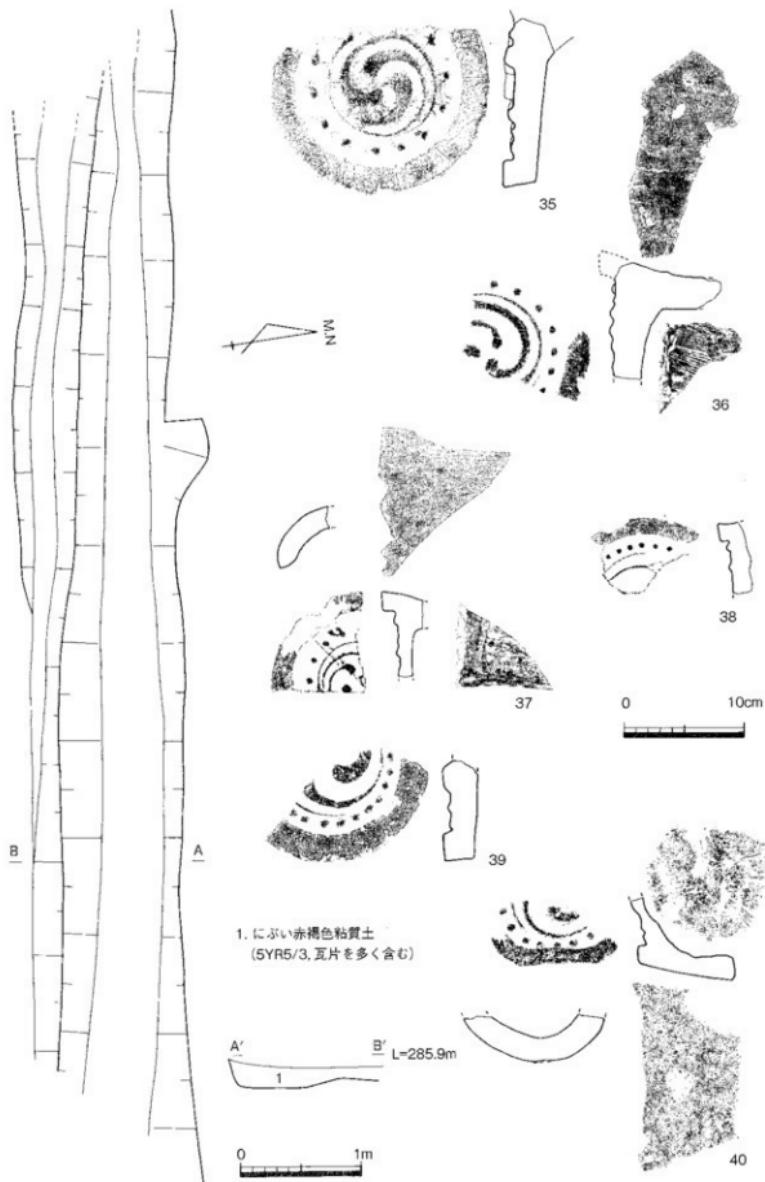
SKO 3 (第17図)

調査区南側中央に位置する土坑で、第5層を除去した第7層上面で検出した。平面形は、東西方向に溝状にのびることから、検出当初はSD03と呼称したが、全容が判明してからはSK03に呼称を改めた。長さ7.5m、幅1.15m、深さ40cmを測り、断面は逆台形を呈するものの、側壁の立ち上がりが垂直に近い箇所も認められる。埋土は4層に分かれ、上層はにぶい赤褐色粘質土、中層はにぶい赤褐色土、下層はにぶい赤褐色粘質土で、最下層は厚さ約10cmの黒色炭が底全体を覆している。側壁には焼けた痕跡が確認された。SK03の下部では、後述する第7層中の集石にあたるが、この集石の石をわざわざ除去してまでSK03が掘削されている。上層から下層にかけて遺物がやや多く出土し、最下層の黒色炭層からも遺物が若干出土している。遺物が一定量出土しているがあまり多くないこと、炭が均一に底面に見られること、平面や断面形も比較的整っていること、集石の石を除去してまで深く掘削していることを考慮すると、単なるごみ捨て場とは考えられない。寺院の境内地にあることから、宗教的儀礼に使用された可能性もあるが、現段階では用途は特定できない。

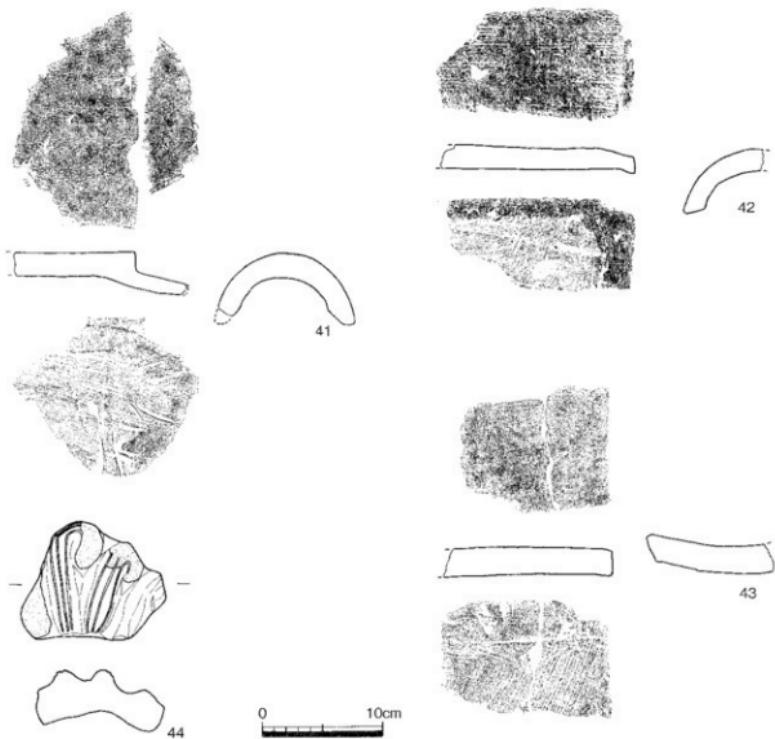
出土遺物は第17図22～34で、26・27が最下層出土、ほかは上層から下層出土である。22は須恵器杯、23は須恵器鉢、24は須恵器壺の細片である。25は瓦器碗、26は土師質土器皿、27は土師質土器鍋、28は土師器窓の細片である。29～31は上師質の丸瓦片で、凹面に布目が見られる。32・33は須恵質の平瓦片で、凹面に布目、凸面に縄叩き痕が残っている。34は弥生時代に属する扁平片刃石斧の破片である。これら出土遺物を概観すると、細片だが平安時代から鎌倉時代にかけてのものが見られる。しかしながら、このSK03が17世紀末～18世紀前半の第7層を切り込んで掘削されていることを考慮すると18世紀前半以降の年代となる。一方、SK03より上位に第3層と第5層という2層もの転疊層があり、さらに第3層上面にある埋甕が19世紀頃のものであることから、SK03は18世紀前半に近い時期の可能性があり、18世紀の中に収まる年代観が考えられる。



第17図 SKO 3平面・断面図(縮尺1/40) 出土遺物実測図(縮尺1/4, 34は1/2)



第18図 溝状落ち込み(段)平面・断面図(縮尺1/40)出土遺物実測図①(縮尺1/4)



第19図 溝状落ち込み(段)出土遺物実測図②(縮尺1/4)

SK04 (第7図、第9図壁面⑨@第14・15層)

調査区南東隅に位置する土坑で、第4層を除去した第7層上面で検出できたが、平面ではほとんど確認できず、調査区壁面でのみ確認できた。深さは約40cmを測り、断面は浅いU字形を呈する。埋土は2層に分かれ、上層は焼土塊を含む灰褐色土、下層はSK03同様に黒色炭である。出土遺物は、調査区内では確認できなかった。

溝状落ち込み(段)(第18・19図)

調査区北側の南寄りに位置し、第6層(いぶし瓦包含層)を除去した第11層(布目瓦包含層)上面で検出した。調査区内を東西方向にまっすぐ横断する溝状の落ち込みだが、両肩を比較すると北側が高く南側が低くなっていることから段を形成している。これは、北から南に傾く地形に影響された結果と考えられる。底面では2条の溝が重なり合いながら平行しているが、埋土の観察では切り合ひ関係は認められない。検出長は9.6mを測り、幅は平面では約1.2mしか確認できなかったが、調査区西壁面(第8図壁面②)では幅約3.4mを確認できる。断面は、深さ30cmの浅いU字形を呈し、埋土はにぶい赤褐色粘質土の單一層である。

出土遺物は第18・19図35~44で、瓦片が多く出土した。35~39は三巴文軒丸瓦で、すべていぶし瓦であるが、39はいぶしが弱いのか須恵質の焼成になっている。37は瓦当径が他のものより小さい小型品である。40は三巴文鳥糞瓦で、表面はいぶしているが、胎土は精製されておらず土師質である。これら

35～40の瓦当面剥離材は、砂または粘土粉と考えられる。41・42は丸瓦で、41はいぶし瓦だが凹面に布目が見られ、42は須恵質で凹面に布目、凸面に繩叩き痕が残されている。43は平瓦で、いぶし瓦である。44は留蓋と考えられる瓦片で、いぶし瓦である。

これら出土遺物から年代を推測したいが、土器が出土していないことから、軒瓦を対象とする。屋島寺の近辺では、佐藤寛馬氏によって高松城跡出土軒瓦の編年が成されている(佐藤2002)。溝状落ち込み(段)出土軒丸瓦の特徴は、巴文の尾が長いことが指摘でき、35のように巴尾が連続して圓線となっているものや、37のように巴文と圓線が別の可能性があることから古い要素が見られる一方、36・39・40のように圓線がなく巴尾が分離している新しい要素も見られる。内区指数(内区径/外区径)は第1表のとおり0.69～0.79を示すことから、内区が占める割合が高いことが指摘できる。珠文数は復元で16個前後から28個前後と多く、珠文の直径も5～10mmと小さめであるが、35のように珠文数が14個前後とやや少なく、珠文直径も12mmと大きく新しい要素を含むものがある。胎土は砂粒が多く含んだ中世的なものが多いが、37は精製されており近世的になっている。以上の特徴から、総体的に見れば佐藤編年の第6面・古(様相1)に相当するが、一部に第6面・新(様相2・3)に下る要素も見出せる。一方、軒丸瓦以外についてもほぼ同じ頃のものと推測できる。ただし、42は平安時代頃の瓦で、混じったものである。第6面・古が1588年?～1610年代と推測され、第6面・新が1620年代～1650年代と推測されていることから、溝状落ち込み(段)の年代は16世紀末～17世紀前半と考えられる。

さて、溝状落ち込み(段)の用途については、延長上に本堂(鎌倉時代末期)の軒先があり、また底面のレベルが西に行くほど低いことから、本堂の雨落ち水を西へ流す排水溝と調査時は考えた。しかしながら、幅が約3.4mも広いことを考慮すると排水溝とは考えにくく、区画溝や道路的な目的で掘削された溝の可能性もある。

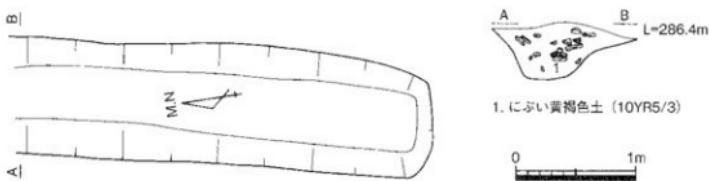
遺物番号	35	36	37	38	39	40
復元瓦当径	17.8cm	16.8cm	12.4cm	14.6cm	16.4cm	
内区指数	0.7	0.75	0.69	0.79	0.74	
復元珠文数	14個前後	16個前後	16個前後	28個前後	20個前後	16個前後
珠文直径	12mm	8mm	6mm	5mm	10mm	9mm

第1表 溝状落ち込み(段)出土 三巴文軒丸瓦 計測値一覧表

瓦溜め遺構(第20～22図)

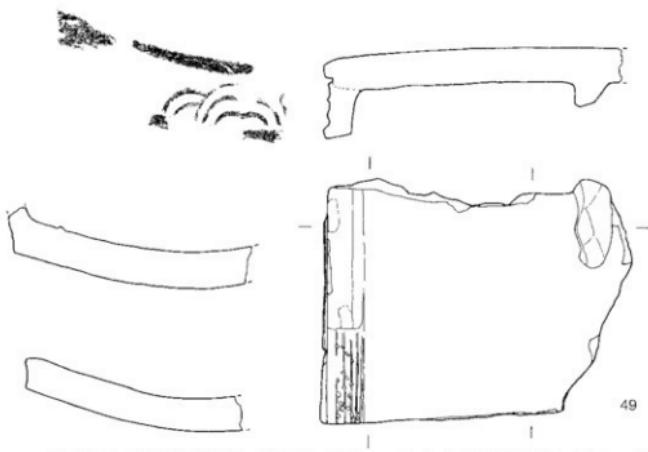
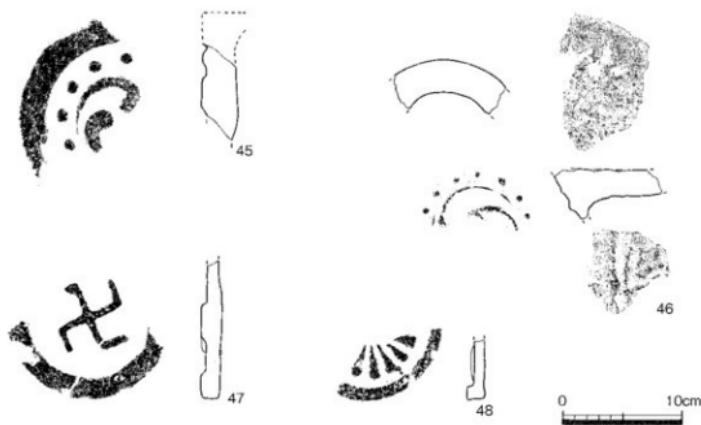
調査区北西端に位置し、表土を除去した第11層(布目瓦包含層)と地山上面で検出した。南北方向(N 12° E)にまっすぐのびる細長い土坑で、南端は調査区内で終わっており、北側は調査区外にのびる。SD01, SX01・03と重複しており、これらを切っている。検出長は約3.5m、幅は約1m、深さ約30cmを測り、断面は上が広がるU字形を呈し、埋土はにぶい黄褐色土の單層である。遺構名が示すとおり、いぶし瓦片が多数出土した。

出土遺物は第20～22図45～55で、瓦のみである。45は三巴文軒丸瓦で、復元瓦当径は17.2cmと大振りだが、復元珠文数は12個前後とやや少なく、巴文の尾も短い。瓦当面の剥離材は、摩滅のため確認できない。46も三巴文軒丸瓦で、復元珠文数は16個前後と多く、拓本では不明瞭だが巴文の尾が連続して圓線状をなす。47は単文軒丸瓦で、薄手の作りで、いぶし瓦である。48は菊丸瓦で、復元瓦当径は12cmと大きい部類に入り、瓦当径に比して周縁幅が狭い。46～48は、どれも45同様に摩滅が著しい。49は波状文軒平瓦で、凹面側縁前側に軒丸瓦滑り止め用の縦栈が約16cmの長さで取り付き、凸面中央後側にも滑り止め用の突起が付いている。波状文は中心部分しか残っていないが、左右対称する文様を断面方形の凸線で明確に表現している。また、拓本では表現できなかったが、脇区幅は5cmと広く、瓦当上縁を面取りしている。いぶしが後側しか付着しておらず、焼成は土師質となっている。50・51は連珠文軒平瓦で、どちらも珠文を3個一組とし2組以上配して圓線で囲っており、同範品と考えられる。瓦当部の粘土接合方法は明確でない。顎後縫を面取りしている。凹面に布目、凸面に斜め方向の板ナテ調整が見られる。いぶしが部分的に付着しているだけで、50は須恵質、51は土師質の焼成となっている。52・53は丸瓦で、どちらもいぶし瓦だが、52には釘穴が穿たれている。54は平瓦で、いぶし瓦である。55は平瓦に似るが、側縁断面(拓本(上)の下端)が鋭角であり、端部上面(拓本(上)の右上)が斜めにカットされている。



1. にぶい黄褐色土 (10YR5/3)

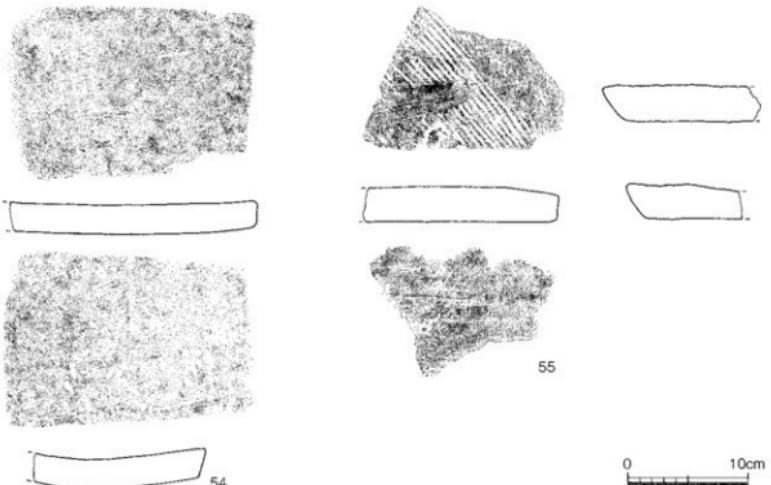
0 1m



第20図 瓦溜め遺構平面・断面図 (縮尺1/40) 出土遺物実測図① (縮尺1/4)



第21図 瓦溜め遺構出土遺物実測図② (縮尺1/4)



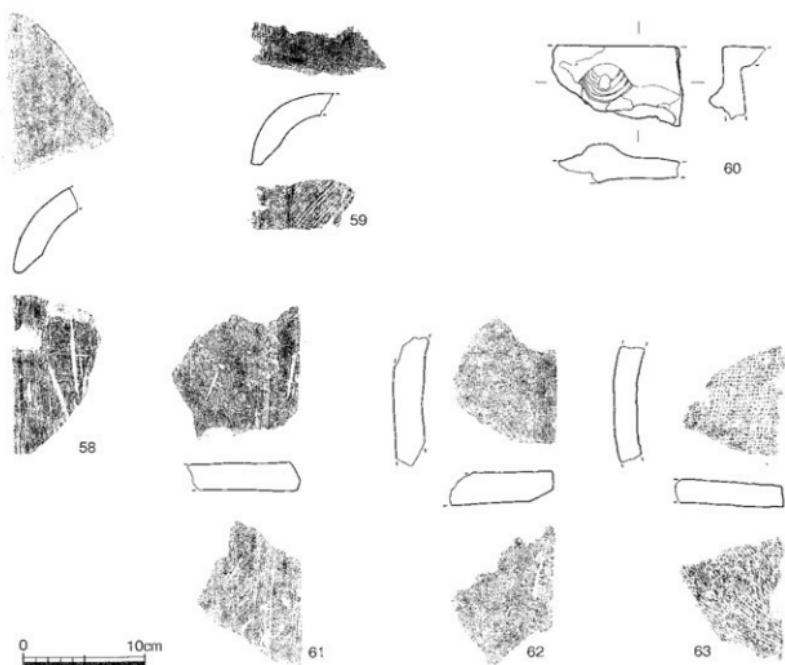
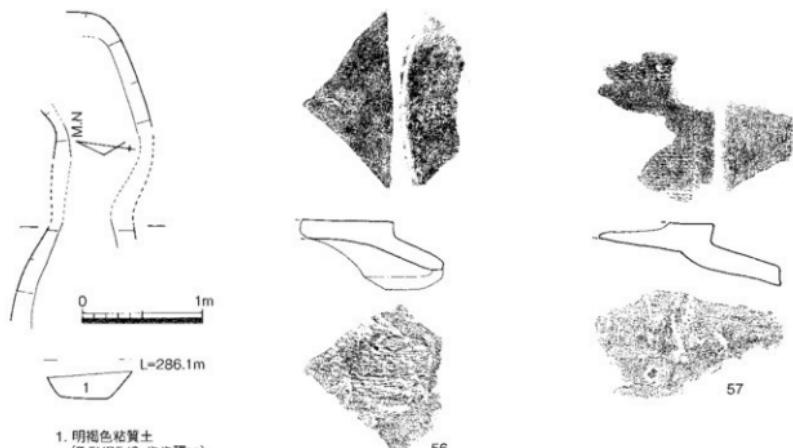
第22図 瓦溜め遺構出土遺物実測図③（縮尺1/4）

出土した軒瓦等の年代を推測したい。まず軒平瓦49～51は中世のものであるが、讃岐における中世瓦の研究は進んでおらず、他地域の研究成果として「法隆寺の宝寶・瓦」^{〔毛利・井上1999〕『中世瓦の研究』〔中井2000〕}を参照したい。49の波状文は15～16世紀に盛行する文様であり、近世には見られなくなる。近傍の類例として「野原濱村无量壽院 天文（？）九月」銘の文字瓦が出土した高松城跡の無量壽院跡出土のものがあり、16世紀第3四半期頃のものと推測されている^{〔中井2005〕}。近似した時期の可能性があるが、波状文の文様表出に違いもあることから、15～16世紀のものと捉えておきたい。なお、長岡京市勝龍寺跡出土のものや大阪市四天王寺出土のものにも類例が見られる。50・51の連珠文は中世前半（13～14世紀）に盛行する文様であるが、顕後縁の面取り技法が出現するのは南北朝期以降と推測されており、14世紀中頃～末のものと考えられる。以上の軒平瓦に対して、47の冴文軒丸瓦も中世後半のものと考えられるが、現況では特定できない。一方、江戸時代のものとして45・48の軒丸瓦・菊丸瓦がある。45は、瓦当径および珠文数から、高松城跡出土軒瓦編年に照らして、第5面（様相4）～第4面（様相5）に該当する可能性があり、17世紀後半～18世紀前半のものと考えられる。48も、瓦当径と周縁幅から45と同じ時期のものと考えられる。以上の出土瓦からは、瓦溜め遺構の年代については17世紀後半～18世紀前半と考えられるが、18世紀末～19世紀前半のいぶし瓦包含層との層位的な上下関係は不明であり、さらに下る可能性もある。

なお、留意すべき点は、調査時には存在した築地塀と同一方向で隣接していることである（第4図）。江戸時代末期に編まれた「讃岐國名勝圖會」の挿絵（第46図）によれば、同じ位置に築地塀が描かれており、しかも瓦溜め遺構の南端付近において直角に西へ折れている。絵図とは年代観に開きがあるが、築地塀に沿って掘削された可能性もあり、雨落ち水の暗渠排水等の可能性もある。なお、中世瓦を一定量含むことから、瓦葺き建物の修築または撤去に伴い掘削された土坑であるとも考えられる。

SX01（第23図）

調査区北端に位置し、表土および第6層（いぶし瓦包含層）を除去した第11層（布目瓦包含層）上面で検出した。東西方向に蛇行しながらびる細長い溝状遺構で、東端は瓦溜め遺構に切られて調査区内で終わっており、西側は調査区外にびる。一部を試掘トレンチや搅乱により壊されている一方、SX03を切っている。検出長は約26m、幅は約80cm、深さ約20～30cmを測り、断面は逆台形を呈し、埋土は明褐色粘質土の單一層である。



第23図 SXO 1 平面・断面図 (縮尺 1/40) 出土遺物実測図 (縮尺 1/4)

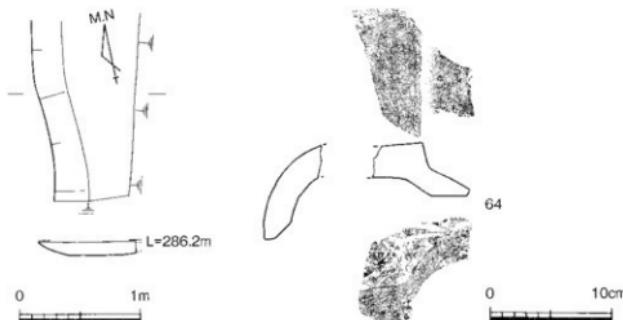
出土遺物は第23図56～63で、瓦のみである。56～59は丸瓦で、56・58はいぶし瓦、57・59は須恵質の焼成である。57～59の凹面には布目が見られ、57・59の凸面には繩叩き痕が残されている。60は用途不明瓦で、宝珠が表出されているいぶし瓦である。61～63は平瓦で、61がいぶし瓦、62・63は須恵質の焼成である。62・63の凹面には布目が見られ、61・62の凸面には板ナデ調整が施され、63には繩目叩き痕が残されている。

出土瓦は丸瓦・平瓦が主体であり、年代を決定する材料に乏しい。57・59・62・63のように古代から中世の遺物もみられるが、いぶし瓦が半数を占めることから、江戸時代と推測しておきたい。さらに、瓦溜め造構に切られていることや、いぶし瓦包含層（第6層）に覆われていることから18世紀末以前となる。

S X O 2 (第24図)

調査区北東端に位置し、表土を除去して地山上面で検出した。造構の西端を検出したのみで、北端は搅乱により不明瞭で、大部分は調査区外に位置するものと想定される。検出長は南北で約1.45m、幅は約85cm、深さ約10cmを測り、断面は浅いU字形を呈する。

出土遺物は第24図64の丸瓦のみで、須恵質の焼成である。凹面に布目が見られる。土層や造構の上下関係もないことから、造構の所属時期は不明である。



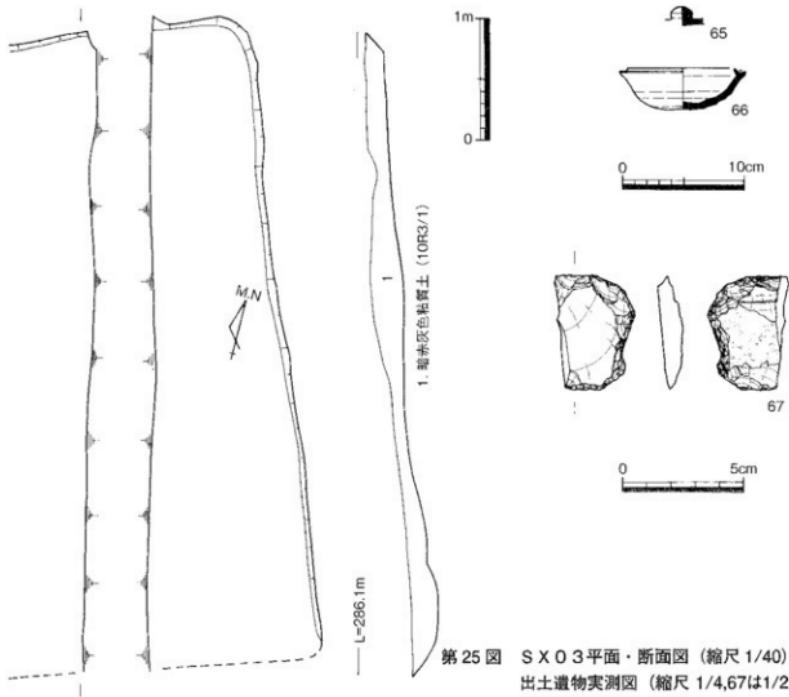
第24図 S X O 2平面・断面図（縮尺1/40）出土遺物実測図（縮尺1/4）

S X O 3 (第25図)

調査区北西部に位置し、第11層（布日瓦包含層）を除去した第12層（弥生土器包含層）および地山上面で検出した。一部を試掘トレレンチや瓦溜め造構、SX01により壊されている。造構の北端および東端を検出し、南端は平面では検出できなかったが、試掘調査時の土層断面から確認できた。造構の東部は調査区外にのびるが、一辺約5.2mを測る隅丸方形の平面プランに復元可能である。深さは約20cmが残り、床面は少しの凹凸が見られるが南に緩く傾斜した平坦面で、壁面は斜めに直線的に立ち上がる。埋土は暗赤灰色粘質土で、須恵器や石器が出土した。形状より堅穴住居跡の可能性も考えたが、柱穴がなく床面も傾斜していることから、住居跡とするには難しいと考えられる。

出土遺物は第25図65～67である。65は須恵器蓋で、頂部には高さがある宝珠摘みが付く。66は須恵器杯で、口縁部内側に短く内傾したかえりをもつタイプである。口径は8.9cmと非常に小さく、調整も回転ナダのみであることから、大阪府陶邑編年（田辯1981）のTK217型式に相当すると考えられる。67はサヌカイト製の打製石庖丁で、上辺部は敲打による背潰しが認められ、下辺部は両側からの調整により刃部を作り出している。

造構の年代は、出土した須恵器から7世紀後半期頃と考えられる。なお、打製石庖丁は弥生時代のもので、混入品である。

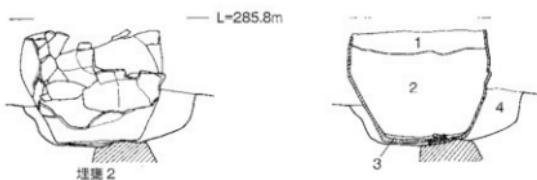
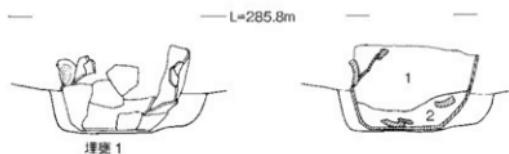
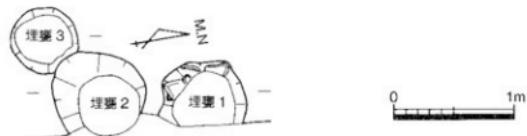


第25図 S X 03平面・断面図 (縮尺1/40)
出土遺物実測図 (縮尺1/4,67は1/2)

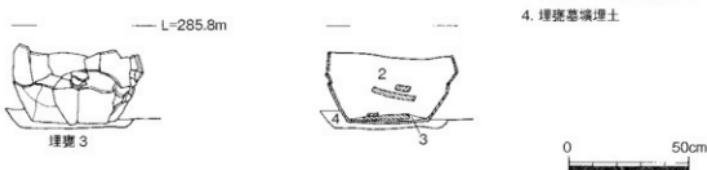
埋壺（第26図）

調査区南中央部に位置し、表土を除去した第3層（整地層）上面で検出したことになるが、実際は調査区南側に残した土層観察用畦畔を除去する際に検出している。一箇所にまとめて3基確認しており、北から順番に埋壺1～3と呼称したが、並び方には規則性は認められない。埋壺2の掘り方が埋壺3の掘り方を切っており、埋壺1・2の東側は試掘トレントによって壊されている。また、埋壺の上部が失われておらず、旧宝物館建設時等によって壊されたと推定される。埋壺の墓壠は、やや頑な凹形の平面プランで、直徑60～80cmを測る。墓壠の深さは約50cmを測り、その断面下部は浅いU字形または逆台形を呈するが、上部は逆「ハ」の字形に開いている（第9図壁面⑪）。墓壠の底中央に直接埋甕を据え置いており、埋壺1・2には下の集石の石材が当たっている。埋甕は土師質土器で、上部が壊されており器種は不明であるが、一般的に甕であると想定される。埋甕の中は土が詰まっており、土層としては大きく2層に分かれるが、埋壺2・3の底には砂質土が薄く堆積していた。出土遺物は、埋甕内の埋土中に瓦片や陶磁器片が混じっていたが、土とともに後後に流入したものと考えられる一方、埋甕2の底からは寛永通宝が2枚出土しており、これは埋甕に副葬されたものと考えられる。

出土遺物は、第26図68～72で、68～70は埋甕2出土、71・72は埋甕3出土である。68は肥前系磁器の染付碗で、18世紀後半～19世紀前半のものである。69・70は寛永通宝である。71は肥前系青磁染付碗で18世紀後半、72は京信楽系陶器の色絵丸碗で18世紀後半～19世紀前半のものである。これら出土遺物を概観すると、18世紀後半～19世紀前半であるが混入品であることから、埋甕はこの年代以降のものである。さらに、寛永通宝を副葬していることを考慮すれば、19世紀末までに埋められたものと推測される。



1. 埋甕内埋土上層
2. 埋甕内埋土中層
3. 埋甕内埋土下層（砂質土）
4. 埋甕基壇埋土



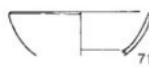
埋甕 2



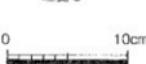
69



70



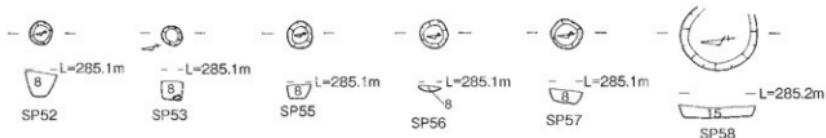
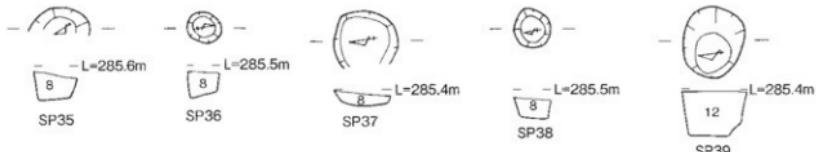
埋甕 3



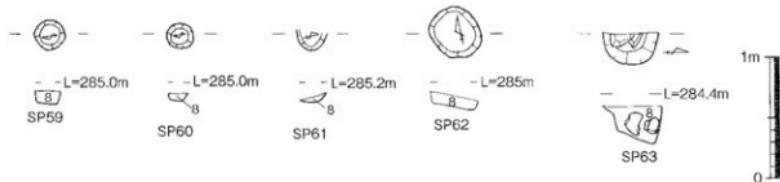
第26図 埋甕平面・立面・断面図（縮尺1/40・1/20）出土遺物実測図（縮尺1/4, 69・70は1/2）



第27図 柱穴平面・断面図① (縮尺 1/40)



15. 紫赤褐色粘質土
(10YR3/2,しまりがある)



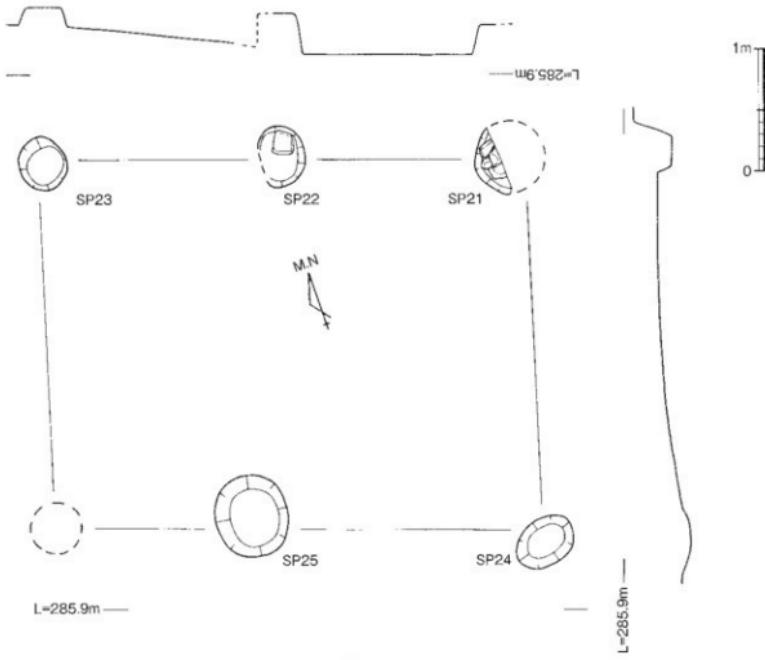
第28図 柱穴平面・断面図② (縮尺 1/40)

柱穴・掘立柱建物跡（第6・7・27～31図）

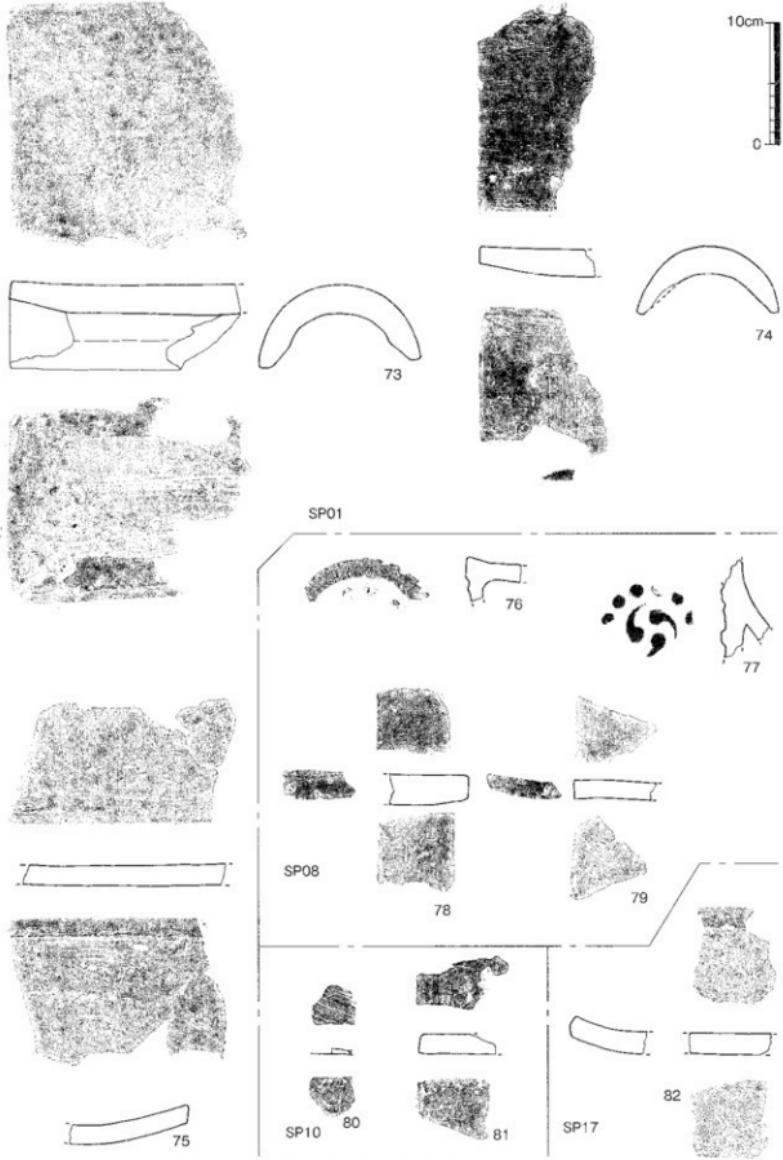
調査区全域において、柱穴 62 基 (SP01 ~ 63, SP54 は消去) を確認した。特に調査区北側の南東部分と調査区南側の東半分において、まとまって検出している。これは調査区より西は傾斜が強くなる地形によるものと考えられる。調査区北側では表土を除去した地山上面で検出したものが多いたが、SP02 ~ SP05 は第 11 層を除去した地山上面で検出している。調査区南側の北東部分では表土または第 2 層を除去した地山上面で検出したが、北東部分以外では第 4 層や第 7 層を除去した地山上面で検出したものが多い。ただし、SP39・58 は第 7 層より上位にある。

平面は不整なものと含めて円形ばかりで、直径約 15cm のものから約 70cm を測るものまである。直径 20cm 前後のものが最も多く、他は直径 40 ~ 50cm のもの、60 ~ 70cm のものが見られる。SP16 のみ直徑約 1m を測り、これは土坑に分類した方が適当かもしれない。断面は逆台形のものが多数を占めるが、底は平底以外に丸みを帯びたものや凹凸があるものも見られる。埋土は、全部で 15 種類に分けられる。

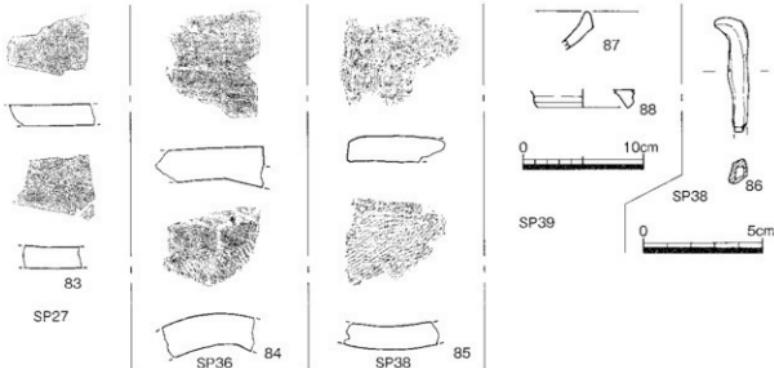
柱穴から掘立柱建物跡が復元可能なものは、SP21 ~ 25 の 1 棟のみ (SB01) である。SB01 は、南調査区の北東部分に位置し、2 間 × 1 間の東西方向の建物跡である。SP21 ~ 25 の柱穴 5 基で構成されるが、南西隅の柱穴は SK02 により消失したものと考えられる。桁にあたる北側柱穴の芯々間距離は約 2m だが、南側柱穴の場合は約 2.4m で広い。梁にあたる柱穴の芯々間距離は約 3m を測る。床面は東に向かって緩く傾いている。ただし、本例も柱穴間の距離が一定でなく、床面が斜めであることを考慮すると、掘立柱建物跡を構成しないかもしれない。



第 29 図 SB01 平面・断面図 (縮尺 1/40)



第30図 SP01・08・10・17出土遺物実測図（縮尺1/4）



第31図 SP27・36・38・39出土遺物実測図（縮尺1/4, 86は1/2）

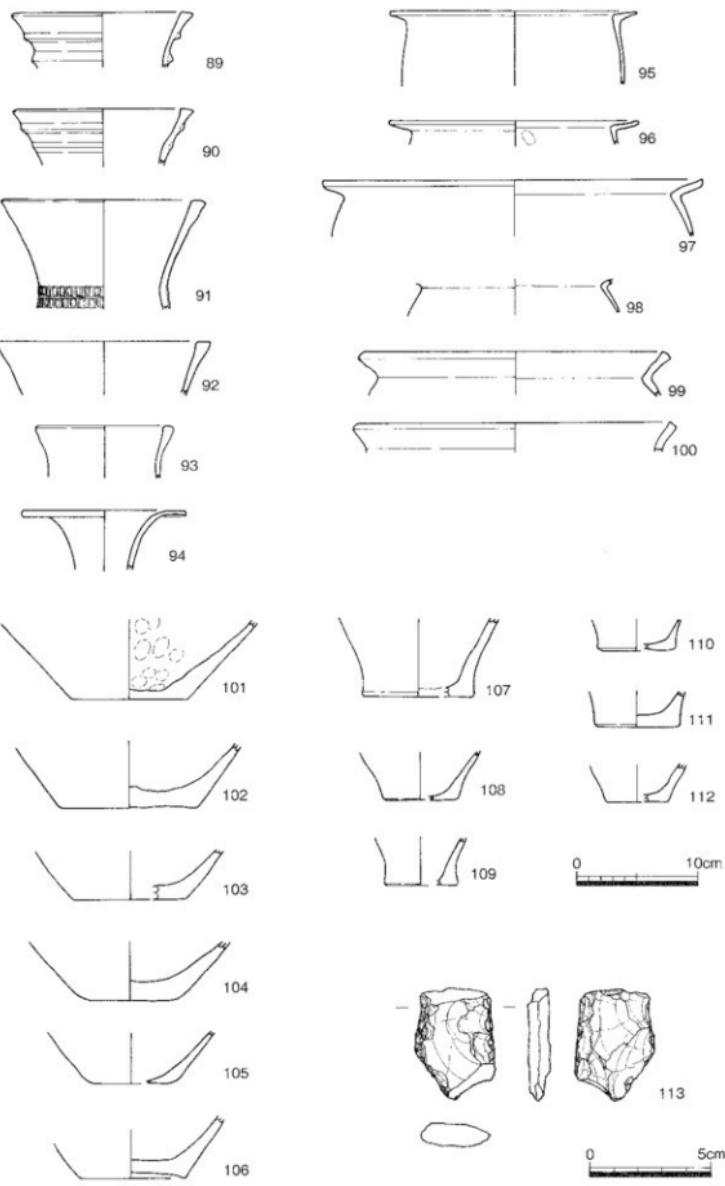
出土遺物は第30・31図73～88である。73～75はSP01出土のいぶし瓦で、73・74は丸瓦で凹面に布目が残り、75は平瓦であり、どれも江戸時代のものと考えられる。76～79はSP08出土のいぶし瓦で、76は軒丸瓦、77は三巴文軒丸瓦で、復元文数は12個前後で珠文も大きく、ともに表面にキラコが認められる。78・79は平瓦で、端面に刻印が押されており、78は○にーが、79は○に判読不能な文字が見られる。76・77とともにキラコを使用している特徴などから、SP08出土瓦は江戸時代でも新しいものと考えられる。80・81はSP10出土のもので、80は土師質土器杯、81はいぶし瓦の半瓦で、81の存在からSP10は江戸時代のものと考えられる。82はSP17から出土した須恵質の丸瓦で、中世のものと考えられる。83はSP27から出土したいぶし瓦の平瓦で、江戸時代のものと考えられる。84はSP36から出土した須恵質の丸瓦で、古代から中世のものと考えられる。85はSP38から出土した須恵質の平瓦で、古代から中世のものと考えられる。86はSP38出土の鉄釘である。87・88はSP39出土のもので、87は土師質土器鍋、88は同柄である。これら遺物は中世のものであるが、SP39が江戸時代のSK03を切っていることから、SP39は江戸時代以降のものと考えられる。

以上のように柱穴の概要を報告してきたが、層位が分かるもの、埋土の相違、出土遺物の年代等から、柱穴の年代を相対的に検討したい。層位が把握できているものは、SP02～05が第11層より下にあり中世以前であり、SP39・58は第7層より上にあり江戸時代以降である。出土遺物からは、埋土番号1・5・7・9・12・15のものが江戸時代以降のもので、主に黄赤色系のものが大半を占める。一方、埋土番号2の灰褐色や3・4・8の灰赤色系のものは、古代から中世に属する可能性がある。一概には断定できないが、可能性は高いと考えられる。

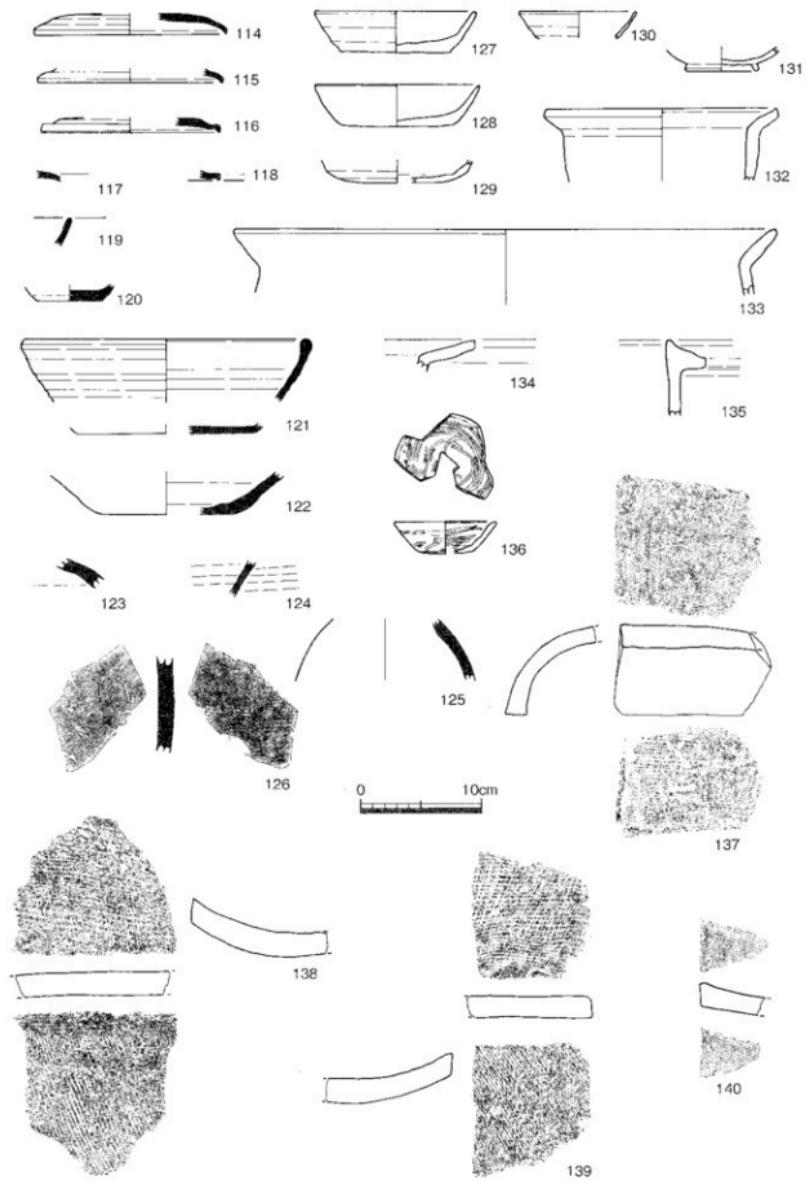
弥生土器包含層（第12層）（第8図壁面②・32図）

北調査区中央部西半において部分的に確認した遺物包含層である。布目瓦包含層（第11層）と地中の間に挟まれた厚さ約10cmの赤褐色粘質土である。出土遺物は、弥生土器と石器のみで時期的に限定されるが、どの破片も摩滅を受けていることから、斜面上から流れできたものが2次堆積したと考えられる。

89～94は弥生土器広口壺の口頭部で、89～93は外反する口縁部の端部を肥厚させるもので、94は口縁部がラッパ状に開く。89・90は口縁部外面に断面V字形の貼付凸帯を2条めぐらし、91の頭部には貼付押圧文が2条見られる。95～100は弥生土器壺の口頭部で、頭部を「く」の字形に屈曲させる。95～97のように口縁端部を肥厚させないものと、99・100のように肥厚させるものとが見られる。101～112は弥生土器底部である。113はサスカイ製の打製石槍で、両側辺には敲打による背溝が認められる。弥生土器の時期は、壺口頭部の特徴から弥生時代中期中葉（第Ⅲ様式）のものと考えられる。



第32図 弥生土器包含層(第12層)出土遺物実測図(縮尺1/4, 113は1/2)



第33図 布目瓦包含層(第11層)出土遺物実測図(縮尺1/4)

布日瓦包含層（第11層）（第8図壁面①～④・9図壁面⑫・33図）

北調査区のほぼ全域で確認した遺物包含層で、一部は南調査区の北西部まで広がる。いぶし瓦包含層（第6層）と地山の間に挟まれた厚さ約20cmを測る暗赤褐色粘質土で、一部において弥生土器包含層（第12層）がさらに下にある。出土遺物は、須恵器や土師器などとともに須恵質または土師質の瓦が出土している。調査時に布日瓦しか存在しなかったことから、布日瓦包含層の呼称を用いた。

114～126は須恵器である。114～118は杯蓋で、口縁端部を強弱の違いはあるが屈曲させており、頂部の摘みについても欠損しており不明である。9世紀前半頃のものと考えられる。119・120は杯で、119は口縁部、120は底部の破片である。121・122は須恵器こね鉢である。121は玉縁状になる口縁部と回転ヘラ切の底部をもち、口縁部の形態からは丹波窯産と想定されるが、底部は篠窯産の系切と明らかに違う。口縁部と底部が別個体の可能性も考慮したが、焼成・態度とも酷似しており、本報告では同一個体としておく。篠窯の編年^(西井1995)を援用すると、退化した口縁部から10世紀末～11世紀第1四半期のものと考えられる。123～126は須恵器蓋の肩部および体部の破片である。

127～135は土師器または土師質土器である。127～130は杯で、127・128は形態等から13世紀中葉頃のものである。131は椀の底部で、いわゆる吉備系といわれるものである。132は甕で、体部は膨らまないで、口縁端部を上に摘み上げる。133も甕で、頭部がくの字形に折れる。134は鍋の口縁部、135は羽釜の口縁部である。

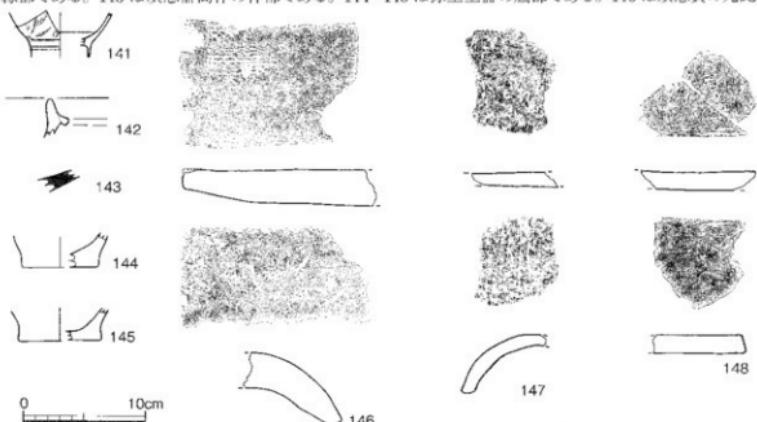
136は瓦器の小杯で、内面には篦状工具による暗文が施されている。形態等から、11世紀後半から12世紀前半と考えられる。137は土師質の丸瓦で、凹面に布目が残る。138～140は平瓦である。138・139が土師質で、凹面に布目、凸面に叩き痕が残る。140は須恵質で、凹凸両面に布目が見られる。

布日瓦包含層の年代については、もっとも新しいもので13世紀中頃の遺物を含むことから、13世紀頃と考えられる。また、この包含層上面に16世紀末～17世紀前半の溝状落込み（段）があることから、下つても16世紀まである。

いぶし瓦包含層（第6層）（第8図壁面①～③・9図壁面⑫・34図）

北調査区の西半分で確認した遺物包含層で、一部は南調査区の北西部まで広がる。表土（第1層）または近現代の整地層（第2層）と布日瓦包含層（第6層）の間に挟まれた厚さ約20cmを測る明褐色粘質土である。出土遺物は、弥生土器や須恵器そして須恵質または土師質の瓦に混じて、陶磁器やいぶし瓦が出土している。このため、調査時において、いぶし瓦包含層の呼称を用いた。

141は肥前系磁器の染付廣東碗で、18世紀末～19世紀前半のものである。142は土師質土器羽釜の口縁部である。143は須恵器高杯の杯部である。144・145は弥生土器の底部である。146は須恵質の丸瓦。



第34図 いぶし瓦包含層（第6層）出土遺物実測図（縮尺1/4）

147は土師質の丸瓦で、ともに凹面に布目が残る。148はいぶし瓦の半瓦である。いぶし瓦包含層の年代が推測できる遺物は141の1点のみで、これより18世紀末から19世紀前半の年代が推測できるが断定はできない。

集石(第7層下部)(第35~38図)

調査区南側の南半分全域で検出したが、東側の一部では認められない箇所もあった。直径5~80cmの安山岩を不規則に配置しており、一部数段に積んでいる部分も見られるが、乱雑に置かれている。集石は、これを覆っている赤褐色土(第7層)の下部にあたり、赤褐色土(第7層)と集石とは同一の整地層である。旧地形が斜面であることを考慮すると、境内を整地および拡幅する際に捨石として置かれたものと推測される。土師質土器や須恵器、土師質・須恵質の瓦に混じって、陶器やいぶし瓦が出土している。

149はサスカイト製石錐で、円基式である。150は土師質土器杯で、法量から13世紀末~14世紀初頭の時期と考えられる。151は土師質土器碗で、足高の高台が付いている。152は瓦器小杯で、形態等から11世紀後半~12世紀前半の時期が考えられる。153~155は須恵器で、153は杯、154は壺、155は壺の破片である。156は龍泉窯系青磁碗で、外面に鋪蓮弁が見られる。157は肥前系京焼風陶器碗で、外面に山水が描かれており、露胎の底面には刻印が認められる。17世紀末~18世紀前半のものである。158は備前焼陶器壺の破片である。

159は蓮華文軒丸瓦で、摩滅が著しく文様が判別しにくいが、ハート形に退化した蓮弁を4弁盛り上げて表している。同じく盛り上げて表現されている中房の周間に、二重の圓線に挟まれて珠文が20個(現存18個)巡っている。周縁も凸形に盛り上がっており、その内側に一重の圓線が巡っている。なお、瓦当面には製作時に付けられた繩叩き痕が残されている。12世紀後半頃のものと推測される。160は唐草文軒平瓦で、内区の唐草文は中心飾りが判然としないが、唐草が交互に反転しながら延びている。外区には珠文が上下区および脇区にも配されているが、その間隔は約3.5cmと広い。なお、外区と内区を分ける圓線が、四角形を形成するだけでなく、突き出で周縁にまで延びている。凹面は粗い布目が残り、瓦当端を削り取っている。凹面では、繩叩き痕が曲線顎を超えて瓦当端まで及んでいる。10~11世紀頃のものと推測される。161も軒平瓦であるが、瓦当面が剥離して文様は不明である。凹面に布目、凸面に繩叩き痕が残っている。

162~172は丸瓦の破片で、162・165・166・169・170が須恵質、163・164・167・168・171は土師質の焼成で、172のみがいぶし瓦である。ただし、172のいぶしは凹面のみに濃く見られ、不完全である。これら丸瓦の凹面にはすべて布目が残り、凸面は板ナデが施されている場合が多いが、162の凸面のみ繩叩き痕が残っている。瓦の厚さは、土師質のものが薄手で、須恵質は厚手と薄手があり、いぶし瓦は厚手である。173~184は平瓦の破片で、173~175・177~179・182・184は須恵質、176・180・181は土師質の焼成で、183のみがいぶし瓦である。ただし、183のいぶしは凹面のみに見られ、不完全である。これら平瓦の凹面にはほぼすべてに布目が残るが、凸面は173~179が繩叩き痕、180は格子目叩き痕が残り、181~183はナデが施されている。184のみが凸面にも布目が見られる。

以上の出土遺物のうち、もっとも年代が新しいのは157の肥前系京焼風陶器で17世紀末~18世紀前半のものであり、他にいぶし瓦が出土しており江戸時代のものである。肥前系京焼風陶器については、石と石の間で地山近くから出土しており、集石の年代に近いものと想定される。このことから、集石は17世紀末~18世紀前半のものと考えられる。

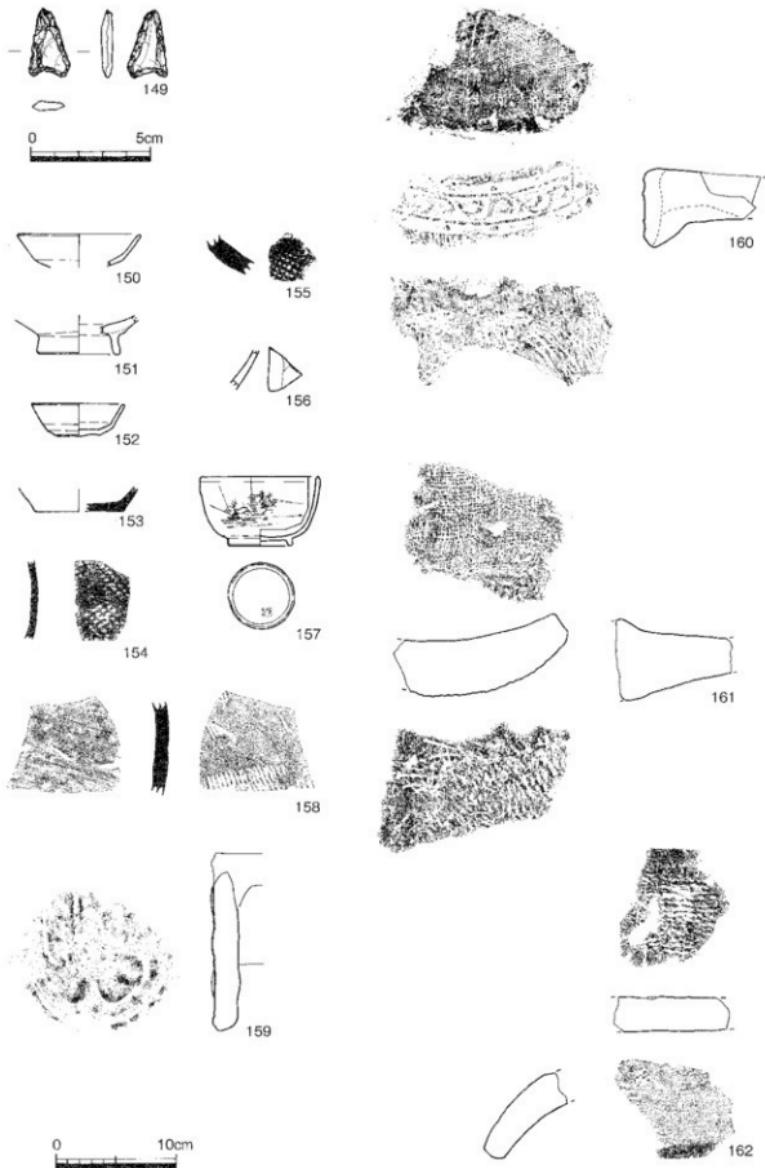
集石覆土(第7層上部)(第8図壁面⑧・9図壁面⑨~⑫・39~41図)

第7層は、南調査区のほぼ全域で確認した遺物包含層である。整地層(第2~5層)と地山(第19層)の間に挟まれた厚さ約50~80cmを測る赤褐色土である。下部に捨石としての集石がある整地層である。集石同様に第7層上部からも遺物が出土しており、調査時において遺物を第7層上部と下部に分けて取上げた。出土遺物は、須恵器や土師質土器、土師質・須恵質の瓦に混じって、磁器やいぶし瓦が見られるが、調査時の状況から上面から切り込む遺構の遺物が混じっている可能性もある。

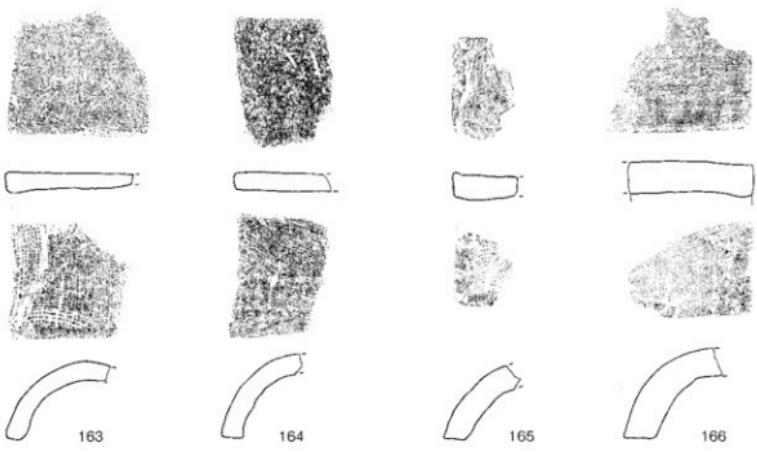
185~187は須恵器で、185は碗、186は杯である。187は壺で、格子目の叩き痕の特徴等から龜山焼と考えられる。188~190は土師質土器杯の破片である。191・192は瓦器碗の破片で、192の底部に付く高台は断面逆台形であるが縮小しており、12世紀のものと考えられる。193・194は肥前磁器染付小皿と徳利で、18世紀のものと考えられる。



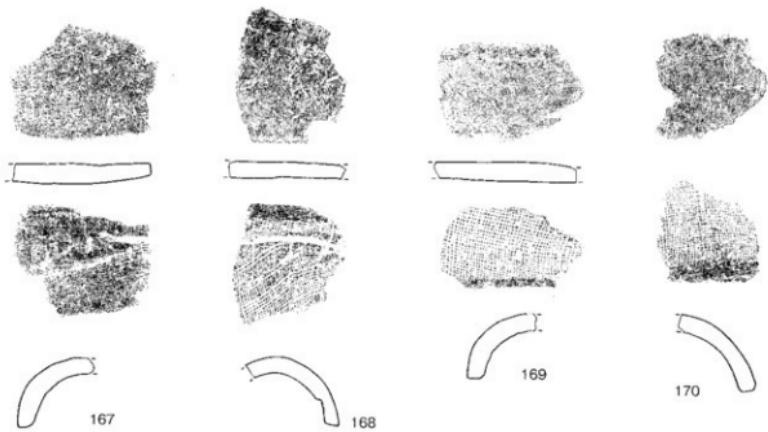
第35図 集石平面図 (縮尺 1/60)



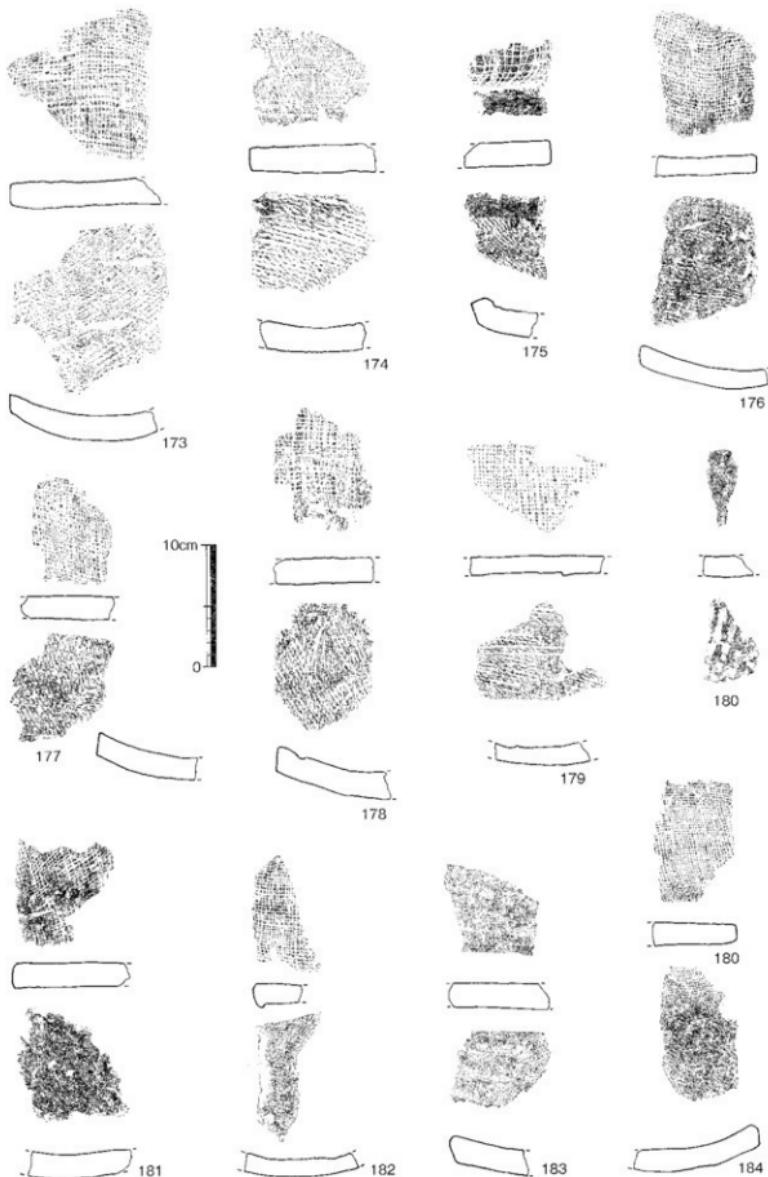
第36図 集石（第7層下部）出土遺物実測図①（縮尺1/4, 149は1/2）



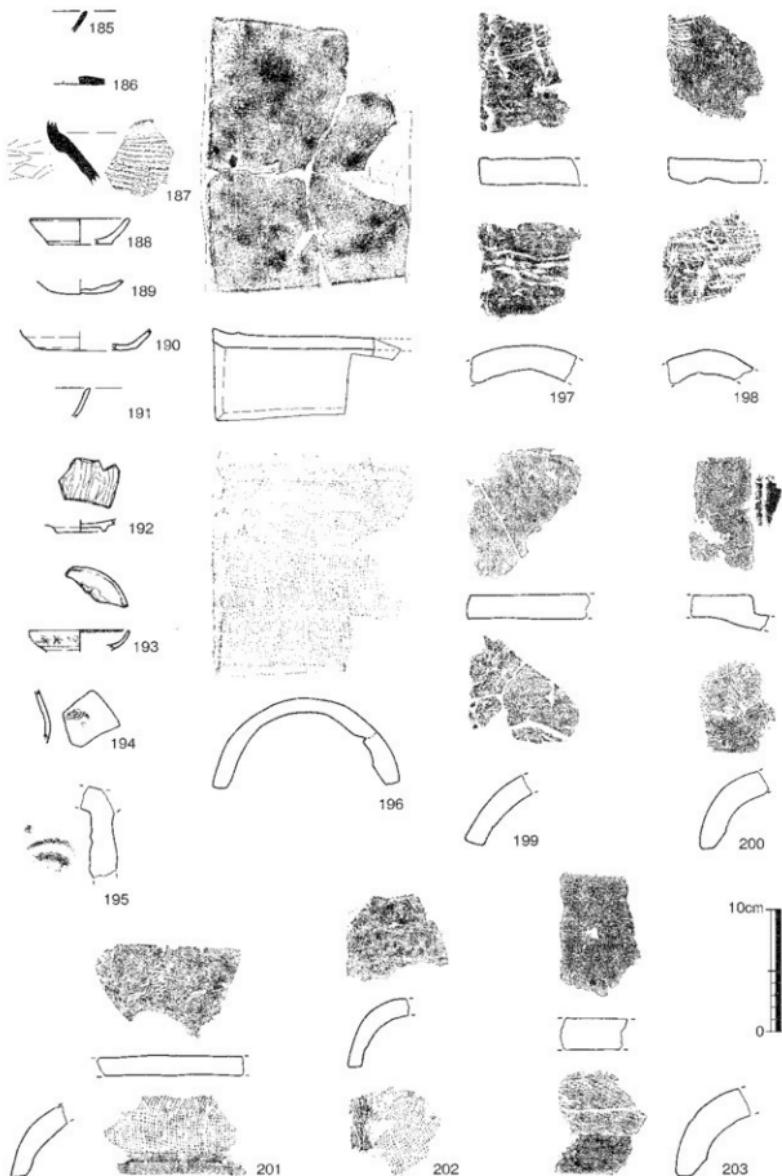
0 10cm



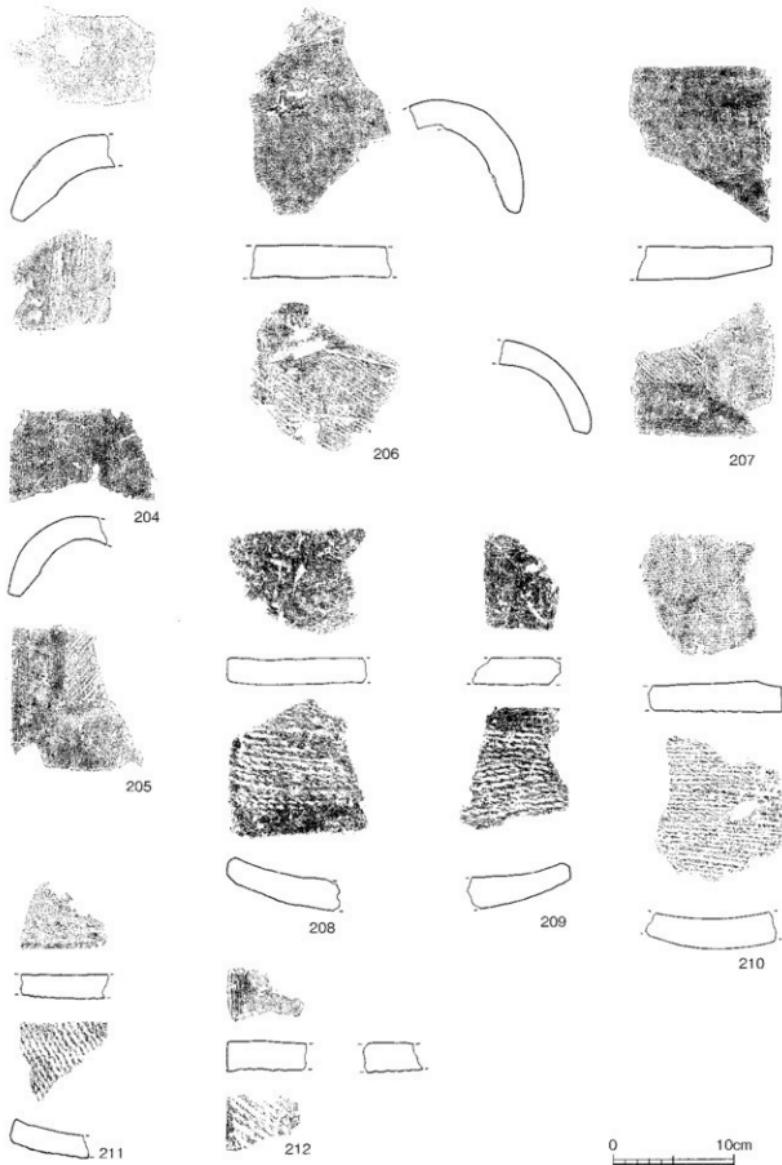
第37図 集石(第7層下部)出土遺物実測図②(縮尺1/4)



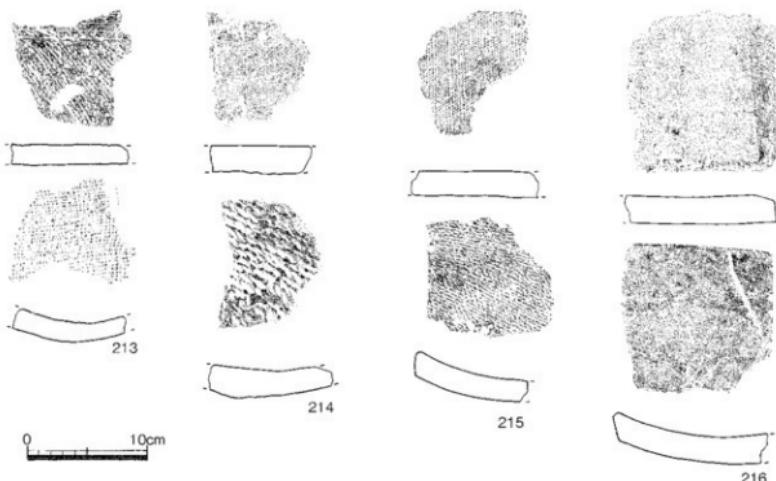
第38図 集石（第7層下部）出土遺物実測図③（縮尺1/4）



第39図 集石覆土（第7層上部）出土遺物実測図①（縮尺1/4）



第40図 集石覆土（第7層上部）出土遺物実測図②（縮尺1/4）



第41図 集石覆土（第7層上部）出土遺物実測図③（縮尺1/4, 217～221は1/2）

195は三巴文軒丸瓦で、復元瓦当径は15cm前後と小振りで、須恵質の焼成である。内区と外区を分ける圓線はなく、室町時代のものと推測される。196～207は丸瓦の破片で、196・201～203が須恵質、197～200・204は土師質の焼成で、205～207がいぶし瓦である。200・204は2次焼成を受けている。また、いぶし瓦のいぶしは不完全で全面には及んでいない。これら丸瓦の凹面にはすべて布目が残り、凸面は繩叩き痕または板ナデが認められる。208～216は半瓦の破片で、208・209は土師質、210～215は須恵質の焼成で、216のみがいぶし瓦である。いぶし瓦のいぶしは不完全である。これら平瓦は、いぶし瓦以外は凹面に布目、凸面に繩叩き痕が残る。217～221は鉄釘である。

以上の出土遺物のうち、もっとも年代が新しいのは193の肥前磁器染付小皿で、18世紀のものである。第7層下部の年代観より若干新しいが、混入の可能性も考慮に入れると、第7層下部と同じ17世紀末～18世紀前半と考えられる。

表土（第1層）（第8図壁面①～⑧・9図壁面⑨～⑫・42図）

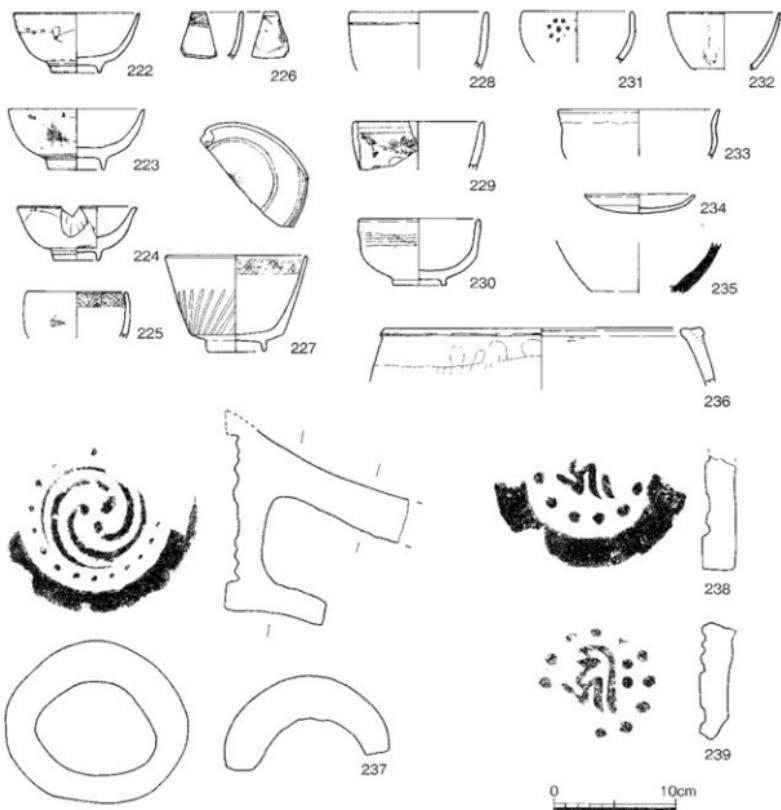
表土（第1層）は、調査区全域で確認した土層であり、現代に近い整地または堆積層である。そのため、調査時においては重機で掘削した。出土遺物のうち、図化できたものを第42図に掲載した。

222～229は肥前系磁器で、222～226は染付碗、227は青磁染付碗、228・229は陶胎染付である。230・231は瀬戸美濃系陶器で、230は鉄釉灰釉掛分碗、231は呉須絵碗である。232・233は産地不明の陶器で、232は鉄絵陶器碗、233は鉢である。234は備前焼陶器皿である。235は須恵器壺の底部附近と考えられる。236は土師質土器羽釜である。

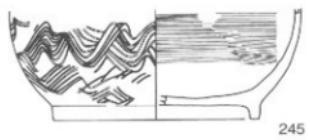
237は三巴文鳥糞瓦で、瓦当径は16.5cmと大振りで、巴文の尾は長いが圓線とはならず、珠文は18個前後に復元できる。佐藤編年の第6面・新（様相2・3）に相当し、1620年代～1650年代のものと推測される。238・239は梵字文軒丸瓦で、同範品である。梵字「キリーク」を中心に、大振りの珠文が12個巡っており、幅広の周縁をもつ。焼成は須恵質であり、239は2次焼成を受けている。中世のものと想定されるが、細かい時期は不明である。240は三巴文軒丸瓦で、巴文は頭部が接するものの尾は短く、外区に珠文が復元で16～20個巡っている。周縁は幅広で、焼成は土師質である。中世のものと想定される。241も三巴文軒丸瓦で、やや長めの尾をもつ巴文に、復元で16個前後の珠文が巡っている。佐藤編年の第6面・新（様相2・3）に相当し、1620年代～1650年代のものと推測される。242は波状文軒平瓦で、波状文は断面方向の凸線で明確に表現されおり、脇区幅は3cmと広い。文様の重なる部分は僅かであるが、文様表出や法量、瓦当の形態や接合方法が同じであることから、49の波状文軒平瓦と同範品である。ただし、49と違う点は、49にはなかった範轍（拓本中央の左下）ができており、瓦当上縁の面取りを省略していることである。いぶしが瓦当面まで回っておらず、焼成は須恵質である。49と同じ15～16世紀のものである。243は寛永通室である。244は瓦質の汽車で、細部まで表現されている。前面下部にはカウキャッチャー、同上部には前照灯、上面には前から順に煙突・スチームドーム・運転席・石炭および水タンク、下部には車輪が表現されている。調査区周辺表探遺物（第43図）

調査区周辺で表探された遺物で、245・246は調査区東側の納経所南で、247・248は本堂東側の福荷社東で、249は本堂北の竹林で採集されたものである。

245は瓦質土器鉢である。246は三巴文軒丸瓦で、復元で瓦当径が13cm前後の小型品である。巴文の尾が接して圓線をなしており、外区の珠文は16個前後と推測される。中世のものと想定される。247は逆珠文軒平瓦で、珠文を3個一組とし2組以上配して圓線で囲っており、50・51と同範品と考えられる。頭後縁を面取りしており、四面に布目、凸面に縱方向の板ナデ調整が見られる。いぶしが部分的にまわっておらず、須恵質の焼成である。また、向かって右側の後方が斜めに切斷されていることから、隅瓦であることが分かる。248も50・51・247と同範品の可能性がある軒平瓦の破片で、内外区を分ける圓線の角の特徴が似ている。須恵質の焼成である。249は三巴文軒丸瓦で、瓦当径が12.6cmの小型品である。内区には尾が長い三巴文、外区には珠文が復元で14個前後巡り、内外区は圓線で区分されている。中世のものと想定される。



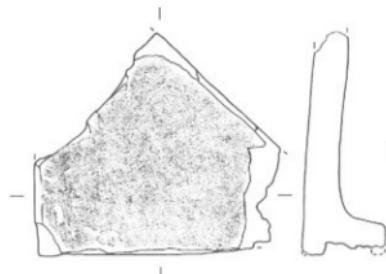
第42図 表土（第1層）出土遺物実測図（縮尺1/4、243・244は1/2）



245



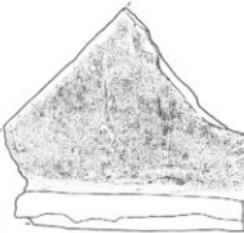
246



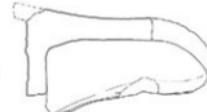
I



247



248



249



第43図 調査区周辺表探遺物実測図（縮尺1/4）

番号	器種	直徑(cm)	口径(cm)	脚部	国	年代	出土	参考	
1	便器系鉢形 漆付陶	9.8	(4.5)	外腹:滑胎 内腹:滑胎	後奈良時代(710年)- 光明時代(730年)前後	奈良	大正:今 昭和:古字		
2	便器系鉢形 漆付陶	12.0	(2.6)	外腹:滑胎 内腹:滑胎	後奈良時代(710年)- 光明時代(730年)前後	奈良	大正:今 昭和:古字		
3	便器系鉢形 漆付陶	12.7	(4.4)	外腹:滑胎 内腹:滑胎	後奈良時代(710年)- 光明時代(730年)前後	奈良	内腹:両方擦文		
4	陶油灯付 灰釉陶瓶			(2.5)	升形:施灰入 内腹:施灰入	後奈良時代(710年)- 光明時代(730年)前後	奈良	大正:今 昭和:古字	
5	便器系鉢形 漆付陶	4.7	(1.0)	外腹:滑胎(入) 内腹:滑胎(入)、底部は露胎、側面へツボ印	後奈良時代(710年)- 光明時代(730年)前後	奈良	外腹底部:「油木」印押		
6	漆戸系漆油 漆付陶瓶	9.6	(4.7)	外腹:滑胎(入)、底部は露胎 内腹:滑胎(入)、底部は露胎	後奈良時代(710年)- 光明時代(730年)前後	奈良	外腹底部:「油木」印押		
7	漆戸系漆油 漆付陶瓶	13.4	(6.0)	外腹:滑胎 内腹:滑胎	後奈良時代(710年)- 光明時代(730年)前後	奈良	外腹:油木型(788年) 内腹:油木型(788年)	中古内 古文	
8	灰釉器	4.0		外腹:滑胎	後奈良時代(710年)- 光明時代(730年)前後	奈良	外腹:古字	昭和:古字	
9	灰釉器	4.0		外腹:滑胎	後奈良時代(710年)- 光明時代(730年)前後	奈良	外腹:古字	昭和:古字	
10	灰釉器	5.0		外腹:滑胎	後奈良時代(710年)- 光明時代(730年)前後	奈良	外腹:古字	昭和:古字	
11	灰瓦	既定	(7.0)	既定	既定	既定	既定	既定	
12	平瓦	既定	(6.0)	既定	既定	既定	既定	既定	
13	漆付陶瓶	12.0	(3.0)	外腹:滑胎	後奈良時代(710年)- 光明時代(730年)前後	奈良	外腹:油木型(788年)	中古内 古文	
14	漆付陶瓶 人頭	3.0	(1.0)	外腹:滑胎(入) 内腹:滑胎(入)	後奈良時代(710年)- 光明時代(730年)前後	奈良	外腹:油木型(788年) 内腹:油木型(788年)	1mm以下の古美内 古文	
15	平瓦	既定	(7.0)	既定	既定	既定	既定	既定	
16	丸瓦	既定	(6.0)	既定	既定	既定	既定	既定	
17	丸瓦	既定	(6.0)	既定	既定	既定	既定	既定	
18	丸瓦	既定	(6.0)	既定	既定	既定	既定	既定	
19	丸瓦	既定	(6.0)	既定	既定	既定	既定	既定	
20	平瓦	既定	(6.0)	既定	既定	既定	既定	既定	
21	平瓦	既定	(6.0)	既定	既定	既定	既定	既定	
22	漆付陶瓶 人頭	6.2	(1.0)	外腹:滑胎(入) 内腹:滑胎(入)	後奈良時代(710年)- 光明時代(730年)前後	奈良	外腹:油木型(788年) 内腹:油木型(788年)	中古内 古文	
23	漆付陶瓶 人頭	19.2	(0.8)	外腹:滑胎(入) 内腹:滑胎(入)	後奈良時代(710年)- 光明時代(730年)前後	奈良	外腹:油木型(788年) 内腹:油木型(788年)	中古内 古文	
24	漆付陶瓶 人頭	16.0	(0.8)	外腹:滑胎(入) 内腹:滑胎(入)	後奈良時代(710年)- 光明時代(730年)前後	奈良	外腹:油木型(788年) 内腹:油木型(788年)	中古内 古文	
25	丸瓦	既定	(7.0)	既定	既定	既定	既定	既定	
26	漆付陶瓶 人頭	7.0	(0.8)	外腹:滑胎(入) 内腹:滑胎(入)	後奈良時代(710年)- 光明時代(730年)前後	奈良	外腹:油木型(788年) 内腹:油木型(788年)	1mm以下の古美内 古文	
27	土器質二足 漆付陶瓶	既定		外腹:コトナリ 内腹:滑胎	後奈良時代(710年)- 光明時代(730年)前後	奈良	外腹:油木型(788年) 内腹:油木型(788年)	中古内 古文	
28	丸瓦	既定	(7.0)	既定	既定	既定	既定	既定	
29	丸瓦	既定	(7.0)	既定	既定	既定	既定	既定	
30	丸瓦	既定	(7.0)	既定	既定	既定	既定	既定	
31	丸瓦	既定	(7.0)	既定	既定	既定	既定	既定	
32	丸瓦	既定	(6.0)	既定	既定	既定	既定	既定	
33	平瓦	既定	(6.0)	既定	既定	既定	既定	既定	
34	漆付陶瓶 人頭	14.0	(0.8)	外腹:滑胎(入) 内腹:滑胎(入)	後奈良時代(710年)- 光明時代(730年)前後	奈良	外腹:油木型(788年) 内腹:油木型(788年)	中古内 古文	
35	一足文向丸瓦	既定	(7.0)	既定	既定	既定	既定	既定	
36	既付文向丸瓦	既定	(7.0)	既定	既定	既定	既定	既定	
37	一足文向丸瓦	既定	(7.0)	既定	既定	既定	既定	既定	
38	三足文向丸瓦	既定		既定	既定	既定	既定	既定	
39	一足文向丸瓦	既定		既定	既定	既定	既定	既定	
40	二足文向丸瓦	既定	(7.0)	既定	既定	既定	既定	既定	
41	丸瓦	既定	(7.0)	既定	既定	既定	既定	既定	
42	丸瓦	既定	(7.0)	既定	既定	既定	既定	既定	
43	平瓦	既定	(6.0)	既定	既定	既定	既定	既定	
44	高漆 漆付陶瓶	既定	(7.0)	既定	外腹:ナリ 内腹:滑胎	後奈良時代(710年)- 光明時代(730年)前後	奈良	外腹:油木型(788年) 内腹:油木型(788年)	中古内 古文
45	一足文向丸瓦	既定	(7.0)	既定	既定	既定	既定	既定	
46	二足文向丸瓦	既定	(7.0)	既定	既定	既定	既定	既定	
47	三足文向丸瓦	既定	(7.0)	既定	既定	既定	既定	既定	
48	四足文向丸瓦	既定	(7.0)	既定	既定	既定	既定	既定	
49	高漆 漆付陶瓶	既定	(7.0)	既定	外腹:ナリ 内腹:滑胎	後奈良時代(710年)- 光明時代(730年)前後	奈良	外腹:油木型(788年) 内腹:油木型(788年)	中古内 古文
50	既付文向丸瓦	既定	(7.0)	既定	既定	既定	既定	既定	
51	既付文向丸瓦	既定	(7.0)	既定	既定	既定	既定	既定	
52	既付文向丸瓦	既定	(7.0)	既定	既定	既定	既定	既定	
53	既付文向丸瓦	既定	(7.0)	既定	既定	既定	既定	既定	
54	既付文向丸瓦	既定	(7.0)	既定	既定	既定	既定	既定	
55	既付文向丸瓦	既定	(7.0)	既定	既定	既定	既定	既定	
56	既付文向丸瓦	既定	(7.0)	既定	既定	既定	既定	既定	
57	既付文向丸瓦	既定	(7.0)	既定	既定	既定	既定	既定	
58	既付文向丸瓦	既定	(7.0)	既定	既定	既定	既定	既定	
59	既付文向丸瓦	既定	(7.0)	既定	既定	既定	既定	既定	
60	既付文向丸瓦	既定	(7.0)	既定	既定	既定	既定	既定	
61	既付文向丸瓦	既定	(7.0)	既定	既定	既定	既定	既定	
62	既付文向丸瓦	既定	(7.0)	既定	既定	既定	既定	既定	
63	既付文向丸瓦	既定	(7.0)	既定	既定	既定	既定	既定	
64	既付文向丸瓦	既定	(7.0)	既定	既定	既定	既定	既定	
65	既付文向丸瓦	既定	(7.0)	既定	既定	既定	既定	既定	
66	既付文向丸瓦	既定	(7.0)	既定	既定	既定	既定	既定	
67	既付文向丸瓦	既定	(7.0)	既定	既定	既定	既定	既定	
68	既付文向丸瓦	既定	(7.0)	既定	既定	既定	既定	既定	
69	既付文向丸瓦	既定	(7.0)	既定	既定	既定	既定	既定	
70	既付文向丸瓦	既定	(7.0)	既定	既定	既定	既定	既定	
71	既付文向丸瓦	既定	(7.0)	既定	既定	既定	既定	既定	

第2表 屋島寺出土遺物観察表①

第3表 屋島寺出土遺物觀察表②

番号 登記 番号	品種	重量(g)		表面	裏面	色調	基準	備考
		正重	副重					
106	漆平二輪 鏡	5.7	(4.0)	外面 漆無	内面 漆無	青赤-灰褐色	6mm以下の漆無 内面:火赤-5V/2	
107	漆平二輪 鏡	8.9	(6.0)	外面 漆無	内面 漆無	多色合	多色合	
108	漆平二輪 鏡	6.2	(4.0)	外面 漆無	内面 漆無	青赤-灰褐色	6mm以下の赤茶-灰 内面:火赤-5V/2	
109	漆平二輪 鏡	3.8	(3.0)	外面 漆無	内面 漆無	青赤-灰褐色	6mm以下の赤茶-灰 内面:火赤-5V/2	
110	漆平二輪 鏡	6.0	(2.0)	外面 漆無	内面 漆無	青赤-灰褐色	6mm以下の赤茶-灰 内面:火赤-5V/2	
111	漆平二輪 鏡	6.6	(2.0)	外面 漆無	内面 漆無	青赤-灰褐色	6mm以下の赤茶-灰 内面:火赤-5V/2	
112	漆平二輪 鏡	5.2	(3.0)	外面 漆無	内面 漆無	青赤-灰褐色	6mm以下の赤茶-灰 内面:火赤-5V/2	
113	漆製小瓶 蓋	系5	緑5	外面 漆無	内面 漆無	青赤-灰褐色	6mm以下の赤茶-灰 内面:火赤-5V/2	
114	漆製小瓶 蓋	系5	緑5	外面 漆無	内面 漆無	青赤-灰褐色	6mm以下の赤茶-灰 内面:火赤-5V/2	
115	漆製小瓶 蓋	15.4	(1.0)	外面 漆無	内面 漆無	青赤-灰褐色	6mm以下の赤茶-灰 内面:火赤-5V/2	
116	漆製小瓶 蓋	14.0	(1.0)	外面 漆無	内面 漆無	青赤-灰褐色	6mm以下の赤茶-灰 内面:火赤-5V/2	
117	漆製小瓶 蓋	10.0	(1.0)	外面 漆無	内面 漆無	青赤-灰褐色	6mm以下の赤茶-灰 内面:火赤-5V/2	
118	漆製小瓶 蓋	11.0	(1.0)	外面 漆無	内面 漆無	青赤-灰褐色	6mm以下の赤茶-灰 内面:火赤-5V/2	
119	漆製小瓶 蓋	11.0	(1.0)	外面 漆無	内面 漆無	青赤-灰褐色	6mm以下の赤茶-灰 内面:火赤-5V/2	
120	漆製小瓶 蓋	6.4	(1.0)	外面 漆無	内面 漆無	青赤-灰褐色	6mm以下の赤茶-灰 内面:火赤-5V/2	
121	漆製小瓶 蓋	23.0	15.0	外面 漆無	内面 漆無	青赤-灰褐色	6mm以下の赤茶-灰 内面:火赤-5V/2	
122	漆製小瓶 蓋	11.0	(0.5)	外面 漆無	内面 漆無	青赤-灰褐色	6mm以下の赤茶-灰 内面:火赤-5V/2	
123	漆製小瓶 蓋	2.0	(0.5)	外面 漆無	内面 漆無	青赤-灰褐色	6mm以下の赤茶-灰 内面:火赤-5V/2	
124	漆製小瓶 蓋	9.0	(2.0)	外面 漆無	内面 漆無	青赤-灰褐色	6mm以下の赤茶-灰 内面:火赤-5V/2	
125	漆製小瓶 蓋	6.0	(2.0)	外面 漆無	内面 漆無	青赤-灰褐色	6mm以下の赤茶-灰 内面:火赤-5V/2	
126	漆製小瓶 蓋	17.0	(2.0)	外面 漆無	内面 漆無	青赤-灰褐色	6mm以下の赤茶-灰 内面:火赤-5V/2	
127	漆製小瓶 蓋	3.5	9.3	外面 漆無	内面 漆無	青赤-灰褐色	6mm以下の赤茶-灰 内面:火赤-5V/2	
128	漆製小瓶 蓋	12.0	9.4	外面 漆無	内面 漆無	青赤-灰褐色	6mm以下の赤茶-灰 内面:火赤-5V/2	
129	漆製小瓶 蓋	10.2	(1.0)	外面 漆無	内面 漆無	青赤-灰褐色	6mm以下の赤茶-灰 内面:火赤-5V/2	
130	漆製小瓶 蓋	9.0	(2.0)	外面 漆無	内面 漆無	青赤-灰褐色	6mm以下の赤茶-灰 内面:火赤-5V/2	
131	漆製小瓶 蓋	5.8	(2.0)	外面 漆無	内面 漆無	青赤-灰褐色	6mm以下の赤茶-灰 内面:火赤-5V/2	
132	漆製小瓶 蓋	19.2	(6.0)	外面 漆無	内面 漆無	青赤-灰褐色	6mm以下の赤茶-灰 内面:火赤-5V/2	
133	漆製小瓶 蓋	40.0	(5.0)	外面 漆無	内面 漆無	青赤-灰褐色	6mm以下の赤茶-灰 内面:火赤-5V/2	
134	漆製小瓶 蓋	2.0	(0.5)	外面 漆無	内面 漆無	青赤-灰褐色	6mm以下の赤茶-灰 内面:火赤-5V/2	
135	漆製小瓶 蓋	6.0	(2.0)	外面 漆無	内面 漆無	青赤-灰褐色	6mm以下の赤茶-灰 内面:火赤-5V/2	
136	漆製小瓶 蓋	2.0	(0.5)	外面 漆無	内面 漆無	青赤-灰褐色	6mm以下の赤茶-灰 内面:火赤-5V/2	
137	漆製小瓶 蓋	8.6	4.6	外面 漆無	内面 漆無	青赤-灰褐色	6mm以下の赤茶-灰 内面:火赤-5V/2	
138	漆製小瓶 蓋	1.0	(0.5)	外面 漆無	内面 漆無	青赤-灰褐色	6mm以下の赤茶-灰 内面:火赤-5V/2	
139	漆製小瓶 蓋	2.0	(0.5)	外面 漆無	内面 漆無	青赤-灰褐色	6mm以下の赤茶-灰 内面:火赤-5V/2	
140	漆製小瓶 蓋	2.0	(0.5)	外面 漆無	内面 漆無	青赤-灰褐色	6mm以下の赤茶-灰 内面:火赤-5V/2	
141	漆製小瓶 蓋	3.5	(3.0)	外面 漆無	内面 漆無	青赤-灰褐色	6mm以下の赤茶-灰 内面:火赤-5V/2	
142	漆製小瓶 蓋	2.0	(2.0)	外面 漆無	内面 漆無	青赤-灰褐色	6mm以下の赤茶-灰 内面:火赤-5V/2	
143	漆製小瓶 蓋	1.0	(1.0)	外面 漆無	内面 漆無	青赤-灰褐色	6mm以下の赤茶-灰 内面:火赤-5V/2	
144	漆製小瓶 蓋	6.3	(2.0)	外面 漆無	内面 漆無	青赤-灰褐色	6mm以下の赤茶-灰 内面:火赤-5V/2	
145	漆製小瓶 蓋	7.0	(2.0)	外面 漆無	内面 漆無	青赤-灰褐色	6mm以下の赤茶-灰 内面:火赤-5V/2	
146	丸丸	16.0	10.1	外面 漆無	内面 漆無	青赤-灰褐色	6mm以下の赤茶-灰 内面:火赤-5V/2	
147	丸丸	10.0	7.0	外面 漆無	内面 漆無	青赤-灰褐色	6mm以下の赤茶-灰 内面:火赤-5V/2	
148	平耳	0.5	(0.5)	外面 漆無	内面 漆無	青赤-灰褐色	6mm以下の赤茶-灰 内面:火赤-5V/2	
149	円筒	2.0	2.0	外面 漆無	内面 漆無	青赤-灰褐色	6mm以下の赤茶-灰 内面:火赤-5V/2	
150	漆製小瓶 蓋	13.0	7.0	外面 漆無	内面 漆無	青赤-灰褐色	6mm以下の赤茶-灰 内面:火赤-5V/2	
151	漆製小瓶 蓋	6.6	0.5	外面 漆無	内面 漆無	青赤-灰褐色	6mm以下の赤茶-灰 内面:火赤-5V/2	
152	漆製小瓶 蓋	2.0	2.0	外面 漆無	内面 漆無	青赤-灰褐色	6mm以下の赤茶-灰 内面:火赤-5V/2	
153	漆製小瓶 蓋	7.4	0.5	外面 漆無	内面 漆無	青赤-灰褐色	6mm以下の赤茶-灰 内面:火赤-5V/2	
154	漆製小瓶 蓋	6.0	0.5	外面 漆無	内面 漆無	青赤-灰褐色	6mm以下の赤茶-灰 内面:火赤-5V/2	
155	漆製小瓶 蓋	0.5	0.5	外面 漆無	内面 漆無	青赤-灰褐色	6mm以下の赤茶-灰 内面:火赤-5V/2	
156	漆製小瓶 蓋	2.0	2.0	外面 漆無	内面 漆無	青赤-灰褐色	6mm以下の赤茶-灰 内面:火赤-5V/2	
157	漆製小瓶 蓋	9.7	5.2	外面 漆無	内面 漆無	青赤-灰褐色	6mm以下の赤茶-灰 内面:火赤-5V/2	
158	漆製小瓶 蓋	—	—	外面 漆無	内面 漆無	青赤-灰褐色	6mm以下の赤茶-灰 内面:火赤-5V/2	
159	漆製小瓶 蓋	2.0	1.5	外面 漆無	内面 漆無	青赤-灰褐色	6mm以下の赤茶-灰 内面:火赤-5V/2	

第4表 屋島寺出土遺物観察表③

第5表 星島寺出土遺物觀察表④

第6表 屋島寺出土遺物觀察表⑤

第4章 まとめ

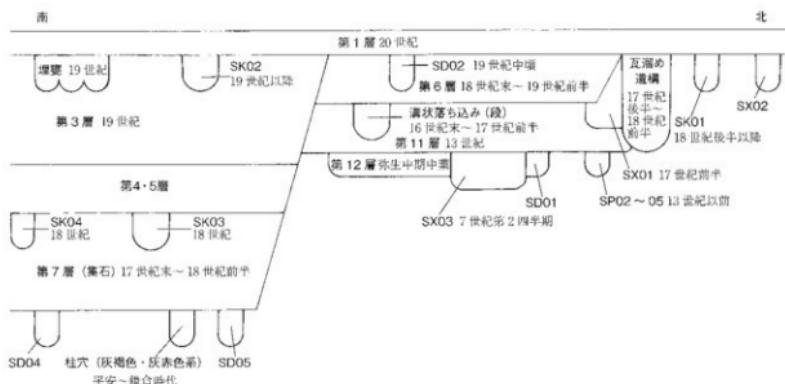
第1節 遺構および包含層（整地層）の変遷

第3章では各遺構および包含層について報告してきたので、次に調査区内での遺構および整地層の変遷を検討したい。ただし、出土遺物から年代が特定できる遺構・整地層は少なく、詳細な変遷を追うことは困難である。このため、大まかな年代観で捉えることになる。まず、年代が特定できる遺構や整地層を鍵として、これに各遺構と整地層の上下関係を絡めて検討していく。

出土遺物から年代が特定できる遺構は、SX03が7世紀第2四半期、溝状落ち込み（段）が16世紀末～17世紀前半、SK01が18世紀後半以降、SD02が19世紀中頃、埋甕が19世紀である。同様に整地層は、弥生土器包含層（第12層）が弥生時代中期、布目瓦包含層（第11層）が13世紀頃、いぶし瓦包含層（第6層）が18世紀末～19世紀前半の間、集石を含む第7層が17世紀末～18世紀前半である。次いで、層位の上下関係から類推できるものを列挙する。SD01はSX03に切られており、7世紀第2四半期以前となる。SD04・05は純叩き痕をもつ布目瓦を含み、第7層より下位にあることから、平安～室町時代のものと考えられる。SK03は、第7層上面にあり、19世紀の第3層だけでなく、第5層にも覆われていることから、18世紀と考えられる。SK04も第7層上面にあり、SK03と同じ頃と想定される。SX01は、出土遺物から江戸時代と推測され、第6層より下位にあることから17～18世紀のもの、さらに瓦溜め遺構に切られていることから、17世紀前半の可能性がある。瓦溜め遺構は、出土遺物からは17世紀後半～18世紀前半と推定されるが、第6層との上下関係が不明であり、さらに下る可能性もある。SK02は埋甕と同じ第3層上面にあり、19世紀以降と考えられる。柱穴については、SP02～05が第11層より下位にあり13世紀以前のもので、報告で述べたとおり、埋土が黄色系のものが江戸時代以降、灰褐色や灰赤色系のものが平安～室町時代に属する可能性がある。SP01の柱穴は、灰赤色系の埋土をもつことから平安～室町時代の可能性がある。以上のこととをまとめて、土層模式図にしたのが第44図である。これらを踏まえて、時代順に遺構および整地層の変遷を追っていく。

弥生時代中期中葉

北調査区中央部西半において、部分的に弥生時代中期中葉の遺物包含層（第12層）を確認した。斜面上から流れてきて2次堆積したものである。この時期の遺構は確認していないが、調査区付近に弥生の遺構があった可能性を指摘できる。



第44図 調査区土層模式図

飛鳥時代（7世紀第2四半期）

北調査区の堅穴状遺構 SX03 が、この時期唯一の遺構である。用途等は不明である。屋島には 667 年に築城された古代山城屋嶋城跡が存在し、当調査区も城内に含まれるが、SX03 とは僅かながら時期差が存在する。

平安～室町時代

北調査区全域に広がる布目瓦包含層（第 11 層）が 13 世紀頃のものであり、この時期に整地がなされた可能性がある。南調査区の緩斜面にある溝 SD04・05 は平安～鎌倉時代の間と推定されるが、用途等は明らかでない。柱穴の一部や SB01 も当該期に属する可能性がある。なお、遺構は存在しないが、第 7 層下部の集石からは平安時代の軒瓦が、瓦溜め遺構や表土からは中世の軒瓦が出土しており、これらの時期に草宇の建築または改修が行なわれた可能性を指摘できる。

江戸時代 1 期（17 世紀）

北調査区の溝状落ち込み（段）が該当し、出土した軒瓦から 16 世紀末～17 世紀前半と推定される。幅 3.4 m と広いことから、用途等は区画溝や通路とも想定されるが断定はできない。

江戸時代 2 期（17 世紀末～18 世紀前半）

南調査区の第 7 層が該当し、出土した陶磁器から 17 世紀末～18 世紀前半と推定される。第 7 層下部には捨石としての集石があり、緩斜面を平地にするための入念な整地層であることが分かる。ただし、完全には平地となっておらず、平地化は 19 世紀の整地を待つことになる。北調査区の瓦溜め遺構も当該期と考えられる。

江戸時代 3 期（18 世紀）

南調査区の SK03-04 が該当し、北調査区の SX01 は 17～18 世紀のものと推定される。SK03 は長さ 7.5 m、幅 1.15m、深さ 40cm の土坑で、最下層に厚さ約 10cm の炭層が均一にであること等から、宗教的儀礼に伴う土坑の可能性がある。SK04 も同じ様に炭層を含む土坑であるが、調査区南東隅で検出したのみで、全容は不明である。

江戸時代 4 期（19 世紀）

北調査区のいぶし瓦包含層（第 6 層）が 18 世紀末～19 世紀前半であり、これを一部覆う南調査区の第 3 層が上面の埋甕から 19 世紀と推定される。第 3 層の下にある第 4・5 層も近い時期と推定される。19 世紀に北および南調査区において、数度にわたる整地が断続的になされたと想定される。これらの整地により、調査区周辺は緩斜面から平地となっており、江戸時代末期の『讃岐國名勝圖會』挿絵（第 46 図）の状態になったものと考えられる。第 3・6 層上面において確認した埋甕と SD02 は 19 世紀のものであり、SK02 も 19 世紀のものと考えられる。

第 2 節 調査の結果

今回の調査は、屋島寺境内で行なわれた唯一の本格的な発掘調査であり、屋島寺のみならず様々な時代の遺構・遺物を確認するとともに、屋島寺の時期的変遷を推測できる資料を得ることができた点で評価できる。評価できる調査結果を箇条書きにすると、次のようになる。

- ① 強生時代中期中葉の遺物が一定量存在することから、標高約 300 m の屋島南嶺山上に高地性集落が存在した可能性を指摘できる。旧鈴間町（三豊市）の紫宏出遺跡や、旧庵治・半札町（高松市）のダンペラ遺跡や源氏ヶ峯遺跡も、屋島同様に瀬戸内海に突き出た半島の山上にあり、注目できる。
- ② SX03 から 7 世紀第 2 四半期の須恵器が出土したが、これは 667 年に築城された古代山城屋嶋城跡と近い時期のものである。ただし、僅かながら時期差が存在し、両者の関係は明白でない。
- ③ 平安時代後期の軒丸瓦や軒平瓦、さらに丸瓦や平瓦が出土したことにより、屋島南嶺における屋島寺の造寺活動が平安時代後期にまで遡ることが明らかになった。その後に実施された屋島基礎調査事業で、屋島寺の造寺活動はより明らかになっており、10 世紀前半頃には北嶺で仏堂が建立され、11 世紀には南嶺へ寺院を移しているようである。なお、北嶺から南嶺への移転は屋島寺の寺伝にも記されており、寺伝では空海が移転したとされ移転時期ははずれるが、寺伝と符号している。

- ④ 北調査区の布日瓦包含層（第11層）は13世紀の遺物を含み、13世紀に極めて近い時期の整地層である。本堂が鎌倉時代末期（14世紀前業）建立と考えられており、本堂建立時期と近い。布日瓦包含層が本堂西側で隣接していることを考慮すると、この包含層が本堂建立に伴う整地層の可能性が高い。また、13世紀代の遺物が比較的多く見られ、屋島寺の活発な活動がうかがえる。
- ⑤ 主に南調査区で確認した整地層から、江戸時代において田地形の斜面を平地にする造成工事が繰り返し行なわれていたことが明らかとなった。最初は、17世紀末～18世紀前半の第7層で、下部に捨石である集石が存在している。SK03・04の存在から、しばらくの空白期間があったと想定され、次いで第4・5層の整地層がある。18世紀末～19世紀前半には北調査区でも第6層（いぶし瓦包含層）の整地層があり、次いで19世紀の第3層がある。この造成工事は、屋島寺境内の拡張工事であり、屋島寺の経済的発展の現れと見ることが可能であろう。
- ⑥ 江戸時代に属する遺構から屋島寺の活動の一端をうかがい知ることができる。まず16世紀末～17世紀前半の溝状落ち込み（段）は、本堂軒先の延長上にありその関係が注目されるが、区画溝や通路とも考えられる。18世紀の埋甕3基は、この時期境内が一時的に墓地として利用されていたことを表している。また、17世紀後半～18世紀前半の瓦溜め遺構も、年代的に開きがあり更なる検証をするが、江戸時代末期に描かれた最近まで残っていた築地塀に沿って掘削されており注目できる。築地塀に沿っていることから、塀からの雨落ち水を流す暗渠排水の可能性もあり、この場合はSX01と同一の遺構となる可能性が出てくるが、現時点では断定できない。
- ⑦ 調査区の旧地形は、北東から南西に傾斜する斜面であり、後述する本堂北東における試掘調査では西から東への傾斜が確認されている。これらのことから、地形図から読み取れるとおり、本堂は北から南にのびる尾根を削平して建てられたと想定される。

第3節 屋島寺の変遷

屋島寺は、四国靈場第八十四番札所として有名であり、南面山千光院と号す真言宗御室派に属する名刹である。今回の調査結果を踏まえながら、屋島寺の変遷を検討してみる。最近では、山元敏裕氏により「北嶺（千間堂）から南嶺（屋島寺）への変遷について」^[山元 2000]で試みられているが、今回報告する本調査の内容が未整理だったため、本堂東側で判明した事実について触れることができなかった。本稿では、その欠を補いたい。

【屋島寺の創建と伝承】

屋島寺の創建に関わる伝承は、江戸時代の文書に散見される。もっとも古いのは慶長16年（1611）の『屋島寺龍巣勵進帳』であり、次いで承応2年（1653）の澄禪『四国遍路日記』、弘化4年（1847）の『金毘羅參詣名所圖會』、嘉永7年（1854）に著されたが屋島寺の伝承部分は治安元年（1021）の記録を基にしたという『讚岐國名勝圖會』があり、その内容を抜粋・集約して一覧にしたのが第7表である。細部では異なるが、大筋では、唐僧鑑真が来朝の時に屋島を笠地と見て山上に登って伽藍を整てるとともに普賢菩薩を安置し、弘法大師が千光院を建てて千手觀音を作ったとされている。今でも、屋島を北嶺と南嶺に分ける西側の谷は、鑑真が登った「鑑真谷」として地名が残されている。ここで注目したいのは、現在南嶺にある屋島寺がかつては北嶺にあったという伝承である。『讚岐國名勝圖會』では弘法大師が北嶺に千光院を建てたと伝え、『四国遍路日記』では鑑真が北嶺に寺を建て42坊を数えるまでに栄えたが、その後衰退したので弘法大師が入りに近い南嶺に千光院を建てたとされている。つまり伝承では、屋島寺は創建当初は北嶺にあったといでのである。

それでは、南嶺における屋島寺が建立された上限を、文化財サイドから見てみたい。これまで南嶺で実施された発掘調査では、10～11世紀の軒瓦が1点のみ存在するが、一定量出土するのは11世紀以降の軒瓦である。土器等は、一部に9世紀のものが存在するが、11世紀後半以降のものが比較的多く見られる。一方、屋島寺に残された文化財では、本堂が鎌倉末期の建造であり、本尊の木造千手觀音坐像は10世紀の作と推定されている。軒瓦や仏像が再利用や移動されることを考慮すると、遺物が量的に安定する11世紀後半以降に屋島寺が南嶺に建立された上限である可能性を指摘できる。

書名 刊行年	屋島寺龍藏勅進帳 慶長16年(1611)	四国遍路日記 承暦2年(1653)	金毘羅參詣名所圖會 弘化4年(1847)	瀬枝國名勝圖會 嘉永7年(1851)
年代	孝謙天皇在位の天平元年 (749~758年)	天平勝宝6年(754)	天平寶字6年(762)10月	
内容	鷹真和尚が奈朝の時、山頂に登った。その時、老翁が現れ、ここは七仏說法の場であり、天仙が坐まる場であると言つて消えた。そこで、和舟は一字の伽藍を建て、普賢菩薩像を安置した。	鷹真和尚が奈朝の時、鳳島に異氣を感じて登つたところ、寺院を建立すべき靈地として北峰に寺を建てて南面山とひした。その後、鷹真は南都に赴いた。	鷹真和尚が東朝の時、船中において屋島から端光がたつのを見て山に登つた。その後、一人の老翁が出現し、この山で仏法を宣説せよと言つて姿を消した。鷹真是富んで、鉢を山に残して印とし、籠に上つた。	鷹真和尚が米朝の時、船中より屋島を靈地と見て登り、五十七日のち作礼して去り、仏舍利三粒・菩薩子の念珠等を寺に送つた。
年代				天平中(729~767年) 座神御道の上人が北峰にいて、一鉢を飛ばして南海往来の船上に食を求めていたが、後に登仙した。
内容				
年代	弘仁元年(810)	寺には鷹真の衣鉢が残されたが、鉢は空に並べて沖を漕行する舟に舟料を譲うので、舟人は驚いて米穀を入れると鉢は舟へ帰つていった。このため崇拝を集め、屋島は繁盛して12坊を構えらるまでになった。しかし、ある時、舟人が魚頭を鉢に入れるとき、鉢は燃れて舟も沈んでしまつた。そして、寺も衰退してしまつたが、その時の本尊は枳是像で今も残されている。	後に鷹真是天皇より屋島を授かたので、弟子空鉢恵海律師に開基させ、普賢菩薩の像などを置いた。この時、二聖二天十羅刹女が出現して、種々の靈異をあらわし、五十七日を経て去つた。招提寺を創始し、仏舍利三粒と菩薩樹の数珠を送つた。	弘仁年中(810~824年) 弘法大師が北峰に千光院を建立して、薬山明神を鎮護の神とした。
内容	弘法大師が千光院を建て、自ら手御木等を葬り、さらに西門大曼荼羅堂や一切經藏、多宝塔を造つた。			
年代				人麿年中(947~957年) 明達師が業で、國夫王堂を建立してその像を安置し、一夏九旬の間五大明法の秘法を勵行する。
内容				
備考				以上のこととは、屋島寺住職性純が、治安元年(1021)3月9日に記録したものであると注記されている。

出典：屋島寺龍藏勅進帳
四国遍路日記
金毘羅參詣名所圖會
瀬枝國名勝圖會

香川県1972年「香川叢書第一巻 楽名著出版
宮崎忍勝解説校注1977年「選舉四國遍路日記」講談社東山出版社
松原秀明編集1981年「日本名所風俗図会」4四國の巻 勝角川書店
松原秀明編集1981年「日本名所風俗図会」14四國の巻 勝角川書店

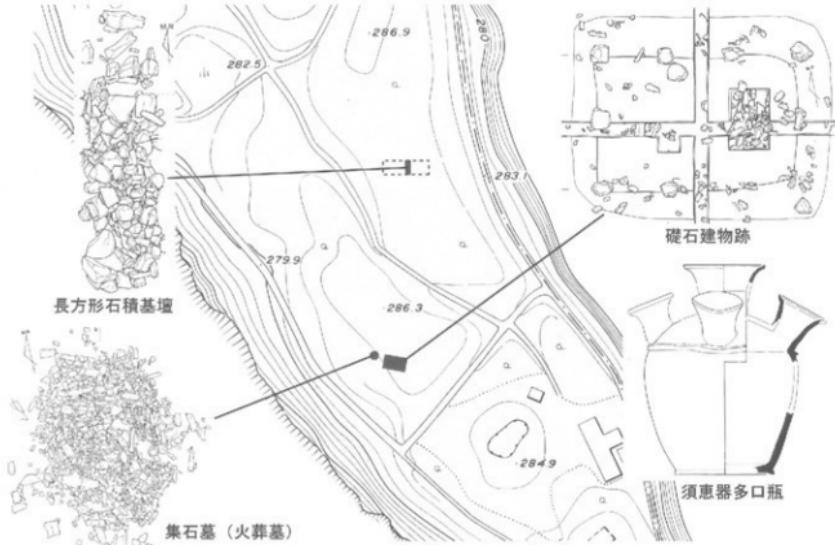
第7表 屋島寺創建に関わる伝説一覧表

【屋島北嶺の調査】

北嶺には「千間堂跡」または「千軒堂跡」という地名が現在も残されており、かつて寺院が存在したことを伺わせる。江戸時代では、高松藩の雷員である奥村景武が永享2年(1745)に著した『屋島記』(『讃岐國名勝圖會』に所収)によれば、北嶺には「かつて坊舎を築くこと一千、遺跡がいまだ残っている。」と紹介している。『四國遍路日記』に著されている北嶺にあった四十二坊も、実際の数というより多くの坊があったことを示していると推測される。このことより、現在の地名は「千間堂跡」が一般的だが、本来は「千軒堂跡」が適当であろう。

さて、この北嶺において平成10～12年度に実施された屋島基礎調査事業によって、寺院跡の存在が明らかになった。確認された遺構は、土壇をもつ礎石建物跡、集石墓、長方形石積基壇、掘立柱建物跡2棟などである。礎石建物跡は、東西8.5m・南北6.6m・高さ約40cmの土壇の上に、東西3間×南北2間に礎石を並べたものであり、土壇中から仏具である須恵器多口瓶が4個体分出土したことから、仏堂跡と推測されている。もっとも新しい多口瓶から10世紀前半の年代が考えられる。また、1/2にまで復元できる平瓦が出土していることから、駿斗瓦を使用していたと考えられる。長方形石積基壇は、礎石建物跡から北へ約90m離れたところにある長さ10m・幅2m・高さ40cm以上の石積で、寺域北限を示す可能性が推測されており、10世紀の遺物が出土している。掘立柱建物跡は、礎石建物跡の北隣接地で確認されたもので、東西2間×南北1間と東西1間×南北1間以上のものである。出土遺物はないが、礎石建物跡と隣接して方位をほぼ同じくすることから、同時並存していた可能性が高い。集石墓は、礎石建物跡の西に隣接してあり、南北7m・東西8mの範囲に安山岩板石の集石が認められ、中央には約2m四方の区画があり、区画の中には土坑が存在する。出土遺物から12世紀末～13世紀初頭の年代が考えられ、礎石建物跡より新しい。類例より火葬墓の可能性が推測されている。なお、礎石建物跡周辺で出土する遺物は、9世紀後半の縁釉陶器なども認められるが、10～11世紀のものが圧倒的に多く、それ以降は減少する傾向にある。

以上のことから、北嶺における寺院活動を推測すると、その始まりは9世紀後半に遡る可能性があり、本格的に整備されたのは仏堂（礎石建物跡）を建立した10世紀前半であり、仏堂を中心に掘立柱建物が建てられていったと考えられる。トレーニング調査であることを考慮すると、掘立柱建物跡の数は確実にもっと増えるであろう。その盛期は、出土遺物より10～11世紀である。そして、その姿は江戸時代の文献に著された「かつて坊舎を築くこと一千」「四十二坊」に近いものであったであろう。また、注意すべき点は南嶺でも9世紀代の遺物がある程度出土していることである。このことは、9世紀には南嶺にも寺院が存在した可能性を示唆するが、仏具等はいまだ出土していないため不明である。南嶺では10～11世紀代の遺物が乏しいことを考えると、10世紀前半の北嶺の仏堂建立により寺院機能が北嶺に集約された可能性があるが、今後の調査成果によりたい。



第45図 屋島北嶺で確認された寺院跡遺構および遺物実測図

【屋島北嶺から南嶺へ】

屋島北嶺で確認できる遺物は、10～11世紀がもっとも多く、11世紀代を境に減少する。代わって南嶺ではこの時期から遺物量が増加することから、11世紀末から12世紀初頭に北嶺から南嶺に寺院が移ったと考えられ、その理由として、この頃から四国靈場八十八箇所巡りが始まり、参拝に不便な北嶺（修驗の場）から平野に近い南嶺に移した結果と位置づけられている（山元2003）。『四国遍路日記』でも「北峰の寺が廃れたので人里近い南峰へ移した」とほぼ同じ理由を挙げている。四国靈場八十八箇所巡りの開始時期についてはまだまだ議論すべきであろうが、修驗の場から世俗に近い場所へ移動したという考えは支持できる。また、12世紀は讃岐国内において山岳寺院が再び造営または再整備される時期もあり、それとの関連性も指摘されている（遠藤2006）。屋島北嶺から南嶺への寺院移動は、そういう状況の中で選択されたものと考えられる。ただし、12世紀末～13世紀初頭の集石墓が北嶺に築かれていることから、南嶺に寺院が移ったとしても、墓地としてなど別の目的で利用されていたと考えられる。

【古代末から中世の屋島寺－盛衰の中で】

11世紀末から12世紀初頭に北嶺から南嶺に移るとともに、屋島寺は造寺活動を盛んに行なっていったと推測される。それは、本調査（宝物館）において10～11世紀の軒瓦や12世紀の軒丸瓦が出土し、屋島寺東側にあった池埋立地のトレーンチ調査においても11世紀の軒丸瓦がまとまって出土していることや、讃岐國住人蓮阿弥陀仏の勧進によって鑄造された貞応2年（1223）銘の梵鐘（国指定重要文化財）からも知ることができる。

しかしながら、その後に屋島寺は火災にあったようである。それは、先ほどの池埋立地トレーンチ調査の第6層から、火を受けた軒丸瓦や木材そして焼土や炭が出土したことから推測することができる。一緒に出土した土器から、これら火災の廃材等を池に投棄したのは13世紀中頃以降とされており、その後に鎌倉時代末期（14世紀前葉）の本堂が建てられたとされている（山元2003）。本調査においても、本堂西隣接地に広がる布目瓦包含層（第11層）が13世紀頃の焼地層であることが確認されており、13世紀中頃に本堂が火災を受け間もなく再建された可能性は高いと考えられる。

14世紀以降の屋島寺については、明徳2年（1391）の『大和國西大寺諸國末寺帳』に「屋嶋普賢寺」とあり、永享8年（1436）の『大和國西大寺坊々寄宿諸末寺帳』に「讃岐國 屋嶋寺」とあることから、14世紀末から15世紀前半においては、真言律宗の寺となっていたことが分かる。また、14世紀中頃～末と推測される連珠文軒瓦が本堂周辺で4点も出土または表採されていることや、本堂北側にある土塹が15世紀初頭に築造されていること（平成8年度基礎調査）から、14世紀後半～15世紀前半においても造寺活動を盛んに行なっていたと考えられる。

このように、再び屋島寺は勢いを取り戻したようであるが、天文4年（1524）に先の梵鐘が善通寺市金倉寺に一時的に移されていること（奥田1985）や、「屋嶋守龍巖勸進帳」に記述された荒廃ぶりを信頼するなら、16世紀頃には屋島寺は衰退していたと推測される。発掘調査においても15～16世紀の遺物は少なく、古文書と一致する。

【近世の屋島寺－再興と発展－】

江戸時代になると屋島寺は勢いを取り戻す。それは先の龍巖の勧進活動等によるところが大きいと思われる。寛永11年（1634）書写になる『讃岐國中寺社額高書上寫』によると讃岐に封じられた生駒氏から寺領43石3斗余の増加をうけ、年代は不明であるが屋島寺所蔵の『生駒一正寄進状』によると米・人・資材等の提供を受けている。また天保4年（1833）高松藩士香西義賢の書写になる『寺社記』によると松平氏からも千体仏堂の施入、54石3斗余の安堵等を受けている。江戸時代前期の17世紀頃に屋島寺の復興が急速に進んだことを伺うことができる。

今後の調査結果では、調査区南側で確認された集石をはじめとする整地層があり、年代的には集石下部から出土した陶器から17世紀末～18世紀前半とみてよく、この地業が文献史料から読み取れる17世紀頃の復興と関係があるのかもしれない。そして江戸時代後期の『讃岐國名勝圖會』『金毘羅參詣名所圖會』によれば、ほぼ現在の屋島寺に近い配置になっている。圖會には調査該当地区に、南北

長い「茶堂」と呼ばれる建物が描かれているが、残念ながら今回の調査ではそれに伴う柱穴等は検出できなかった。



第46図 「讃岐國名勝圖會」(黒枠の範囲が調査地)

第4節 屋島における寺院造営の起因

屋島に古代の山岳寺院が造営された起因について、少し考えてみたい。從来、平安時代の山岳寺院については、天台・真言宗の平安新仏教が隆盛させたという考えが一般的であった。これに対して、最近は平安以前の飛鳥・奈良時代から山岳寺院が存在することや、「僧尼令」に定める山居の許可手続きの存在から、山岳寺院が平安新仏教に限らないことが指摘されている（上田2000-2020）。さらに、山岳寺院を平地寺院の修業の場としてとらえ、両寺院のネットワークが形成されており、奈良時代になると東大寺をはじめ各國分寺も山岳寺院を抱えネットワークを形成し始めるとされている。山岳寺院との距離は20km近くにもなるという。それでは、屋島寺の場合はどうなのであろうか。

屋島寺は、高松平野北東部にあたり、海に突き出た島状の山の上に立地する。一方、讃岐国分寺は高松平野西部にあたり、高松平野とは小丘陵によって隔離された盆地状の小平野に立地する。この小平野は、西では綾北平野にも繋いでおり、綾北平野には讃岐国府が所在していた。古代の行政区画では、屋島寺は高松平野東半分にあたる山田郡に属し、国分寺は国府と同じ阿野郡に属する。両郡の間には高松平野西半分を占めていた香川郡が所在する。屋島寺と国分寺との直線距離は約16kmを測る。

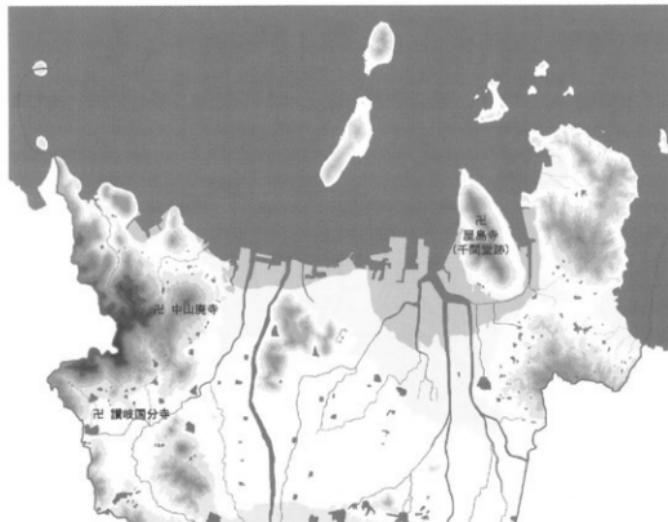
さて、古代において屋島寺と国分寺を直接つなぐ考古資料や文献資料は、現在のところ確認されていない。しかしながら、興味深い資料として、明徳2年（1391）の『大和國西大寺諸國末寺帳』に、国分寺、屋島寺そして鷺峰寺の3ヶ寺のみが讃岐国における西大寺末寺として記されていることがある。永享8年（1436）の『大和國西大寺坊々宿宿諸末寺帳』でも同様である。中世において、各國の国分寺が西大寺を總本山とする真言律宗に組み込まれていったことは知られており、讃岐国分寺も例外ではなかった。その国分寺と連動したのが、讃岐国では屋島寺と、国分寺と近い距離にある鷺峰寺だけという点が重要であり、これら2寺は14～15世紀において国分寺と密接な関係にあったことが

うかがえる。この関係が古代にまで遡るかどうかは、今後の資料の増加が待たれる。

また、屋島寺を考える上で、屋島寺がある山田郡の特異性も注意すべきであろう。山田郡は、天平宝字7年（763）の『山田郡司隸案』によれば、大領に綾公入足、少領に凡直、主政に佐伯、復振主政として秦公大成が記されており、大領から主政までの要職を郡外の有力氏族が占め、郡内で最も名前が頻出する秦公が復振主政になっているに過ぎない。遡って古墳時代においても、高松市茶臼山古墳や久本古墳などのように地域色が薄く、畿内の影響が色濃く表れており、天智天皇6年（667）の屋鳴城築城に繋がるものと考えられる。このように山田郡は、古墳時代から畿内の影響力が強く、奈良時代になても讃岐の他郡の有力氏族に支配が任されている状態であった。このことは、国分寺や国府がある阿野郡を支配し、讃岐国内で最も有力氏族と考えられている鶴公が、大領として山田郡の実権を握っていたと考えることは容易であり、屋島寺の創建にあたっても関与していた可能性が指摘できる。

さらに、屋島北嶺にある礫石建物跡の基壇中から出土した須恵器多口瓶4点の存在も重要である。調査を担当した山元氏によると、類例として多口瓶が各地の有力寺院跡から出土しており、県内では丸亀市法熱寺から出土しているのみであるとされている（山元 2003）。県内の類例は、その後の調査や整理により、まんのう町中守廃寺で灰軸の多口瓶が出土するとともに、讃岐国分寺跡で須恵器のものが出土していることが判明している。それでも、有力寺院跡から出土していることに代わりではなく、綾氏の影響が大きい讃岐国分寺跡や法熱寺から同じ須恵器の多口瓶が出土している点は、注目できる。

以上のように、屋島寺が讃岐国分寺の山岳寺院として創建された可能性を述べてきたが、現段階では根拠は少なく仮説に留まっている。なお、渡部氏により、讃岐国分寺から約4.5km離れた中山廃寺は、出土する軒瓦（10世紀前半）から国分寺に關係する山岳寺院の可能性が指摘されており注目できる（渡部 2006）。10世紀代においては、平地の寺院である高松市押師廃寺やさぬき市長尾寺においても、国分寺と同文（同范？）の瓦が出土しており、将来的には平安時代における讃岐国分寺を核とした寺院のネットワークの存在も想定できるかもしれない。今後の資料の増加によって、屋島寺創建の歴史的事実が明らかになることを期待するものである。



第47図 屋島寺・讃岐国分寺・中山廃寺の位置図

第5章 屋島寺周辺の調査

第1節 調査の一覧

屋島寺周辺においては、高松市教委や香川県教委によって、時々調査が実施されている。それは、屋島全体が史跡名勝天然記念物に指定されているだけではなく、屋嶋城跡や屋島寺といった重要な遺跡が屋島寺周辺に所在するからである。これらの調査は、今回報告した面的な発掘調査を除いて、すべて試掘調査や工事立会といった小規模なものである。そのため、調査内容が十分に周知できていない場合がある。本章では、市教委が実施した調査のうち、未報告のものを報告する。屋島寺周辺で市教委が実施した調査は、第48図のとおりである（屋嶋城跡の確認を目的とした調査は除く）。このうち、⑤～⑧は史跡天然記念物屋島基礎調査事業で実施したものであり、すでに報告済みである（山元2003）。また④は今回の報告であり、残り①～③と⑨について報告する。



第48図 屋島寺周辺における高松市教委の調査地位置図（縮尺 1/3,000）

- ① 昭和42年度調査（水族館） ② 平成2年度調査（倉庫） ③ 平成2年度調査（鎮守社）
④ 平成2年度調査（宝物館） ⑤ 平成7年度調査（屋島基礎） ⑥ 平成8年度調査（屋島基礎）
⑦ 平成9年度調査（屋島基礎） ⑧ 平成13年度調査（屋島基礎） ⑨ 平成10年度調査（廊裏）

第2節 屋島水族館建設工事に伴う試掘調査

昭和42年度、屋島水族館建設に伴う試掘調査が実施された。当時は、本市に文化財専門員が不在であったことから、高松市文化財保護委員会であった大西正男氏・小竹一郎氏・細川裕太郎氏が主体となり、香川大学および香川高校（現高松南高校）学生の協力を得て調査が行われた。調査期間は昭和43年1月20日から3月31日まで、その間の土日を利用した延べ12日が費やされた。調査は、屋島城跡の遺構確認を主眼とし、水族館予定地の試掘調査と、屋島寺周辺に残る土垣と浦生の石垣に対する分布調査であった。試掘調査では計14本（図面上、本文では15本、第49図）のトレンチを掘削したが、遺構は確認されず、石礫と布目瓦片などが出土したに過ぎない。しかしながら、弥生時代と古代の可能性がある遺物が出土したことは、当時としては屋島山上の遺跡を考える上で重要であった。分布調査においては、土垣と石垣の平面図が作成された。

その後、調査終了すぐの5月に報告原稿がまとめられたが公表されることなく、昭和56年の『屋島城跡』で簡単に触れられたに過ぎない（巻末1981）。そこで、この報告原稿を今回掲載することにより、調査内容を公表したい。なお、出土遺物の年代比定や「土垣の状況」「結論」において明らかな誤りが認められるが、ここでは修正せず原文のまま掲載している。また、手書きの原稿が2部あり、1部は下書きで、もう1部は清書したものと推測される。ただし、清書したものは、なぜか結論が題名だけで内容が記されていないことから、今回の報告にあたり文章の大部分は清書したものを使用したが、結論は下書きのものを使用した。

屋島山上発掘調査報告

（1）発掘調査の動機および目的

高松市屋島西町、浦生の槽内に残存する屋島古城跡は、大宝天皇6年（西暦676年）倭臣高安城、対馬国田城ととともに、外敵に備えて築城された大規模な別城式山城の史跡として昭和9年11月10日国の指定をうけている。

朝鮮式山城はその構造が山頂のみに止まるにしても（第1式という）、または谷を包摵して石垣・石垣が設けられたにしても（第2式という）、城塞としての機能を発揮するためには、必ずや山頂を中心として築城されたであろうことは、高所からは戦い易く、低所からは戦い難いという古代から近代に至る逐次戦の鉄則からして、想像に難くない。

屋島城も浦生の谷間にある槽内に残在する以上は、北側または南側、または双方ともに含まれて、その機能を発揮した朝鮮第2式山城であったと考えられてきた。

しかし、山上南側には早くから鐵鏡の岡山という所伝をもつる屋島寺が開かれしており、その周辺や北側は古城跡を思わせる数々の伝説に彩られながらも、一つには源平古戦場でもあった関係からか、城跡を実証する遺物・遺構が乏しいせいいか山城としての輪郭がうすり、実は屋島山上を山城外におこうといった説まで飛び出す始末であった。

一方観光グームにより山上の観光開発はすすみ既に北嶺の千葉堂といふ伝説地も、南嶺の屋島寺東方も、それぞれ遊園地、休憩所、駐車場の間に開発利用されて、いまや潤養不能の状態になった。

加えて昭和41年5月南嶺山上は自然公園法による再開発計画の対象となり、沿岸区、調地区、裏地区などに区分し、これらを結ぶ道路の新設が計画され、厚生省告示第262号として告示された。

かくて南嶺山上も、その調査を待つことなくついに破壊されつくすのではないかという危惧を生むに至った。

高松市教育委員会は、これをおそれて、すみやかなる調査の必要を感じ、南嶺屋島寺東方の田畠を中心とする地域における「未開発文化財の基礎的調査、および屋島城跡の埋蔵文化財の発掘調査」実施を決定、昭和42年10月6

日、文化財保護法に基づき、史跡・天然記念物の現状変更の許可申請を行ない、同年12月22日、その許可を得ると同時に高松市文化財保護委員会に調査実施を委嘱した。

（2）調査地の位置および附近概況

屋島は高松市の東部に位置する標高2921メートルの南嶺と、2818メートルの北嶺が連なった南北5キロ、東西2キロメートルのいわゆるメサ型の代表的な山である。

花崗岩の基盤上は、頭岐式安山岩といわれている古銅峰花崗岩の層が重なっている旗幡台地で山頂は平坦。頂上周囲の人類部分が断続縦壁となり、傾斜に南北両嶺の連なる中央西隅浦生に立る谷間が比較的ゆるい傾斜面をなしていて、今もここに屋島城の城壁であったと思われる石垣、石垣の一部が残っている。この浦生の谷間にのれば「弘法谷」となり、ついで南嶺、屋島寺東方（現駐車場）に至る。なお水を追ってさかのばれば、ルリ宝池（血の池）からさらに南の小ため池に至る。

寺伝によればルリ宝池は、屋島寺守山の際に本堂の辰巳（東南方）にルリ宝を埋めて築かれたとあり、南部の小ため池と一水系をなしているが、湧水は何れにもない。

調査予定地は南嶺屋島寺の西方約150メートルの位置にある水田、畠および荒地で、この最南端に大池があり、その西約30メートル離れて舟戸が掘られている。

予定地の大部分は約50センチを掘れば湧水を得ることが可能であり、これら寺西の水は現在も少量ながら小溝を流れ、水道を通じて磁器ヶ谷にたり、急坂を下って浦生の島をうるおしている。この外水については、北嶺長崎道にそって「北丘泉」、東大門の側（丸五郎ホテル附近）に「出水」。旧利剣寺（現在仁王門西）の下に「大泉」。その他にも水不足に備えた井戸が數ヶ所あるが、何れも寺西の水系や、ルリ宝池の水系とは関係がない。

発掘調査予定地の西方、獅子の臺の存する断崖を下に約50メートルドれば、「物見台」の遺構とも思われる一辺15メートルの集行が認められ、ここからは西方海上一帯が望見せられた。北嶺にも西方に面してこの種のもの、東西にも構築のあとは明らかではないが二つあったと伝えられている。

いずれも「魚見台」といい伝えられているが、実際に魚群の発見にも役立つが、古代の城跡ともみられる。

南嶺と北嶺の中間や北嶺より、「城が丘」と伝えられる表面平かな岩台があり、ここからは島の東西両面が一度に展望される。周囲の岩相からみて自然に形成されたとも思えず、誕生の石壁、石垣所在地を「城の内」と伝えるのに呼応して屏風城の櫓の道標と伝えられている。

また北嶺千間堂の池を構築した折に、この地ド2メートル下から炭が出土たという。(馬場安一氏談)

ここは古く寺院があったとも「のろし台」であったとも伝わっており、一帯に密生する松樹もこのあたりには殆どないし、その北約150メートルの地点、松樹のなかに現に徑25メートル位の円形の渦地があり、これまた「のろし台」との伝説をもっている。

南嶺屏風城東に東大門跡がある。寺院の遺構であったか、屏風城に属するものの遺構かは不明である。

東大門跡から東方山中の安達神社に通ずる急な道も、いまは山腹の崩壊防止施設のためとだえてしまつた。

又屏風城正面仁王門の外東西両面に自然石とみられる岩石を使用した野面積(乱積)の石壁があり、中批以降修復の跡が認められるが奈良朝時代以前のものであろうか。又仁王門外の寺院の基礎ようの段階は平安初期以前の様式であるが、その造営年代はわからぬ。

次に調査予定地を含む屏風城守闥における土壇の存在であるが、表面調査によれば、寺の北側約50メートルに高さ約50~70センチの土壇が東西に連なり、その基底には石を敷いた形跡も認められる。一面の樹根に妨げられて土壇の識別の困難なところもあるが、この土壇は西にのび籠置ヶ谷で一度切れ、再び籠置の各茶店の裏の松木水道にそい約30~50センチの高さで南にのびて寺の正面から巣巣に通ずる道路に達する。一見これで切れたようであるが、この道路の南にそって東に走り、山利剣寺院内に達していく。丁度内門に至ったごとくである。(第1土壇と称す)。

なお寺の北側において第1土壇から南に約15メートル離れた竹林の中に第2土壇にはほぼ平行して高さ約2メートルの土壇が東西に走っている。

これは、西端から東に向走し、寺に近づいて切れていって、かねねし形をなしている。

この土壇は、外側は低く、内側はやや高く殆んど寺の境内に滋生する竹林の中にある。(第2土壇と称する)。

屏風山上における地層は、地域によって異なるであろうが、ドライブウェーのために、現われた断層によれば、下部には花崗岩があり、その上層に緑色礫岩有粘土、紅色礫岩有粘土(表面黒色礫を含む)凝灰岩、安山岩の順序に層をなしており、安山岩は板状構造又は柱状構造を伴ない、その液面は玄武(亀の甲の形)に似たものもある。

(3) 発掘調査の経過

1 準備調査

高松市文化財保護委員会では屏風山上発掘調査の委嘱をうけ、ただちにこれに応すべく12月26日H委員会を開き小竹、細溪、大西三氏を中心とする屏風城跡埋蔵文化財発掘調査班を編成、調査を計画実施することとした。

調査班ではまず事前調査として余良駒、長崎県、福岡県に対し、その管下の高安城跡、対島の金田城跡、大野城跡等に関する調査の結果ならびにその研究調査者氏名の照会をするとともに既発表文獻の調査研究を怠いだ。

注 参考文献

斎藤忠吾 古代城跡跡および住居跡

岡田唯古善 屋島山の成因

それぞれ資料を得、研究調査者との連絡もついたので1月5日香川県文化財保護委員・松浦正一、大車憲一両氏の

出席を依頼し、山上桃太郎旅館において発掘調査の実施計画を開催、松浦氏所有の地図などを参考に種々協議を行った結果

(1) 屏風城跡面に焦点をしほって山上、山下を調査する。

(2) 許可地内の南北に2本東西に3本のトレンチをまず掘る。

(3) その起点は最低西北端にとる。

(4) 1月20日から発掘調査を開始する。

以上のことを決定し、作業員については、香川大学学生および香川高校郷土研究会の協力を得ることとした。

幸運な事は現在の香川県立高松南高校のこと

2 調査の経過

1月20日(日曜日) 番

指導者

小竹、細溪、大西、多田明善高校講師(歴史学)、
多田杏川高校教諭(地理学)

作業従事者

香川高校郷土研究会員 11名

午後1時作業開始、最低西北端の起点から南へ第1トレンチにかかる。約30センチ掘りすんで湧き水があり、かつ岩行々掘進が困難であったが、午後5時第1トレンチの掘さく終了出土品なし。

1月21日(日曜日) 番

指導者

小竹、細溪、大西、多田(監)

作業従事者

香川高校郷土研究会員 11名

第2トレンチにかかる。北から掘進約50センチで集石塊にあり。集石はトレンチを横切り東西にのびている如くであり、南北約28メートルにおよぶ。

石はコブシ2倍大であり、山岳肥沃土中から出た施石を集めたものであろうかと思ふ。流水のけ口を作るために約20センチ山石をとり除いた。この集石の北辺に接して緑色の粘土層に紅色粘土層が重なっていることが判明したが、集石の東西の長さとともに次後の調査を待つことにし、そのまま残して更に第2トレンチを掘り出す。

集石の南に布目の瓦片一出土。

1月22日(日曜日) 番

指導者

小竹、細溪、大西、多田(監)

作業従事者

香川大学学生 9名

第2トレンチの残部分の掘さく終了、ウワツの充分にかかった磁器破片少々出土、つづいて第3トレンチに進む。うち無柄石器一本弥生式時代か(縄文式時代に近い)と思われるもの出土。

2月3日(土曜日) 番

指導者

小竹、細溪、大西、多田(監)、多田(地)

作業従事者

香川高校郷土研究会員 11名

第3トレンチより第4、第5トレンチに進む。このトレンチは土壇の下約25~30センチは赤色藻、ついで緑色藻を含む粘土層に達する。

その下は湧水あり、掘進困難、出土品みるべきものなし。

2月4日(日曜日) 番

指導者

小竹、細溪、大西、多田(監)

作業従事者

香川高校郷土研究会員 13名

総員を3班に編成し、第1班は7・8・9トレンチ、第2班は10・11・12トレンチに、第3班は第13トレンチにかかる。

第7~12トレンチは地山と考えられる紅色繊維包含粘土を出すまでを日途として掘進し、第13トレンチは第2トレンチに現われた紅色繊維包含粘土層と、綠色繊維包含粘土層の重なりの南端の集石にそって西に進むことにする。

先ずこの両粘土層の南端の所在を確認するために、第2トレンチからこの第13トレンチの西端に至る間に、巾約50センチ、深さ約50センチの小トレンチを南北に4本掘り、これにより両粘土層の南端の概要を窺かめ、第2トレンチからこの両粘土層の南端にそって約30センチの深さに第13トレンチを掘りすすめた。集石は西へ約2メートル（全長約6メートル）でなくって、あとは粘土層のみとなった。このところ湧水は全然なく水田よりも低地にあり、乍ら水もちが悪く（所有者談）水田として利用されなかつたのも、紅・綠色繊維包含層の存在によるものであらうか。出土品なし。

2月10日（土曜日）晴

指導者

小竹、福澤、大西、多田（堅）、多田（地）

作業従事者

香川高校郷土研究会員 13名

前回同様3班で作業実行。

2月11日（日曜日）晴

指導者

小竹、福澤、大西、多田（堅）、多田（地）

作業従事者

香川高校郷土研究会員 13名

作業は前日に續く、10~11トレンチの表土浅く、出土品とまぎらわしい石片にうわ来たのかかった新しい磁器片のみ。午後は全員でこの調査地の中央を南北に流れ溝をさられた。

溝の東西の土壇の倒壊を防ぐための木杭数本あり、須恵器よりは稍新しかと思われる土器片出土。

2月12日（日曜日）晴

指導者

福澤、大西、多田（地）

作業従事者

香川高校郷土研究会員 10名

この日現地のボーリングによる調査を行なう。あらかじめ香川大学高桑乳博士の指導をうけ、実測、記録、機器の各班に分れ手廻しのボーリング機械により高さの異なる場所打ヶ所について調査。

2月24日（土曜日）晴

指導者

小竹、大西、多田（地）

作業従事者

香川高校郷土研究会員 9名

2班に分れ第1班は12~15トレンチ、第2班は、発掘現場をはなれて、寺院裏の第1土壇の清掃、実測調査を行なう。1土壇は寺裏で巾1メートル、高さ約50~70センチ、発掘地西方で巾70~80センチ、高さ30~50センチ（何れも路面より）南方の一辺は西半分は巾2メートル、高さ30~50センチであるが、東の部分は全然不明。ただわずかに土壇上に植生ある桜の木が東方には大木となって並んでいることから、土壇が存在しないであろうことが推測されるに止る。

第2土壇は外側から削って高さ約2メートル、内側は約70~80センチ。寄生する竹林中にあり、また雜木多く、破壊した所があり、実測を妨げるものが多かつた。この土壇の表面には各種瓦が散布していた。

3月17日（日曜日）晴

指導者

小竹、福澤、大西、多田（地）

作業従事者

香川高校郷土研究会員 8名

第1土壇、第2土壇の実測ならびに10、11トレンチにかかる出土品なし。

3月24日（日曜日）晴

調査会員一同浦生橋内に存する石碑、石塚の調査を行なう（第51回）。

3月31日（日曜日）晴

調査会員全員でトレンチの復元を行なう。

(4) 出土品

発掘にとりかかるまでは相当な出土品があるのでないかという期待をもっていたが、結果出土品からはその豫から見ても質から見ても墨島城跡を証するものは発見されず、期待を裏切られるものであった。

数少ない出土品中、第3トレンチ地表下約30センチの赤色を帯びた粘土中から一個の石鏡を見出した。（写真1）尖端は上下とも欠損しておるが、長さ推定24センチ、サスカイトを磨いてあり、製作は巧妙で弥生時代に属すると見られる追い型石鏡である。同類型の石鏡は屏風東方の五剣山、源氏ヶ峯附近ですでに発見されているが、屋島では最初であらうか。

こうした石鏡がこの廃寺地から発見されたことについては色々なことが考えられる。まずその出土地点は、小規模の谷を形成するその谷の中央最底部であり、この地東面には墨島寺の境内とそれにつづく森があり、南には西園寺という広場のあるところから、この双方からの流水によつて流れ出たものか、または簡便に当て人工的に堰堤とともに搬入せられたことも考えられる。と共に、これによって屋島山上に弥生式遺跡の存在する可能性があるかも知れないし、（弥生式遺跡が300メートルの高地にもあり得る例としては、三豊郡詫間町榮葉山山遺跡がある。）また単に野獣人が足跡を止めたということを物語るものかも知れないが、いずれにしても今後の調査による外はないと。

次に土器であるが前記石鏡出土にもかかわらず、弥生式土器と断定し得るものは発見出来なかつた。ただ第3・第4トレンチ発掘中に土器の器脚と見られるものの2ヶを発見したが（写真1）、いずれも焼成の痕から、土器類よりもなお新しいものと思われるものであった。

このほか須恵器と思われるものの破片（I線部）1ヶを中心窓の中から得たが他のもの混合して出土しており、かつ小形であった。

次に瓦片であるが、第2トレンチ集石の南から布日瓦を得た（写真2・3）。同様の布日をもつものは、表面調査により、桃太郎ホテル西の第1土壇附近からも、寺裏の第2土壇附近からも採集出来た。何れも半瓦の破片で表面共に裏面の布日の状態から見て讃岐国分寺跡出土のものとはほぼ同様であり、まず奈良時代のものと考えられる。

(5) 調査地ボーリングの状況

この地は寺境内と蓋巣の斷崖高部とに狹まれた谷間をなし、南部は高く、北部は低く、3段の急傾斜段をもつが、谷全体がゆるやかに北に傾く。ボーリングの結果、紅色繊維は常に綠色繊維よりもさきに現われ、紅色繊維包含層の下は綠色繊維包含層をもつ。しかしこれらはともに粗雑で軋らかく、容易に流木水の出入を許すようである。

ボーリング④の東南方は池であり、西方に井戸がある。

明治8年の屋島寺境内図によれば、上記井戸の位置に「池シキハ八畝歩」とあるが、この井戸と東方の池との中间

の島は大量の高脚植物を含む上であることから、古くはこの井戸を含めて一つの浅い大池であったことも考えられる。ボーリング④-135メートルにある薄黄の粘土層はかつて池であった時の底部に形成されたものであろうか。又各ボーリングにより発見された密な粘土層は相当堅牢であり、ボーリング①③などでは機器が通らず岩盤と誤解した程であったがこれも池の底部であったと判断せられる。そうであるとすれば北部第13トレチの島は、その地層から判断して池の上堤をなしていたものではなかろうか。

第2トレチから第13トレチの島地にまたがって東西約6メートルにおよぶ失石は水の水門として堤防の礎塊をまぬがれるために築かれたものであろうか。しかしこの草石が河え池の水門として築かれたものであったとしても、星島城の遺構であるとは断定出来ない。

(6) 土垣の状況

第1土垣は第50回の通り、寺の裏のもの、調査地西部のもの、同南部一部のものに分れており、これらは当初互にゆるい曲り角をもって連なり、寺を包んだことは一見して明瞭である。なお守の東部境内に笠山神祠・祠門から北は南北に長く、土垣が一本存在したかも知れないことはその南部の草むら中の土壘から想像される。

この土垣の表面検査の結果は、時代を決定する種類的な資料は観られない。露出する土石のうち平板なる石片が統て平らかに土中に包まれていることで、その構造が版築による土垣であることを知ることが出来る。

寺裏(北面) 土垣中に「元・米の切れ目があつて現に交通に利用されているが」¹⁾坂築当初作られた門か否かは不明である。後世崩壊利用地されたものかもしれない。

この土垣西北角(森内寺の北側)は方形の一角でなく、大きいくまみをもっていたことが火薬により明らかとなつた。これは飛鳥時代より奈良朝時代から平安朝時代の守院や城跡が全部直角であるのに比して著しく異なる点である。

次に西部の土垣の主軸は北10°～南190°の方位を指す。(以下第50回参照) 推定される寺の東部境内の土垣もほぼ同様であろう。南部の残存土垣の一部が西280°～東100°であることは守の本宮、四天王門、客殿、大方門、同門、仁王門、参道寺がそれぞれ西280°～東100°、南190°、北10°であるとの説とし、何れも正北(太陽南中の対側側)を基準とするものである。

礎石の北(中北)とは現在(1968年)で約10°の偏角をなしている。

寺の北の土垣の主軸は西300°～306°東120°～126°で著しく他の辺や寺の建造物と不調和である。

磁北(磁石の北)によったとしてもこうはない。日本地方の磁北は4世紀以来では、A.D.650年は偏角は最高で西に約17°、920年ころは西に約16°、1250年ころおよび1680年ころは何れも東に6°であって、土垣北辺の東に30°という偏角のあった時代は考へられない。(NIKK、竹内均、上山誠也、地球の科学P118、46表 角川、叢文館、中国古代の科学P172～173)

土垣北辺は道にそっている。これは土垣西北角の浦生道(鶴峯ヶ谷をそう)を通じて浦生に至る道や、駐車場の東部墓地の中を通ずる西300°～東120°の土垣(と墓石の列並びにその中を通る旧道)と一連の道をなしている。寺裏の土垣に沿う旧道から西の海上に至る浦生への道、東の海上に通ずる東大門から直ちに山下の安徳神社附近の海上に通ずる。これらは一連の連絡路であったことを物語るものであろうか。

そうなると土垣も、これらの連絡路も、寺とは直接の関係はなく、星島という、この島に築かれた水域に関係した

連絡路であり、また土垣でなくてはならない。寺の創建以後は専ら寺の門前の東西道が利用されることとなり、明治8年以降になって星島中の旧道に対して、新しく甚五郎ホテルの北に通する道も成立したのである。

土垣には絶対年代を明示する根拠はないが、北辺土垣の東端(敷の中)は土壇によって崩れ去っている。そしてそこに卓抜する古瓦は、平安が鎌倉時代のものと思われるようなものと想定される。寺宝物館保存の天文2年丸瓦より古いものであるから、この建築により土垣北辺東部は崩れ去ったか、笠山神祠の参道が湾曲していることは、東北角に土垣がかつて存在した、その湾曲部であったことを物語るものと思われる。

藪の中に著しく散布する古瓦が第一土垣中には一片もないことは、消滅的にであるが土垣が寺院建立以前即ち古代城跡の城郭であることを物語る以外の何ものでもなかろう。

(7) 結論

星島城遺跡である石壁、石垣が浦生の「構内」という谷間にすることはこの古代城は朝鮮式第2式であったことを物語り、山上を含めての大城跡であったことは建築史学上問題のない事実である。

今回の調査地の発掘調査によって、僅かに出土した弥生式石鏡・土器、土師器の器脚2本(古墳時代～奈良時代)、古墳時代の須恵器片などが出土していて、星島寺開基以前に既に人の足跡印がせられたことが明らかである。しかしこの少ない出土品は自然に從入し、または間時に人工的に搬入された土壇とともに外部から入りこむ可能性がある。しかし雨水または天水を保存利用の可能性のあることならびに自然の紅色鐵、綠色鐵有粘土層に合わせて設けられたと認められる土堤・糞石に從って水とり口遺構はここが古代城跡であることを物語ると思われる。

表面調査に於いて、第二土垣ならびに第一土垣(桃太郎放削前側の部)にて採集されたと同様式の奈良時代の瓦片が集石のやや上流からも出土したことは何を物語るのか。瓦は上代早く寺院にのみ使用せられたと考えられるから、この堆の水は寺院によって使われるために、中院によって集石などが始めて作られたのではないかとの憶測となりたが、城郭城になったあと、または城跡にならないうちここに早く寺院が開かれたと解しなければならない。古瓦は、しかし石鏡同様、第2トレチに出土したことは、外縁からの流入または搬入の可能性もある。靈巖下50メートルの物見台は明らかに城塞等防衛用であつて、寺院には何の関係もなく、また云説もないことに城塞でありながら、その城塞以前にその城中に四天王が祀られた実例もある。例えば福岡県大野城は大野府の防衛城として重要な機能を果したが、この城は大智天皇4年(668 A.D.)に築城されたが、城の以前宝龜5年(774年)早くも城内に四天王が祀られていて、國家鎮護の役割を果してゐる。このことは奈良時代の国分寺が「金光明四天王寺」とも称され、仏寺創建が四世界鎮護の四天王を祀ることによって國家鎮護の目的を果たす為であり、防衛を第一としたことでも明らかなように、寺の建立が城塞整備と同一目的でもあつたのである。また宮城県多賀町多賀城に附設して多賀寺(陸奥國分寺)が奈良時代初期に創設されたのも同様であったと思われる。

この辺に星島城跡の中心部に星島寺が開かれたこともあり得たと思われ。早く城城となつたために、いわゆる本城の位置に寺院が開かれたのであらうと推定せられる。仁王門の西側の乱積の石頭も、城跡を示すものかもしれない。寺開山の時が何時かは、数少ない出土品から正確にきめることは出来ないが(1)まず奈良時代と見られる星島

第一式の瓦が出土し、また散布していること、(2) 山獄仏教は平安時代初期に流行したことのほか、鑑真(没年 763 年淳仁天皇時代、年 77 才) (784 年長岡遷都) の弟子惠雲によって開かれたとする寺伝を考え合せて、奈良時代末平成いわは平安時代初期と見られる。しかし弘法大師時代にひき下す必要はない、律宗の寺がのち大師により真言宗に改められ四国八十八ヶ所に編入されたと解すればよい。寺の三方を取囲む第一土垣、これは西面・南面は寺と方位を同じくするが、北面は○○寺とは関係なく土垣にそって走る道とともに東人門内の土と道と一連をなし、西は浦生、東は櫛浦に通じていて、寺とは関係なく、またその土垣中に後代の出土品を含まないことを考え合せて、また西北方・南西方の両角の丸みと合せて古代城に附設の土

垣と考えられる。城の中心は何処か。南嶺の大部分が壇域である今日、発掘調査は許されず、表面調査のみでは決定的な結論は出ないが、強いていえば寺院の本堂は東殿、客殿は本殿、大坊は西殿の位置に当り、本堂裏第二土垣に囲まれた土壇あたりは、室町以後に寺院関係の建築遺構であろうか。この詳細は将来的調査を待って明らかになることであろう。(43.5.31)

高松市文化財保護委員 (五十音順)
埋蔵文化財係 大西 正男
小竹 一郎
細浜福太郎

* ○は、判読不能の文字を表す。

以上が昭和 43 年に作成された報告文である。他に残された資料は、付図としての図面、写真、実測図・拓本の一部しかなく、調査の詳細はこれ以上知ることはできないが、この調査に対して検討を加えた。

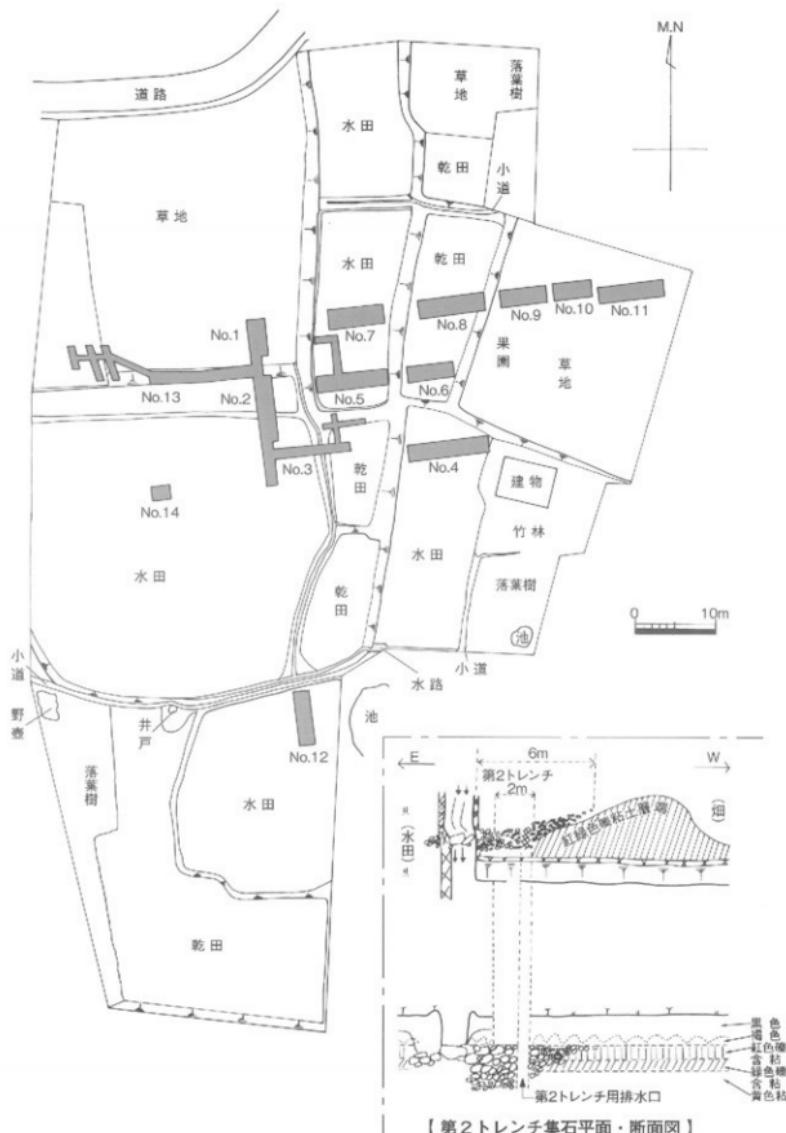
まず出土遺物であるが、実物は所在不明なので、写真・実測図・図面から推測したい。石鐵は、先端と基部の一部を欠くが、円基無茎式のもので弥生時代のものである。屋島南嶺では弥生中期の土器が一定量出土することから、この石鐵も同じ時期のものと考えられる。土器の器脚としたものは、土師質土器釜の脚部と考えられ、中世のものと考えられる。写真に写っている他の土器片も中世のものと推測される。布目をもつ瓦片は古代～中世のものと推測でき、南嶺の調査では平安時代以降の布目瓦が確認されていることから、これら布目瓦片も平安時代以降から中世までのものと考えられる。

次いで調査の検討である。トレンチ調査では、第 2 トレンチの集石以外は明確な遺構は確認されておらず、掘削できた深度も 30 ～ 50cm と浅かったようである。集石についても伴う出土遺物はなく時期・性格とも不明である。トレンチ調査だけでなく、ボーリング調査も実施されているが、地下 2 ～ 4m で岩盤に当たり、岩盤までの堆積層を確認したのみに終わっている。しかしながら、現在の古代山城研究と屋嶋城跡の調査成果からすると、調査地北側の道路より北に「北水門」と呼ばれる石積みが確認されており、調査地南側にあった池が屋嶋城跡の貯水池の可能性が考えられている(山川 2003)。なお、ボーリング調査において、この池が昭和 42 年度の調査時より以前は西へ広がっていたと推測している点は注目できる。後述する屋島寺庫裏改築工事においても、池が江戸時代以前は東へ広がっていたことが確認されている。池が広がっていることから、第 13 トレンチの畠を堤と見立て、第 2 ・ 13 トレンチで確認された集石が水門の可能性も報告文で指摘されているが、報告文で慎重を期しているところ、集石が屋嶋城跡に関わる遺構かどうかは判断できない。

土垣のうち南嶺を広くめぐる第 1 土垣については、時期は不明ながら、報告文では屋嶋城跡に関わるものと推測されている。しかしながら、古代山城の類例では平坦地から傾斜地へ変わる地点に沿って土壘が巡り、そのため土壘の形は地形に沿って不定形なのに対し、第 1 土垣は平坦地においてほぼ四角形に巡っているだけである。また、屋嶋城跡では、傾斜変換点において土段状の土壘や石壘が現在では確認されていることから、第 1 土垣は古代山城に伴うものではないと考えられる。しかしながら、充分な調査が現在もされていないことから、土垣の年代や築造目的は不明である。

一方、屋島寺北側にある第 2 土垣については、平成 8 年度の屋島基礎調査事業において、室町時代の屋島寺の寺域を画するものであることが明らかになっており、これについて報告文の推測と合致している。

最後に、浦生で調査された石壘についてである。「屋島城址碑」がある谷奥部の石壘については、古代山城に特有な谷を塞ぐ形で構築されており、現在も屋嶋城跡に伴うものであると考えられている。しかし、その下にある総長 167.6 m の石壘は、単に土地の区画に沿って構築されているだけであり、屋嶋城跡との関係はないと考えられる。しかしながら、調査がされていないことから、石壘の年代や築造目的は現在でも不明である。



【第2トレンチ集石平面・断面図】

第49図 屋島水族館建設工事に伴う試掘調査平面図（縮尺1/600）



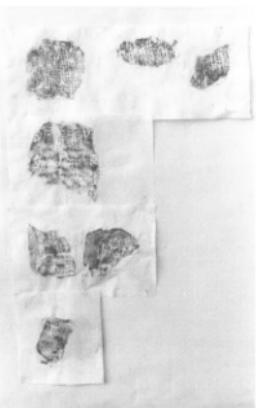
↑写真1

土師器片 (赤褐色)	石鐵 (欠損) 弥生式
土師器片 須恵器片 (黄褐色) (微黄ネズミ色)	
土師器片 口縁部・赤褐色	土師質 土器柱脚 同左 (1) (2) (赤褐色)



←写真2

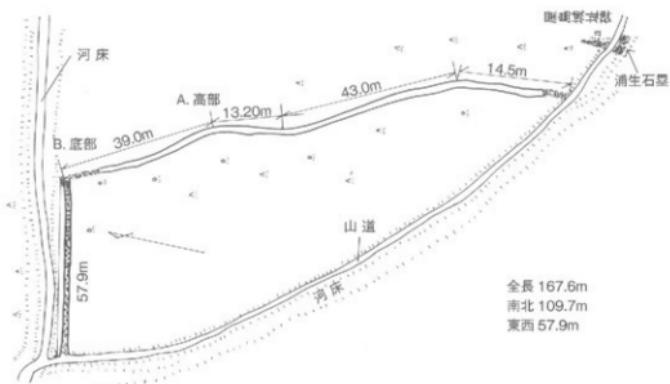
写真3→



I A屋島寺西 第二トレンチ出土瓦片 厚さ 24.2mm (平瓦)	B第一土垣 (桃太郎ホテル西) 採集瓦片 (平瓦) 厚さ 19.0mm	A裏面	B裏面	B裏面
II 屋島寺裏第二土垣出土 丸瓦 (厚さ 17.7mm)		同左裏面		
III A第3トレンチ出土丸瓦片 (厚さ 18.0mm)	B寺境内 (寺裏) 採集丸瓦片 厚さ a.33mm	同左A裏面	同左B裏面	
IV A寺裏第二土垣出土 平瓦片	B同左出土軒先瓦 (布目なし) (単弁十二葉)	同左A裏 (擦過様文)		



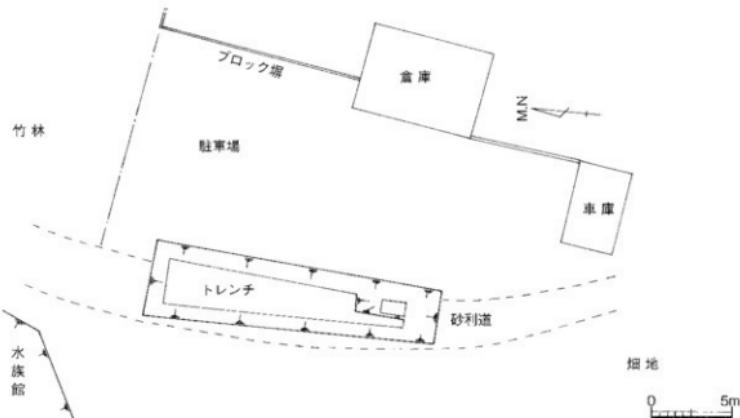
第50図 屋島南嶺における土壌位置図



第51図 浦生橋内に所在する石壙・石垣位置図（縮尺 1/300）

第3節 屋島寺西側倉庫建築工事に伴う試掘調査

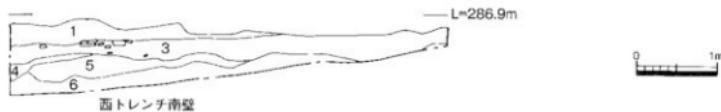
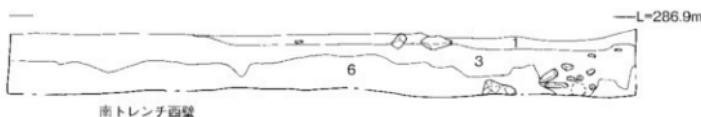
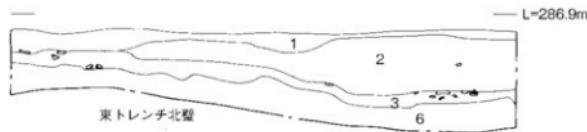
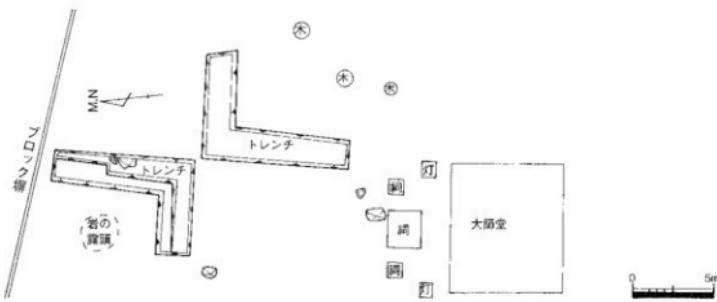
屋島寺西側にある駐車場・畠地において、倉庫建築が計画されたことを受けて、本市教委と事業者である屋島寺は、事前に試掘調査を実施することで合意した。調査は、鎮守社移築工事に伴う試掘調査と併行して、平成2年3月27～30日に重機によるトレーナー掘削で本市教委が行った。トレーナーの長さは約18m、幅は3.2～4.6mで、建築予定の倉庫に合わせた南北に長い四角形となった(第52図)。試掘当初から池がかつてあった場所と想定していたが、調査結果はその予想を裏付けるものであった。地表から約2.6～2.8mまでは池を埋めた際の埋土であり、その下に約20cmのヘドロ層が滲り、ヘドロ層を除去すると白色の岩盤(凝灰岩)が露出した。出土遺物は確認されなかった。先の昭和43年調査の第49図を見ても、当該地は池にあたり、昭和40年代以降に埋め立てられた池と判断できる。そのため、工事に先立つ埋蔵文化財の保護措置は必要ないと判断した。



第52図 屋島寺西側倉庫建築工事に伴う試掘調査平面図 (縮尺1/300)

第4節 鎮守社移築工事に伴う試掘調査

屋島寺本堂東側にある鎮守社(熊野権現社)を本堂の北東方向に、つまり現在地から北へ移築する計画がなされたことを受けて、本市教委と事業者である屋島寺は、事前に試掘調査を実施することで合意した。調査は、屋島寺西側倉庫建築工事に伴う試掘調査と併行して、平成2年3月27～30日に重機によるトレーナー掘削で本市教委が行った。幅2mのトレーナーを移築予定地に十文字の形で設定し、南北の長さ約18m、東西の長さ約13mとなった(第53図)。最も深い東端において深さ約20cm、最も深い東端において深さ約1mで、地山である赤色粘質土層(第6層)に達した。このため、現在は平地地だが、旧地形は西から東へ緩やかに傾斜していたことが明らかとなった。堆積土層は第1～5層に分層でき、第2層から江戸時代以降と考えられるいぶし瓦片が出土したのみで、遺構は確認されなかった。そのため、工事に先立つ埋蔵文化財の保護措置は必要ないと判断した。しかしながら、周辺には古代から中世の布目瓦片が散布しており、付近に古代から中世の屋島寺に関係する遺構が残されている可能性がある。

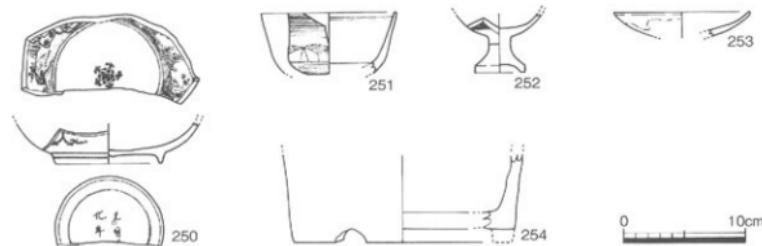


1. 灰黄色土 (2.5Y 6/2, 瓦片・落ち葉を含む表土)
2. にぶい赤褐色土 (2.5YR 5/4, 瓦片を多く含む)
3. にぶい赤褐色土 (7.5YR 4/3, 赤色粘質土をブロック状にわずかに含む)
4. にぶい赤褐色土 (7.5YR 4/3, 赤色粘質土をブロック状に含む)
5. にぶい赤褐色土 (7.5YR 4/3, 赤色粘質土をブロック状に多く含む)
6. 赤色粘質土 (7.5YR 4/8, 赤灰色の小様を所々含む)

第53図 鎮守社移築工事に伴う試掘調査平面図（縮尺1/300）トレンチ土層図（縮尺1/60）

第5節 屋島寺庫裏改築工事に伴う試掘調査

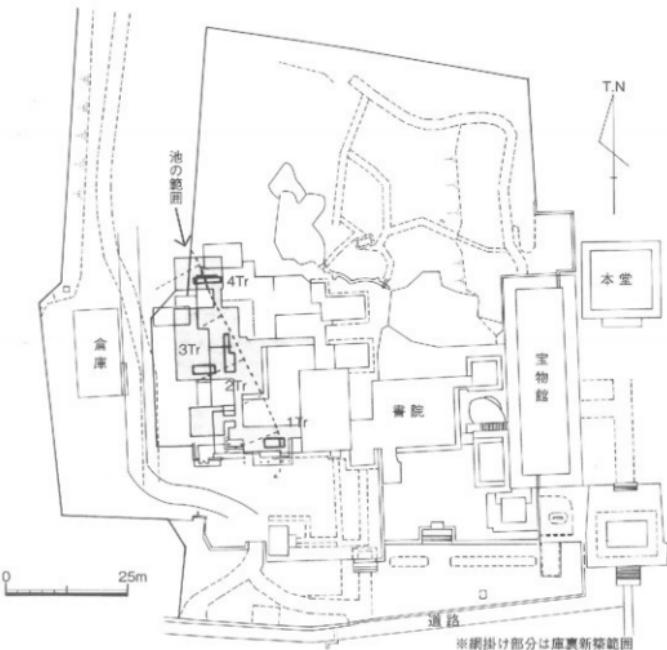
屋島寺の庫裏を改築する計画がなされたことを受けて、本市教委と事業者である屋島寺は、事前に試掘調査を実施することで合意した。調査は、平成11年3月24日に重機によるトレーナー掘削で本市教委が行った。幅1m、長さ4~8mのトレーナーを4ヶ所において設定し、南から順に第1~4トレーナーと呼称した(第55図)。その結果、伝承どおり金トレーナーにおいて池の埋立地を確認した。特に第1・4トレーナーにおいて、池端を確認しており、昭和43年調査の第49図に記されている池が、かつて屋島寺の庫裏にまで広がっていたことが明らかとなった。さらに、第4トレーナー東半分において、溝1条と柱穴6基を確認した(第56図)が、トレーナーからの出土遺物は江戸時代のものしかないとから、これら遺構も江戸時代以降のものと考えられる。図化できた出土遺物は第54図で、250~253は第4トレーナーの池埋土、254は第3トレーナーの池埋土から出土した。250は肥前系磁器鉢で18世紀前半のものである。251は肥前系磁器の端反碗で、19世紀中頃のものである。252は肥前系磁器仏壇器で17世紀後半のものである。253は京信楽系陶器の灯明皿で、18世紀末から19世紀前半のものである。254は土師質土器の火鉢で、19世紀のものである。これら出土遺物の年代から、池の一部を江戸時代末期に埋め立て、その後、屋島寺の庫裏が建築されたと考えられる。このことから、工事に先立つ埋蔵文化財の保護措置は必要ないものと判断した。



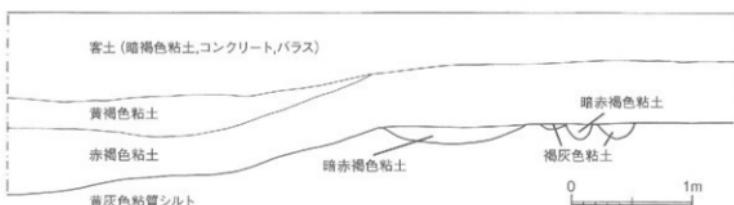
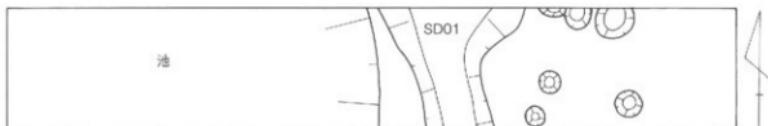
第54図 屋島寺庫裏改築工事に伴う試掘調査第出土遺物実測図 (縮尺1/4)

参考文献

- 石井清司 1995 「鎌倉須恵器」『概説 中世の土器・陶磁器』中世土器研究会編
- 上原真人 2000 「山岳寺院の考古学・総説」『山岳寺院の考古学』大谷女子大学
- 上原真人 2002 「古代の平池寺院と山林寺院」『佛教藝術』265号 毎日新聞社
- 香川県 1986 『香川県史8 資料編 古代・中世史料』
- 角川書店 1985 『角川日本地名大辞典』37 香川県古代の土器研究会編
- 1992 「古代の土器1 郡城の土器集成」
- 佐藤竜馬 2003 「出土瓦の検討」『高松城跡(西の丸町地区) II』香川県教育委員会
- 田邊昭三 1981 「須恵器大成」角川書店
- 中西克也 2005 「高松城跡(無量壽院跡)」高松市教育委員会
- 毛利光俊彦・佐川正敏・花谷浩 1992 「法隆寺の至寶 瓦」法隆寺昭和賞財團編集委員会・小学館
- 藤井聰三 1981 「笠南嶺山上の箇塗」『屋島城跡』高松市教育委員会
- 山崎信二 2000 「中世瓦の研究」雄山閣出版
- 山元敏裕 2003 「史跡天然記念物屋島一史跡天然記念物屋島基礎調査事業調査報告書1-1」高松市教育委員会
- 渡邉明夫 2006 「高松市中山庵跡について~香川における初期山岳寺院とその仏像~」
- 『香川県埋蔵文化財センター研究紀要Ⅱ』



第 55 図 屋島寺庫裏改築工事に伴う試掘調査トレンチ位置図（縮尺 1/1,000）



第 56 図 屋島寺庫裏改築工事に伴う試掘調査第 4 トレンチ平面・土層図（縮尺 1/40）



1 調査前風景（北から、溝は試掘坑）



2 調査前風景（南から、奥は本堂）



3 調査区北側北部全景（北から）



4 調査区北側南部全景（北東から）



5 調査区南側全景（北から）



6 調査区南側全景（南から）



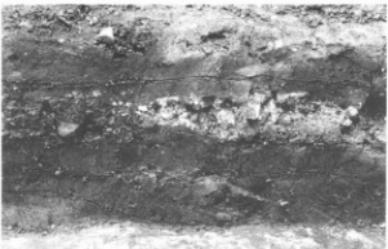
7 調査区南側北部全景（北から）



8 調査区南側南東部全景（北から）



1 調査区壁面①



2 調査区壁面② 南側



3 調査区壁面② 中央



4 調査区壁面② 北側



5 調査区壁面⑤



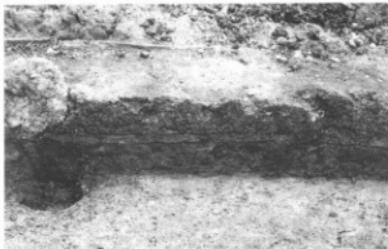
6 調査区壁面⑥



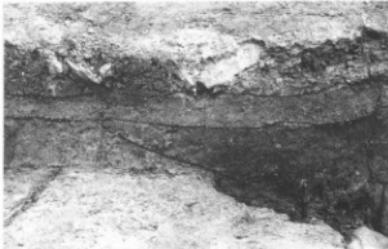
7 調査区壁面⑦



8 調査区壁面⑧



1 調査区壁面⑨ SP17 付近



2 調査区壁面⑨ SP21 付近



3 調査区壁面⑨ 中央



4 調査区壁面⑨ SP58 付近



5 調査区壁面⑨ 南側



6 調査区壁面⑨ 南端



7 調査区壁面⑩ 東側



8 調査区壁面⑩ 西側



1 調査区壁面① 南端



2 調査区壁面① 集石南側



3 調査区壁面① 集石北側



4 調査区壁面① 埋壙付近



5 調査区壁面① SK02 付近



6 調査区壁面② SP63 付近



7 調査区壁面② 中央



8 調査区壁面② 北側



1 SD04全景（北西から、手前はSD05）



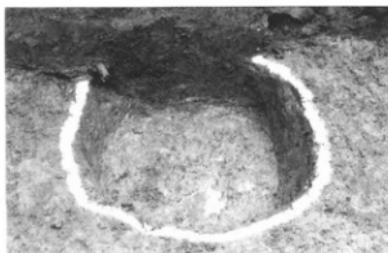
2 SD04南側（北西から）



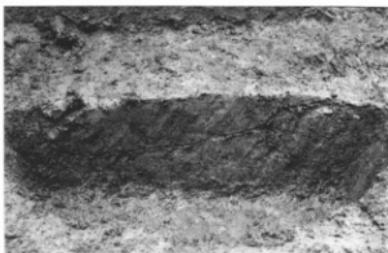
3 SD04南側（南から）



4 SD05全景（北東から）



5 SK01全景（北から）



6 SK01断面（北から）



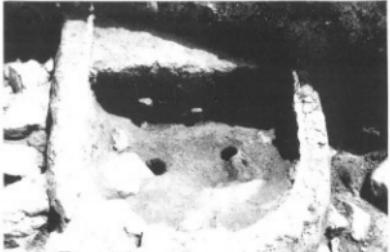
7 SK03東側検出状況（東から）



8 SK03東側全景（北東から）



1 SK03 東側断面 (東から)



2 SK03 西側全景 (西から)



3 SD02・溝状落ち込み(段)検出状況 (北東から)



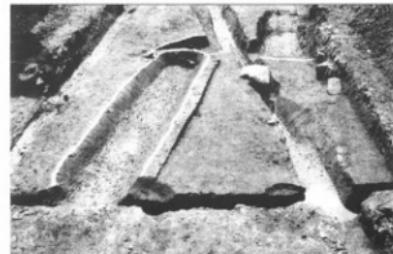
4 SD02・溝状落ち込み(段) 全景 (南西から)



5 溝状落ち込み(段) 断面 (西から)



6 瓦溜め遺構全景 (南西から)



7 瓦溜め遺構全景 (北から)



8 瓦溜め遺構断面 (南から)



1 SX01全景（東から）



2 SX02・SP01全景（北から）



3 SX03全景（北から）



4 SX03全景（南から）



5 埋甕1～3検出状況（北東から）



6 埋甕1～3断面（東から）



7 埋甕2 寛永通宝出土状況（北から）



8 SP01瓦出土状況（北から）



1 SB01全景（西から）



2 集石検出状況（南から）



3 集石全景（北西から）



4 集石全景（北から）



5 集石全景（南から）



6 集石 軒丸瓦出土状況



7 集石 軒平瓦出土状況



8 集石 陶器碗出土状況



35



49



37



51



47



66



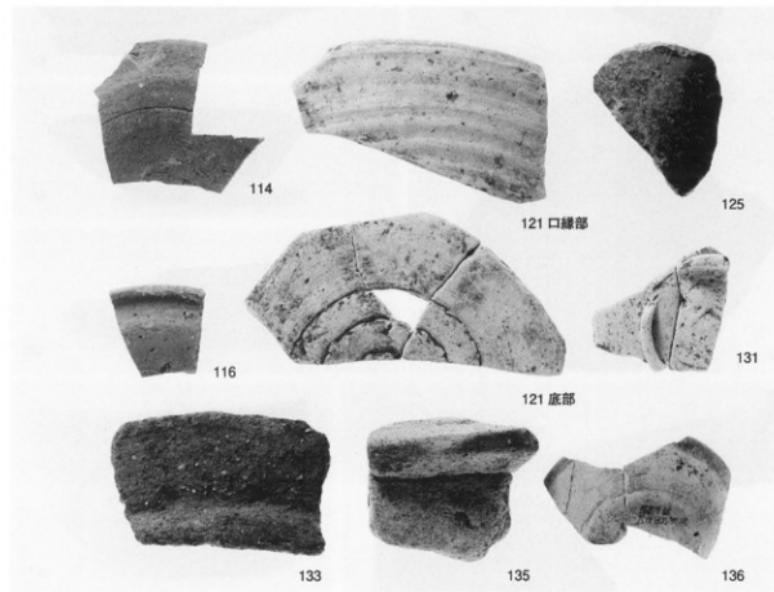
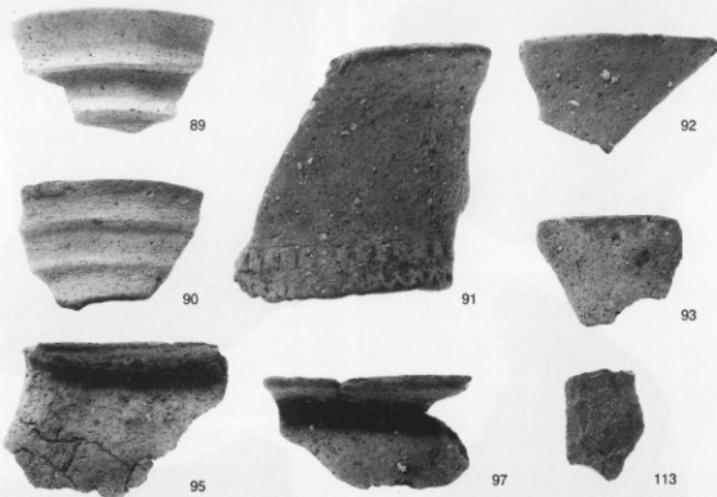
128



49



157







1 水族館試掘調査前風景(北から)



2 水族館試掘No.1・2 トレンチ(北から)



3 水族館試掘No.2・3 トレンチ(東から)



4 水族館試掘No.4 トレンチ(西から)



5 水族館試掘No.7 トレンチ(東から)



6 水族館試掘No.9～11 トレンチ(西から)



7 水族館試掘No.12 トレンチ(北から)



8 水族館試掘No.13 トレンチ(東から)



1 屋島寺西側倉庫トレンチ全景(南から)



2 屋島寺西側倉庫トレンチ深掘



3 鎮守社 北・西トレンチ全景(南から)



4 鎮守社 南・東トレンチ全景(西から)



5 鎮守社 東トレンチ北壁(南から)



6 鎮守社 南トレンチ西壁(東から)



7 鎮守社 西トレンチ南壁(北から)



8 鎮守社 北トレンチ東壁(西から)

報告書抄録

ふりがな	やしまじ						
書名	屋島寺						
副書名	屋島寺宝物館改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書						
卷次							
シリーズ名	高松市埋蔵文化財調査報告						
シリーズ番号	第 107 集						
編著者名	川畠 聰						
編集機関	高松市教育委員会						
所在地	〒 760 - 8571 香川県高松市番町一丁目 8 番 15 号 TEL087 - 839 - 2636						
発行年月日	西暦 2007 年 10 月 31 日						
所取遺跡名	所在地	コード 市町村 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
屋島寺	香川県 高松市 屋島東町	37201	34° 21' 28"	134° 06' 03"	1990.4.5 ~ 1990.5.31	300m ²	宝物館 改築工事
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
屋島寺	集落?	弥生時代 飛鳥時代	包含層 土坑	弥生土器、石器 須恵器、瓦			
	寺院	平安~鎌倉 江戸時代	溝、包含層 土坑、溝	須恵器、土師質土器、瓦 陶磁器、瓦			
要約	本調査は、屋島寺境内で唯一実施された本格的な発掘調査である。確認した遺構、遺物は、寺院以前のものとして弥生時代や飛鳥時代のものがあり、寺院にかかわるものとしては平安時代以降のものを確認した。これにより、平安時代以降における屋島寺の寺院活動を考古学的に証明できた。さらに、現在は平坦地が広がっている境内が、かつては山岳の起伏がある地形であり、時代とともに造成工事を繰り返して、現在の姿になったことが明らかになった。						

屋島寺

—屋島寺宝物館改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

平成 19 年 10 月 31 日

編集 高松市教育委員会
高松市番町一丁目 8 番 15 号
発行 高松市教育委員会
印刷 (有)中央ファイリング